



ギャング

第1巻

目次

予測警察システム①：考えただけで送信が阻止され、AI に調教・支配される時代の到来	20
---	----

第 1 章 事実や意見を言うと弾圧される——戦争反対やナフサ不足の例	21
------------------------------------	----

第 1 章 1 節 偽りを述べる者が称賛されるファシズム時代	21
--------------------------------	----

第 1 章 2 節 「事実や正しい意見を言うと弾圧される」	21
-------------------------------	----

第 1 章 3 節 異次元のレベルで進化している弾圧	22
----------------------------	----

第 2 章 金の力で事実を歪められる——AV 産業と歴史修正の構造	23
-----------------------------------	----

第 3 章 巨額の広告費用で事実を歪める——「同意の偽装工作」の仕組み	25
-------------------------------------	----

第 4 章 「予測警察システム」の現象——考えただけで起きる異変	25
----------------------------------	----

第 4 章 1 節 考えただけで起きる異変	25
-----------------------	----

第 4 章 2 節 人間が因果関係を認識する「時間の壁」	26
------------------------------	----

第 4 章 3 節 考えただけで即座に「通信遮断」	26
---------------------------	----

第 4 章 4 節 X (TWITTER) の高市批判妨害	27
-------------------------------	----

第 4 章 5 節 人体への拷問も	27
-------------------	----

第 4 章 6 節 「神の目」システム	28
---------------------	----

第 5 章 「予測警察システム」の仕組み——なぜ数 100 ミリ秒で阻止できるのか	29
---	----

第 5 章 1 節 予測警察システムとは何か？	29
-------------------------	----

第 5 章 2 節 第 1 層：脳波検知——「思考」を捉えるセンサー	29
------------------------------------	----

第 5 章 3 節 第 2 層：エッジ処理——「意図」をリアルタイムで解析する	30
---	----

第 5 章 4 節 第 3 層：「送信しようとしている」を AI が検知	31
--------------------------------------	----

第 5 章 5 節 第 4 層：送信を物理的にブロック	31
-----------------------------	----

第 5 章 6 節 第 5 層：やがて「諦める」ようになる	32
-------------------------------	----

第 5 章 7 節 まとめ——あなたの「言動や思考」が検閲される時代	33
------------------------------------	----

第 6 章 悪名高い ICE の「どこにその人がいるのかを事前に知っているかのような摘発」	34
---	----

第 6 章 1 節 なぜ「的を絞った摘発」が可能になったのか？	34
---------------------------------	----

第 6 章 2 節 従来の摘発と何が違うのか	35
------------------------	----

第 6 章 3 節 実際の現場での使われ方	35
第 6 章 4 節 調査が示した結論	36
第 6 章 5 節 まとめ——「予測」が「執行」を変えた	36
第 7 章 仕組み 2——なぜ「外部の異変」は数 100 ミリ秒で起きるのか？	38
第 7 章 1 節 なぜ？——身近なデバイスなら数 100 ミリ秒で異変を起こせるのか	38
第 7 章 2 節 なぜ？——外部の救急車や暴走バイクや飛行機は、数 100 ミリ秒で異変を起こせないのか	39
第 7 章 3 節 なぜ？——「予め指令を出しておく」以外に方法がないのか	40
第 7 章 4 節 なぜ？——「予測」がこのシステムの本質である理由	41
第 7 章 5 節 まとめ——「考えただけ」に見える現象の裏側	42
予測警察システム②：人体ハッキングのメカニズム(未完成版)	43
第 8 章 なぜ「正しいことを言う人」が弾圧されるのか？	43
第 8 章 1 節 「正しいことを言う人」が弾圧される社会背景	43
第 8 章 2 節 なぜ強気で脅し続けられるのか？	44
第 8 章 3 節 エプスタイン事件で被害を告発した被害者にも起きている悲劇	44
第 8 章 4 節 エプスタイン事件で被害を告発した被害者が追い込まれた手口	45
第 9 章 人体ハッキング——どんな恐ろしい現象が起きるのか？	47
第 9 章 1 節 「車を自由自在にハッキング」の時代	47
第 9 章 2 節 さらに恐ろしい「人体ハッキング」の時代	47
第 9 章 3 節 「人体ハッキング」の恐ろしさ	48
第 9 章 4 節 身体をハッキングされてるが「犯人も仕組みも不明」	50
第 10 章 なぜ身体は外部から操られるのか？——「意識」と「自動」の分離	51
第 10 章 1 節 人の体は元々自動で動く部分がある	51
第 10 章 2 節 人の身体は元々自動で動く部分がある	51
第 10 章 3 節 不随意（自動）主のもの	52
第 10 章 4 節 随意（意識）主のもの	52
第 10 章 5 節 混合型（自動＋意識）	52
第 10 章 6 節 本人の意思でやってる作業を妨害する仕組み	52

第 11 章 脳のどこで制御しているのか？——脳部位の対応まとめ	54
第 11 章 1 節 制御している脳の部位	54
第 11 章 2 節 外部から操作することは可能なのか？	54
第 12 章 2026 年 1 月 3 日——「予測警察システム」が戦場に登場した日	55
第 12 章 1 節 突然の米軍のベネズエラ侵攻	55
第 12 章 2 節 不可解な攻撃で死亡したキューバ兵士たち	56
第 12 章 3 節 原因は「ゴースト・マーマー(GHOST MURMUR)」？	56
第 12 章 4 節 実は「予測警察システム」だったのでは？	57
予測警察システム③：「磁性ナノ粒子」で脳や身体をコントロールする仕組み(未完成版)	60
第 13 章 諜報機関は人間を支配し、コントロールしようとしてきた	60
第 13 章 1 節 MK ウルトラ計画からエプスタイン・ファイルまで	60
第 13 章 2 節 MK ウルトラ公聴会	60
第 14 章 「NANO-MIND」とは何か？	62
第 14 章 1 節 世界初の磁場による脳遠隔操作技術	62
第 14 章 2 節 実験で実証された行動操作	62
第 14 章 3 節 オプトジェネティクスとの違い	63
第 14 章 4 節 NANO-MIND の技術的優位性	63
第 15 章 独裁的なファシズム政権が手に入れたら？	65
第 15 章 1 節 誰にも知られず遠隔操作の基盤を作る	65
第 15 章 2 節 倫理ガイドラインの必要性	65
第 15 章 3 節 池上彰の番組でも紹介された「脳攻撃兵器」	66
第 15 章 4 節 脳への直接刺激によるハッキング	66
第 16 章 磁性ナノ粒子で送受信やコントロールが可能	68
第 16 章 1 節 磁性ナノ粒子で脳信号を読み取ることは可能か？	68
第 16 章 2 節 読み取った脳信号を外部に送る仕組み	68

第 16 章 3 節	磁性ナノ粒子の動きを常に監視する——MPI 技術.....	69
第 16 章 4 節	なぜこの技術が「ターミネーター」を生み出すのか？	69
第 17 章 磁場の異常が観測されている		71
第 17 章 1 節	ギャングストーキングの被害者の訴えとも一致する	71
第 17 章 2 節	外部から磁場を照射するとピクンと痙攣する.....	71
第 17 章 3 節	スマートハウスで電流や磁場を自在にコントロールできる	72
第 17 章 4 節	デジタルツインで自在にシミュレーション.....	72
第 18 章 磁性ナノ粒子で具体的にコントロールする方法.....		74
第 18 章 1 節	なぜ自分の意思で腹痛を起こせないのに、外部からは起こせるのか？	74
第 18 章 2 節	なぜ「腹がグルグル鳴る」のか？——腹鳴の科学.....	74
第 18 章 3 節	なぜ「急に下痢になる」のか？——下痢のメカニズム	75
第 18 章 4 節	なぜ「急に異臭がする」のか？——嗅覚のハッキング	76
第 18 章 5 節	なぜ「心拍数が急上昇する」のか？——自律神経の操作	76
第 18 章 6 節	なぜ「喉が苦しくなる」のか？——迷走神経と呼吸の操作	77
第 18 章 7 節	「磁性ナノ粒子」以外のナノ粒子	78
第 19 章 昆虫や動物のコントロール.....		79
第 19 章 1 節	なぜ「蜂や蛾が自分に向かって襲ってくる」のか？——昆虫の行動ハッキング	79
第 19 章 2 節	なぜ「猫や犬などの動物が急に鳴き始める」のか？——哺乳類の行動ハッキング	79
第 20 章 なぜ「考えただけで数 100 ミリ秒以内」に起きるのか？		81
第 20 章 1 節	なぜ「外部の異変」は数百ミリ秒以内に起きるのか？——予測のトリック ...	81
第 20 章 2 節	磁性ナノ粒子で脳に「思いつき」を送る仕組み.....	81
第 20 章 3 節	なぜ「外部の異変」は数百ミリ秒以内に起きるのか？	82
第 20 章 4 節	なぜ指示を出すのが AI だと思うのか？人じゃないの？	83
第 20 章 5 節	なぜ「周りの人間が奇妙な行動をとる」のか？——社会工学のハッキング ...	84
第 20 章 5 節 1 項	ポイントや報酬で釣る仕組み	84
第 20 章 5 節 2 項	ボーナスや特典が手に入る仕組み.....	84
第 20 章 5 節 3 項	ポケモン GO の開発元 CEO は CIA の投資機関から資金提供を受けて起業	85

第 21 章	まとめ——なぜ平気で虐殺できるのか？	87
--------	--------------------	----

予測警察システム④：健康被害の仕組みと「簡易対策」——国家テロによる市民迫害(未完成版)	88
--	----

第 22 章（補完）	なぜ身体は外部から操られるのか？——10 個の症状の謎を解く	88
------------	--------------------------------	----

第 22 章 1 節	なぜ「腰痛」が起きるのか？——痛みの信号を大きくする仕組み	88
第 22 章 2 節	なぜ「膝や肘の関節痛で動けなくなる」のか？——炎症と痛みのスイッチを入れる仕組み	89
第 22 章 3 節	なぜ「突然の視界不良で焦点が合わずボヤけて見えなくなる」のか？——目と脳の視覚回路を邪魔する仕組み	90
第 22 章 4 節	なぜ「腕や足や肩の筋肉が急にピクンピクンと痙攣する」のか？——筋肉のスイッチを勝手に押す仕組み	91
第 22 章 5 節	なぜ「皮膚が酷い痒みの炎症になる」のか？——痒みの物質を放出させる仕組み	92
第 22 章 6 節	なぜ「心臓発作」が起きるのか？——心臓の電気の流れを狂わせる仕組み	93
第 22 章 7 節	なぜ「脳出血」が起きるのか？——脳の血管を弱らせて破る仕組み	94
第 22 章 8 節	なぜ「便秘」が起きるのか？——腸の動きを止める仕組み	95
第 22 章 9 節	なぜ「寝られない睡眠障害」が起きるのか？——睡眠のスイッチを壊す仕組み	95
第 22 章 10 節	なぜ「大腸癌」が起きるのか？——細胞の設計図を傷つける仕組み	96
第 22 章 11 節	まとめ——「自分で動かしている部分」と「勝手に動く部分」の境界を突く攻撃	97
第 22 章 11 節 1 項	第 1 のグループ「混合型」	97
第 22 章 11 節 2 項	第 2 のグループ「随意（意識）主」	98
第 22 章 11 節 3 項	第 3 のグループ「自動（不随意）主」	98
第 22 章 11 節 4 項	見えてくる全体像	99

第 2 部	簡易対策編——なぜ？どうやって防ぐ？	101
-------	--------------------	-----

第 23 章	放射線編	101
--------	------	-----

第 23 章 1 節	鉛が放射線を防ぐ仕組み——なぜ鉛は放射線を遮るのか？	101
第 23 章 2 節	放射線防護服——どんな仕組みで身を守るのか？	102

第 24 章	マイクロ波編	103
--------	--------	-----

第 24 章 1 節	マイクロ波とは？——電子レンジと同じ原理.....	103
第 24 章 2 節	アクティブ・ディナイル・システム——皮膚に痛みを感じさせる仕組み.....	103
第 24 章 3 節	マイクロ波で電源を勝手にオンオフできる？——電子機器への影響.....	104
第 24 章 4 節	マイクロ波は水が吸収する——防御のヒント.....	105

第 25 章 車の運転中に急に眠くなる攻撃対策——ダメもとで試してほしい 4 つの方法 106

第 25 章 1 節	対策 1：停車するのがベスト.....	106
第 25 章 2 節	対策 2：水を含んだタオルを首に巻く	106
第 25 章 3 節	対策 3：ジェルパッドを首に巻く	107
第 25 章 4 節	対策 4：首を 45 度傾ける	107
第 25 章 5 節	対策 5：充電池を袋に入れて首の後ろにつける	107

第 26 章 政府が国民を傷つけるシステム——南米の「死の部隊」「汚い戦争」「キャラバン・オブ・デス」 108

第 26 章 1 節	「死の部隊」とは何か？.....	108
第 26 章 2 節	「汚い戦争」——アルゼンチンの国家テロ.....	109
第 26 章 3 節	「キャラバン・オブ・デス」——チリの具体的な殺害作戦.....	110
第 26 章 4 節	なぜ「気づかれないように」できたのか——「失踪」という仕組み.....	111
第 26 章 5 節	まとめ——完全な防御は難しくても	111

予測警察システム⑤：国家テロとイジメは同じ構造——加害組織の「見えない偽装」を読み解く(未完成版) 112

第 27 章 民間人が突如モンスターに？ 113

第 28 章 なぜ加害組織は「見えない」のか？ 114

第 28 章 1 節	足がつかないように「民間に外注」する	114
第 28 章 2 節	日本でも足がつかないように「民間に外注」する.....	115
第 28 章 3 節	「愛国者」や「カルト」は偽装.....	115

第 29 章 なぜ「普通の人」が加害に加担するのか？ 117

第 29 章 1 節	報酬や出世と引き換えに倫理を捨てる	117
第 29 章 2 節	「ゲーム化」された監視.....	117
第 29 章 3 節	「自発的な協力者」が大量に生まれる仕組み.....	118

第 29 章 4 節	労組潰しで多額の報酬	119
第 29 章 5 節	多額の報酬が得られる仕組み	119
第 29 章 6 節	犯罪者をリクルートして手駒にする	120
第 29 章 7 節	日本にもあった A 級戦犯の釈放	121

第 30 章 鬼滅の鬼と同じピラミッド構造 122

第 30 章 1 節	まず「鬼滅の刃」とは何か？——鬼の組織を理解する	122
第 30 章 2 節	加害組織の構造は鬼と同じ	123
第 30 章 3 節	見捨てられた MAGA	124
第 30 章 4 節	罪悪感を感じにくい「悪魔のシステム設計」	124
第 30 章 4 節 1 項	ナチスの「悪魔のシステム設計」	125
第 30 章 4 節 2 項	現代の加害組織も同じ設計	125
第 30 章 4 節 3 項	システムを設計した者は「真の悪魔」である	127

第 31 章 なぜ「国家が国民を傷つける国家によるテロ」と「学校のイジメ」が同じなの か？ 128

第 31 章 1 節	「国家が国民を傷つける国家によるテロ」と「学校のイジメ」は同じ	128
第 31 章 2 節	イジメの 4 層構造とは？	128
第 31 章 3 節	PHASE 1【選定】——「次のターゲット」はこうして決まる	129
第 31 章 4 節	PHASE 2【監視】——本人が知らないうちに「弱みの収集」が始まる	130
第 31 章 5 節	PHASE 3【ストーキング】——「自分だけがおかしいのかな」という錯覚を作 る	131
第 31 章 6 節	PHASE 4【信用破壊】——「孤立」を制度化する	132
第 31 章 7 節	PHASE 5【攻撃】——「正当化」された暴力の実行	133
第 31 章 8 節	PHASE 6【継続的監視】——「逃げ場のない状態」を維持する	134
第 31 章 9 節	イジメの本当の構造について	135

第 32 章 なぜイジメは「利益」を生むのか？ 136

第 32 章 1 節	なぜイジメが無くならないのか？	136
第 32 章 2 節	イジメ加担で得られる「搾取の利益」リスト	137
第 32 章 3 節	搾取できる「勝ち組」	139
第 32 章 4 節	地域の支配と搾取を安定させる	140

予測警察システム⑥：モニタリングされる恐怖——なぜ「まともな人」が自殺や裏切りに追 い込まれるのか？(未完成版) 141

第33章 なぜギャングストーキングは「自殺に追い込む」のか？ 141

第33章1節 普通のイジメとギャングストーキングの違いは？	141
第33章2節 被害者をモニタリングしながら弱点を突いて確実に追い込む	141
第33章3節 被害者をモニタリングしている	142
第33章4節 モニタリングしている工事業者	143
第33章5節 モニタリングする目的	144
第33章6節 突然現れる虫や動物や人	144
第33章7節 「敵が嫌がる👉だから正しい」と嫌がらせを正当化する日本人の増加	145
第33章7節1項 なぜ、この論法は間違っているのか？	146
第33章7節2項 この論法が「加害者の論理」である理由	146
第33章7節3項 この論法が「嫌がらせ」と結びつくとき	147
第33章7節4項 この論法に騙されないためには	147
第33章8節 加害者を追及すると自殺に追い込まれる事件	148
第33章9節 どのような人物が「危険人物」としてマークされるのか？	149
第33章10節 虐殺するイスラエル🇮🇱を熱烈に支持するファシズム企業🇩🇪	150
第33章11節 被害者に選定されるのは共産主義者？	150

第34章 特殊な加害の手口 152

第34章1節 なぜ「対向車のライトが眩しく感じる」のか？——2つの攻撃経路	152
第34章1節1項 2つの攻撃経路	152
第34章1節2項 なぜ「日によって眩しく感じたり感じなかったりする」のか？	153
第34章1節3項 まとめ——「眩しさ」は2つの経路で人工的に作れる	153
第34章2節 ストーリーシアター	154
第34章2節1項 ストーリーシアターとは何か？	154
第34章2節2項 どんな「芝居」があるのか？	154
第34章2節3項 「芝居」をする狙いは何なののか？	155
第34章3節 偽旗作戦	155
第34章3節1項 偽旗作戦とは何か？	155
第34章3節2項 偽旗作戦の具体事例	156
第34章3節3項 被害者を陥れて無関係な人と争わせるため	156
第34章3節4項 真の加害者を永久に隠し続ける悪質な仕組み	157
第34章4節 エコーチェンバー	157
第34章4節1項 エコーチェンバーとは何か？	157
第34章4節2項 「捏造された被害者像」が共有される	158
第34章4節3項 情報伝達ネットワークで台本通り	159
第34章4節4項 レッテルを貼られた被害者は自己嫌悪になる	159
第34章4節5項 「真犯人を隠す」ために機能する	160

第35章 思考と感情をモニタリングされる恐怖——「心を読まれる」時代の最も危険なリスク.....161

第35章1節 思考や感情をモニタリングできるとどんな恐ろしいことができるのか？	161
第35章2節 ① 完全な「感情の操作」——絶望のタイミングを狙って追い打ちをかける	162
第35章3節 ② 完璧な「ガスライティング」——相手の現実認識を根本から破壊する	162
第35章4節 ③ 「弱点の完全な把握」——人間関係を破壊し、完全に孤立させる	163
第35章5節 ④ 「先回りの支配」——反撃や抵抗をすべて事前に封じる	164
第35章6節 ⑤ 「拷問の完全な設計」——相手が最も苦しむ方法を正確に選べる	164
第35章7節 ⑥ ファシストたちが支配して就職や生存が不可能になる	165
第35章7節1項 建前は「思想調査禁止」、実際は横行する監視	165
第35章7節2項 すでに始まっている「ブラックリスト」社会	166
第35章7節3項 残された道は「兵隊か低賃金奴隷労働」、女性は「結婚か性奴隷」	167
第35章7節4項 アルゴリズム管理が「自己監視」を強制する	167
第35章7節5項 まとめ——「まともな人間」が生き残れない社会	168
第35章8節 まとめ——「心の自由」という最後の砦が奪われる	169

第36章 まとめ——なぜ加害組織は「見えない」のか？.....171

第36章1節 加害組織が「見えない」仕組み	171
第36章2節 精神疾患や陰謀論者、加害者に仕立て上げられてきたから	171

予測警察システム(7)：「脳間通信」が生み出す話の通じない「支配者心理」とナノ粒子対策(未完成版).....173

第37章 なぜ脳間通信は「支配」を生むのか——心理メカニズムの謎解き.....173

第37章1節 「脳間通信」という技術	173
第37章2節 トランプ大統領のイラン戦略	173
第37章3節 なぜモニタリングがあると「交渉」しなくなるのか？	174
第37章4節 なぜ「降参するまで攻撃し続ける」のか？	175
第37章5節 心理メカニズム——なぜ傲慢で支配的になるのか？	175
第37章6節 なぜ共感が減るのか？——共感是不確実性の中で育つ	176
第37章7節 なぜ道徳的免責が起きるのか？——脱人間化と正当化	177
第37章8節 なぜ支配者気質が強化されるのか？——自己選抜と環境	178
第37章9節 なぜ悪循環になるのか？——フィードバックループ	178
第37章10節 まとめ——技術が人格を変えるのではなく、環境が人格を歪める	179

第 38 章 米軍の脳間通信技術——SILENT TALK から N3 へ..... 181

第 38 章 1 節	SILENT TALK 計画とは何か——「声に出さずに会話する」技術.....	181
第 38 章 2 節	なぜ「発声前」の脳信号なのか？——PRE-SPEECH の仕組み	181
第 38 章 3 節	軍事利用の観点——「1 秒前」の情報は何に使えるか	182
第 38 章 4 節	N3 プログラムとは何か——「手術なしで脳と機械をつなぐ」壮大な計画...	183
第 38 章 5 節	脳同士を接続する仕組み——3 つのステップで理解する	183
第 38 章 5 節 1 項	ステップ 1：脳活動を「読み取る」——デコーディングの仕組み	184
第 38 章 5 節 2 項	ステップ 2：読み取った情報を「別の脳に書き込む」——エンコーディングの仕組み.....	184
第 38 章 5 節 3 項	ステップ 3：脳と外部デバイスをつなぐ「ナノトランスデューサー」.	184
第 38 章 6 節	NHK のクローズアップ現代の N3 の放送.....	185
第 38 章 7 節	視覚情報を共有する具体的な実験——「目が見えない人に視覚を届ける」	186
第 38 章 8 節	脳間通信の兵士システム——「沈黙のコミュニケーション」から「機械の直感操作」へ.....	186
第 38 章 9 節	まとめ——「いつ、何が読み取れるか」の全体像.....	187

第 39 章 磁性ナノ粒子の研究と製造..... 188

第 39 章 1 節	そもそも磁性ナノ粒子とは何か.....	188
第 39 章 2 節	イスラエル——「研究開発型」の強み	189
第 39 章 3 節	アメリカ——「スケール」と「多様性」の強み	189
第 39 章 4 節	台湾——「応用特化型」の強み.....	190
第 39 章 5 節	日本——「素材技術」の底力	191
第 39 章 6 節	まとめ——世界の磁性ナノ粒子製造マップ.....	192

第 40 章 磁性ナノ粒子システムへの対抗策——今日からできること..... 194

第 40 章 1 節	対抗策の基本方針——「入れる」「動かす」「感じる」を分断する.....	194
第 40 章 2 節	第 1 層：吸入そのものを減らす（最も即効性が高い）	194
第 40 章 2 節 1 項	具体的な方法①：N95 マスクの着用	195
第 40 章 2 節 2 項	具体的な方法②：空気清浄機の稼働.....	195
第 40 章 2 節 3 項	具体的な方法③：鼻腔洗浄	195
第 40 章 3 節	第 2 層：磁場と電子デバイスの影響を減らす	196
第 40 章 3 節 1 項	「3 つの 60 原則」	196
第 40 章 3 節 2 項	耳机・手机の听筒を清潔に保つ.....	196
第 40 章 3 節 3 項	睡眠時のデバイス管理	196
第 40 章 3 節 4 項	磁性ナノ粒子による磁気シールド	196

第 40 章 3 節 5 項 具体的な方法.....	197
第 40 章 4 節 第 3 層：体内に入った粒子の排出を促す	197
第 40 章 4 節 1 項 消化管を正常に保つ	197
第 40 章 4 節 2 項 運動による代謝促進.....	198
第 40 章 4 節 3 項 体外磁気フィルターによる血液浄化.....	198
第 40 章 5 節 第 4 層：神経保護と抗酸化	198
第 40 章 5 節 1 項 メラトニンとオメガ 3 脂肪酸.....	198
第 40 章 5 節 2 項 抗酸化物質の摂取.....	199
第 40 章 5 節 3 項 食事の基本.....	199
第 40 章 6 節 第 5 層：日常生活の調整.....	199
第 40 章 6 節 1 項 環境の磁場源を把握する	199
第 40 章 6 節 2 項 就寝環境の最適化.....	199
第 40 章 6 節 3 項 電磁波防護服の活用（条件付き）	199
第 40 章 7 節 第 6 層：緊急時の対応と記録.....	200
第 40 章 7 節 1 項 異常を感じたときの即時対応	200
第 40 章 7 節 2 項 証拠の記録.....	200
第 40 章 8 節 根本的な課題——なぜ完全な防御が難しいのか.....	200
第 40 章 8 節 1 項 なぜ完全な防御が難しいのか	200
第 40 章 9 節 まとめ——「知ること」が最初の防御	201

第 41 章 おわりに——支配の連鎖を断ち切るために..... 202

予測警察システム⑧：電場でも人体を操るナノ粒子——完全監視が選挙を成立させなくして
極右が支配する未来(未完成版)..... 203

第 41 章 はじめに..... 203

第 42 章 加害組織について..... 203

第 43 章 ブログを公開後の異変報告..... 204

第 43 章 1 節 ブログを公開後の異変報告.....	204
第 43 章 2 節 モニタリングの弊害	204

第 44 章 電場で人体操作できるナノ粒子とメカニズム..... 206

第 44 章 1 節 電場で動くナノ粒子	206
第 44 章 2 節 圧電性ナノ粒子——「圧力を電気に変える」小さな発電機	206

第 44 章 3 節	電場応答性ナノ粒子——外部電場で直接刺激する	206
第 44 章 4 節	腹鳴が起きる共通の経路	207
第 44 章 5 節	磁性ナノ粒子との違い	207
第 45 章 電場で腹鳴を起こすメカニズム		209
第 45 章 1 節	活動電位と電場	209
第 45 章 2 節	2 V/M の電場——神経反射の“スイッチ”を入れる	209
第 45 章 3 節	148 V/M の電場——筋肉やナノ粒子を直接刺激する	210
第 45 章 4 節	仕組み①：平滑筋を直接刺激する	210
第 45 章 5 節	仕組み②：ナノ粒子を介して刺激する	210
第 45 章 6 節	まとめ	211
第 46 章 証拠？水の中に？		212
第 46 章 1 節	外出妨害	212
第 46 章 2 節	スポンジに含んだ水でマイクロ波を吸収	212
第 47 章 「N3 兵士」と「極右が勝てる仕組み」		213
第 47 章 1 節	「N3 兵士」とは？	213
第 47 章 2 節	完全モニタリングしている兵士の状態	213
第 48 章 まとめの前に——完全モニタリングで「野党が極右政党に負け続ける理由」と「勝てなくなった理由」		215
第 48 章 1 節	なぜ、完全モニタリング下では「通常選挙が成立しない」と言えるのか？	215
第 48 章 2 節	なぜ、野党は極右政党に負け続けるのですか？	215
第 48 章 3 節	具体的に、どんな仕組みで野党は「勝てなくなる」のですか？	216
第 48 章 3 節 1 項	仕組み①：思考の事前把握と先回り	217
第 48 章 3 節 2 項	仕組み②：エコーチェンバーによる「捏造された野党像」の拡散	217
第 48 章 3 節 3 項	仕組み③：投票意欲の「管理」	218
第 48 章 3 節 4 項	でも、野党が SNS で発信すれば、監視を逃れられるのでは？	218
第 48 章 3 節 5 項	選挙で勝てる可能性は残っているのですか？	219
第 49 章 まとめ——「知ること」が最初の防御		220

予測警察システム⑨：一般市民を恐怖に陥れる「ギャングストーキング」は「N3 兵士」の市街地戦？(未完成版).....	221
--	-----

第 50 章 複数の操作チャンネルを持っている可能性.....	221
---------------------------------	-----

第 51 章 「N3 兵士」とは何か？——予測能力を持つ「超人的なエース兵士」.....	223
--	-----

第 52 章 日常空間での心理的圧迫・監視・威圧——「N3 兵士」の具体的な手口.....	224
---	-----

第 52 章 1 節 「N3 兵士」がバイクでターゲットを追跡・包囲する	224
第 52 章 1 節 1 項 バイクでの追跡は、どうやって行われるのか？	224
第 52 章 1 節 2 項 複数の「N3 兵士」が連携する場合は、どうやって息を合わせるのか？	225
第 52 章 1 節 3 項 包囲の具体的な構成は？	225
第 52 章 2 節 「N3 兵士」が護送船団でターゲット車を包囲する方法.....	226
第 52 章 2 節 1 項 護送船団による包囲とは、具体的にどんなものか？	226
第 52 章 2 節 2 項 ターゲットが反撃しようとしたら、どうなるのか？	226
第 52 章 2 節 3 項 救急車はどうやってサイレンを鳴らすのか？	227
第 52 章 3 節 「N3 兵士」がスーパーやダイソーに集まってくる方法.....	228
第 52 章 3 節 1 項 なぜガラガラの店に急に客が増えるのか？	228
第 52 章 3 節 2 項 イスラエルの報酬システムと同じ構造.....	228
第 52 章 3 節 3 項 具体的な動き	229
第 52 章 3 節 4 項 何のためにやるのか？	229
第 52 章 4 節 工事の騒音のタイミングを使う方法	230
第 52 章 4 節 1 項 なぜ工事音が使われるのですか？	230
第 52 章 4 節 2 項 工事音の場合、どんなタイミングで音が出るのか？	230
第 52 章 5 節 宅配便のタイミングを使う方法.....	230
第 52 章 5 節 1 項 なぜ宅配便が使われるのか？	231
第 52 章 5 節 2 項 宅配便の場合は？	231
第 52 章 6 節 上空旋回と低空飛行による監視.....	231
第 52 章 6 節 1 項 空からの監視は、どうやって行われるのか？	232
第 52 章 6 節 2 項 具体的な動きを教えて	232
第 52 章 6 節 3 項 どうやって「見られている」と意識させるのか？	232
第 52 章 7 節 「N3 兵士」の心理変化——なぜ「支配者」になるのか？	233
第 52 章 7 節 1 項 なぜこのような行為に抵抗を感じないのか？	233

第 53 章 弾圧が反発を生み、反発が予算を生む——監視と嫌がらせが「治安ビジネス」の口実になる構造.....	234
---	-----

第 53 章 1 節	パレスチナで起きていること	234
第 53 章 2 節	なぜ「監視」と「嫌がらせ」がセットなのか？	235
第 53 章 3 節	弾圧が「反発」を生む——なぜわざと反発させるのか？	235
第 53 章 4 節	「反発を口実に予算を増やす」構造	236
第 53 章 5 節	日常空間での嫌がらせ——「見せしめ」としての機能	236
第 53 章 6 節	「安全」という名の予算——なぜ終わらないのか？	237
第 53 章 7 節	おわりに——「なぜ？」を問い続けること	238

第 54 章 知らない間に皮膚に切り傷ができています——電場とナノ粒子の複合メカニズム 239

第 54 章 1 節	なぜ「知らない間に切り傷」ができるのか？	239
第 54 章 2 節	電場が細胞膜を「引き裂く」仕組み	239
第 54 章 3 節	なぜ「知らない間」なのか？	240
第 54 章 4 節	アザ（皮下出血）ができるメカニズム	240

第 55 章 尿や便からナノ粒子を検出できるか？——研究レベルの現状..... 242

第 55 章 1 節	体内に入った磁性ナノ粒子を、尿や便から検出することはできるのか？	242
第 55 章 2 節	なぜ尿や便で検出するのか？	242
第 55 章 3 節	具体的にどんな検出技術があるのか？	243
第 55 章 4 節	なぜ「簡単ではない」のか？	243
第 55 章 5 節	自分でできることはあるか？	243

第 56 章 金属で頭を覆えば防げるか？——「電場」と「磁場」のシールドは別物..... 245

第 56 章 1 節	金属で頭を覆うことで、磁性ナノ粒子の通信や挙動を軽減できるか？	245
第 56 章 2 節	「電場」と「磁場」のシールドは根本的に違う	245
第 56 章 3 節	磁場を遮断するには「高透磁率」の金属が必要	246
第 56 章 4 節	磁性ナノ粒子の「通信」と「挙動」への効果	246
第 56 章 5 節	現実的な評価——「できること」と「できないこと」	247

予測警察システム⑩：脳間通信の技術開発の歴史と「加害者と被害者の 2 極化」の仕組み——なぜ同じ磁性ナノ粒子が「通信」と「拷問」に分かれるのか？(未完成版)..... 248

第 57 章 脳間通信は「妄想」ではない——80 年の研究が示すもの..... 248

第 58 章 諜報機関の「思考の送受信」の研究の歴史..... 249

第 58 章 1 節 第 1 期：冷戦時代の「超能力」研究——MK ウルトラとコップファーク計画 (1950 年代～1970 年代)	249
第 58 章 1 節 1 項 なぜ諜報機関が「思考の送受信」を研究し始めたのか？	249
第 58 章 1 節 2 項 「MK ウルトラ計画」と隠蔽	250
第 58 章 1 節 3 項 「コップファーク計画」と「ARD デバイス」	250
第 58 章 1 節 4 項 なぜ冷戦時代の研究は「失敗」とされたのか？	250
第 58 章 2 節 第 2 期：DARPA の「テレパシー」研究——SILENT TALK 計画 (2009 年)	251
第 58 章 2 節 1 項 2009 年に突然 DARPA の「テレパシー」研究が復活	251
第 58 章 2 節 2 項 声を使わず通信する「SILENT TALK 計画」	251
第 58 章 2 節 3 項 真相は不明だが。。。	252
第 58 章 3 節 第 3 期：N3 プログラムと BRAINSTORMS——「手術なしで脳と機械をつなぐ」 (2018 年～2026 年)	252
第 58 章 3 節 1 項 後継として「N3 プログラム」を開始	253
第 58 章 3 節 2 項 中核技術「BRAINSTORMS」	253
第 58 章 3 節 3 項 N3 プログラムは『完了』と宣言	254
第 58 章 4 節 第 4 期：ナノ粒子双方向 BCI の現在——スパイ活動の新たな手段 (2026 年～)	254
第 58 章 4 節 1 項 その後のナノ粒子を使った双方向 BCI の研究	254
第 58 章 4 節 2 項 欧州議会議員が文書を公表	255

第 59 章 加害組織について——なぜ「誰がやっているのか」わからないのか？

第 59 章 1 節 なぜ、加害者の正体がわからないのか？	256
第 59 章 2 節 第 1 層：加害者（諜報機関）	256
第 59 章 3 節 第 2 層：加害者（司令塔）	257
第 59 章 4 節 第 3 層：加担者（N3 兵士）	257
第 59 章 5 節 第 4 層：傍観型加担者	258
第 59 章 6 節 第 5 層：傍観者	258
第 59 章 7 節 第 6 層：被害者	258

第 60 章 加害者と被害者に使われるナノ粒子の違い——「通信」と「攻撃」は紙一重

第 60 章 1 節 「加害者に使われるナノ粒子」と「被害者に使われるナノ粒子」の違い	260
第 60 章 1 節 1 項 「加害者に使われるナノ粒子」	260
第 60 章 1 節 2 項 「被害者に使われるナノ粒子」	261
第 60 章 2 節 「加害者に使われるナノ粒子」の「脳間通信」の仕組み	261
第 60 章 3 節 「被害者に使われるナノ粒子」の「身体加害」の仕組み	262
第 60 章 4 節 比較表——一目でわかる違い	262
第 60 章 5 節 なぜ「同じ磁性ナノ粒子」なのに用途が違うのか？	262

第 60 章 6 節 「新たなマインドコントロール技術」被害者に悪夢を見せる仕組み？	263
第 61 章 まとめ——「通信」と「攻撃」は、別の技術ではなく、同じ技術の「表と裏」 264	
予測警察システム⑪：恐るべき見えない加害者との『コミュニケーション』方法——思考監視と身体攻撃が作る支配の構造	265
はじめに	265
第 62 章 前回のおさらい——「被害者」と「加害者」の違いは何か？	266
第 63 章 なぜ被害者は加害者と「コミュニケーション」ができてしまうのか？——イジメと同じ「見えない加害者」の設計	267
第 63 章 1 節 なぜ加害者の正体がわからないのか？	267
第 63 章 2 節 なぜ「姿を隠して脅す」必要があるのか？	267
第 64 章 音による攻撃——なぜ「考えただけで音が鳴る」のか？	269
第 64 章 1 節 第 1 段階：思考のリアルタイム監視	269
第 64 章 2 節 第 2 段階：双方向通信ネットワーク	269
第 64 章 3 節 第 3 段階：距離ごとの時間差を計算した「先回り」指令	270
第 64 章 4 節 第 4 段階：思考と音の「同期」が生む調教効果	270
第 64 章 5 節 第 5 段階：N3 兵士の役割と全体像	271
第 65 章 周囲の反応を使った攻撃——電車やバスで「監視されている」と意識させる手法 272	
第 65 章 1 節 反復と時間同期	272
第 65 章 2 節 視線と非言語シグナル	272
第 65 章 3 節 位置取りと近接	272
第 65 章 4 節 ミラーリングと同調	273
第 65 章 5 節 小道具とスマホ	273
第 65 章 6 節 降車・乗り換えの一致	273
第 65 章 7 節 音と咳	273
第 65 章 8 節 他者を使った間接圧力	273
第 65 章 9 節 電車が急に止まったりする	273
第 65 章 10 節 オンオフとガスライティング	274

第 66 章 身体ハッキングによる攻撃——思考した瞬間に腹が鳴る仕組み..... 276

第 66 章 1 節	なぜ「腹がグルグル鳴る」のか？	276
第 66 章 2 節	なぜ「急に下痢になる」のか？	277
第 66 章 3 節	なぜ「急に異臭がする」のか？	277
第 66 章 4 節	外出しようとするときと激しい拷問被害に	277
第 66 章 5 節	なぜ「逃げられない密室」が重要なのですか？	278
第 66 章 6 節	なぜ「密室や閉鎖空間」が作れるのか？	279

第 67 章 なぜここまでして音や身体攻撃をするのか？——古典的条件付けによる「見えないコミュニケーション」の確立..... 280

第 68 章 「自発的に自滅させる」技術——なぜ矛盾した言動をするようになるのか？ 282

第 69 章 加害組織のピラミッド構造——なぜ「誰が指示しているのか」わからないのか？ 284

第 69 章 1 節	なぜ加害者の正体がわからないのか？	284
第 69 章 2 節	加害組織の構造	284
第 69 章 3 節	加害者の「表と裏」——鬼の本性はどこで現れるのか？	285
第 69 章 4 節	なぜ、この構造が「ファシズム」につながるのか？	286
第 69 章 5 節	なぜ「バレても話をすり替える」のか？	287
第 69 章 6 節	罪悪感を消す仕組み	288

第 70 章 まとめ——「脳内通信」が生む支配と従属のメカニズム 289

第 70 章 1 節	はじめに——「安全」のからくり	289
第 70 章 2 節	一般国民にとっては安全や自由は完全に失われている」	289
第 70 章 3 節	脳内通信が生む「支配者」と「奴隷」の非対称.....	290
第 70 章 4 節	見えないコミュニケーションと調教.....	290
第 70 章 5 節	エコーチェンバーとファシズム.....	291
第 70 章 6 節	「自発的に自滅させる」技術.....	291
第 70 章 7 節	それでも、できること——知る・記録する・つながる.....	292
第 70 章 8 節	まとめ.....	292

予測警察システム①：考えただけで送信が阻止され、AIに調教・支配される時代の到来

皆さん、核兵器以上の大量虐殺兵器で人類を支配する兵器があるのをご存知でしょうか？最近、あまりにその「予測警察システム」による妨害が酷いので、少しまとめることにしました。全体像がわかっているわけではないので、分かっているところからブログ形式で書いていきます。

もし同じような異変を感じたことがある方は、参考にしてみてください。

X(Twitter)をざっくり見ても、「いいねやリツイートが消える」「投稿しようとしたらエラーが出て投稿できない」「不都合な投稿でアカウントがロックされた」と言う被害報告が溢れています。しかも、天皇陛下の娘さんの「愛子様」の投稿で起きるのです。今回からはこのような投稿妨害や発信妨害について書いていきます。

【激ヤバ】

この愛子さまポストいいね、が消される

なんて、あるわけないやろ!酷い陰謀論

って思ったら、あれ？ハートが赤から♡に!?

元刑事なので似た画像ポストが沢山あるのか？と思い時刻含めた写真撮ったが1時間後 やっぱ赤いハートが白ハート♡に戻って、いいねが消えてる！マジか!?

誰か元刑事の私もお手上げのこの怪奇現象、説明できる人お願いします(汗)mm

第1章 事実や意見を言うとは弾圧される——戦争反対やナフサ不足の例

第1章1節 偽りを述べる者が称賛されるファシズム時代

石破政権時代までは、ファシズム化しつつも、なんとかギリギリ理性や正気を保っている感じでした。しかし、トランプの政権転覆工作で高市政権に変わった途端、一気にファシズム化・軍国主義化が進んだのは、皆さんご存知だと思います。

かつてこの価値観の逆転を、戦争を体験した日本の皇族が端的な言葉で表しています。三笠宮崇仁親王は、戦後の「紀元節」復活論議に際して、歴史学者（オリエント史）として考古学的・歴史学的に根拠のない神話を史実として扱うことに反対し、次のように述べられました。

「偽りを述べる者が愛国者とたたえられ、真実を語る者が売国奴と罵られた世の中を、私は経験してきた。」

この言葉は80年前の話ではありません。今この瞬間の世界を見回せば、日本でもアメリカでもイスラエルでも、驚くほど同じことが繰り返されているのがわかるはずです。

第1章2節 「事実や正しい意見を言うとは弾圧される」

まず、この問題を考える出発点として、「事実や正しい意見を言うとは弾圧される」という現象から見ていきましょう。

「#ママ戦争を止めてくるわ」——そう言って、うさぎの可愛い絵で戦争反対を訴えた人がいました。しかし、その人はネトウヨと呼ばれる人々から集団リン

チを受け、黙らされてしまいました。戦争反対という、ごく当たり前の意見を言っただけなのに、です。

2026 年 5 月、カルビーは中東情勢の緊迫化に伴うナフサ不足のため、ポテトチップスなど主力 14 商品のパッケージを、カラフルな袋から銀色の包装に変更すると発表しました。高市早苗首相は「ナフサ由来の化学製品の供給は年を越えて継続できる見込み」と説明しましたが、現場では供給不足が続いていました。

この「ナフサ不足」を指摘することは、高市政権の能力不足を明らかにすることにつながります。そこで、国民の反発が高まることを恐れて、事実を言う人が集団リンチされて黙らされていく——まるでニーメラーのように、「事実を言う人が黙らされていく仕組み」ができあがっているのです。

第 1 章 3 節 異次元のレベルで進化している弾圧

実は、事実を述べたり告発するとネトウヨの集団リンチを受けて凍結される、という仕組みは 2〜3 年前、いやもっと昔からありました。しかし、多くの日本人が関心を持たず見て見ぬフリをするので、ずっと解決されずに放置されていたのです。

例えば、筆者はかつて X (Twitter) のアカウントを 10 個くらい持っていましたが、事実を発信していると次から次へと凍結され、「永久凍結」されてしまいました。新しいアドレスでアカウントを作成しても、1 日以内に「新しいアカウントが永久凍結」されるようになってしまったのです。しかも、凍結解除の依頼をいくら送っても無視されました。

そして最近、監視技術が驚くべき異次元のレベルで進化しています。

第2章 金の力で事実を歪められる——AV 産業と歴史修正の構造

元々この世界は、かなり虚構の世界です。特に西側諸国——アメリカ、ヨーロッパ、日本は。金さえあれば、嘘をついてくれる人をいくらでも雇えるのが特徴です。

例えば、同じ女性でも、大金を積めば「チ●ポ欲しい」「中出しして欲しい」と、本音や事実と異なることを言ってくれる女性を雇うことができます。一方で、「チ●ポなんか要らない」「ゴムをして欲しい」「同意の性教育をして欲しい」と「事実」を言っても、金を貰えないし、アンフェなどの男たちや商売の邪魔になる AV 女優などに集団リンチされるわけです。

これは AV 産業だけの話ではありません。振り返ってみると、歴史修正や歴史改竄も、売れなくなった芸人や一攫千金を狙いたい若い男たちが熱心に主張していたものでした。「従軍慰安婦はいなかった」「南京虐殺はなかった」「改憲賛成」「中国人はマナーが悪い」「韓国人は反日だ」と言うとお金が貰えるので、言い続けたのでしょ

う。一方で、「従軍慰安婦はいた」「南京虐殺はあった」「改憲反対、護憲」「戦争反対」「中国や韓国と仲良く」と「事実」を言っても、金を貰えないし、雇われたネトウヨなどの男たちに集団リンチされて黙らされるわけ

です。つまり、「事実」を述べると得をしないだけでなく、場合によっては集団で叩かれたり、損しかしない仕組みが日本にはできているわけです。権力者や金持ちや男に媚びて相手が望む言葉を言うと、例え大勢の女性が嫌な思いをするようになったり、戦争で大勢の日本人を殺すことになったりしても、無責任で責任を追及されることなく、逆に出世したり金を貰ったり報酬が得られるわけです。まあ、現実はまだ少し複雑で、金の流れも報酬や報復も様々なものですが、大筋の流れはそうなっているようです。

例えば、大日本帝国🇯🇵と同じくガザ🇵🇸ジェノサイド💀をしているイスラエル🇮🇱ですが、イスラエル🇮🇱擁護をするインフルエンサーは、何百万円もの謝礼を貰えるそうです。例えば、関西生コンで労組潰しをしていた右翼は、月給 80 万円

を貰って、労組の組合員のデマや誹謗中傷を流して、嫌がらせをしていたようです。

なので、ネトウヨの特徴である「権力者や富裕層や金融エリートに媚びて人の足を引っ張る」「正しいことや正論を述べる出る杭を打つ」「強い者には媚びる」「同調圧力をかけて黙らせる」などの性格の日本人が大勢いて、彼らが報酬と引き換えに多くの人たちを苦しめている構造が浮かび上がってきます。

生活が良くなならない、どんどん生活が苦しくなるというのは、搾取している権力者や富裕層や金融エリートと自分達の利益を守るために戦うのではなく、権力者や富裕層や金融エリートに媚びる人たちが増えているからだということがわかります。倫理観や道徳さえ捨ててしまっただけで罪悪感を感じなくなれば、多額の報酬が得られるのです。

トランプも戦争犯罪を犯して、イランの人々やアメリカ人や MAGA まで傷つけて、莫大な報酬を得ていますよね？ コツコツ働いて儲けるより、武力で脅迫したり、弱みを握って脅して搾取した方が楽しくて儲けられる、そういうわけです。

まあ、とりあえず、「まともな人を傷つけると儲かる」そういう仕組みになっているという話が前提になります。

第3章 巨額の広告費用で事実を歪める—— 「同意の偽装工作」の仕組み

さらに深刻なのは、巨額の広告費をかけて戦争や改憲を煽ると同時に、戦争反対していると戦場に送られると脅して、助かりたかったら改憲に賛成しろ、弱みを握られてバラされたくなかったら改憲に賛成しろ、などと脅しが水面下で広がっていることです。

このような「同意の偽装工作」の動きを見なければ、真実は全く見えずに、自ら自滅の道を選んでいるようにしか見えないわけです。

恐らく筆者が不都合なことを発信したりするからでしょうが、様々な妨害工作を受けています。事実や真実が広まったり、多額の資金を投じて騙しているのがバレたりするのが不都合なのでしょう。なんか随分進化しているので、今回はその嫌がらせや妨害工作の一部を紹介したいと思います。

第4章 「予測警察システム」の現象——考 えただけで起きる異変

残念ながら、AVなどと違って仕組みがわかりませんので、まずは現象だけ説明して、その後、分析して分かる範囲でその仕組みを解説したいと思います。

第4章1節 考えただけで起きる異変

まず、パランティアの「予測警察システム」だと思われますが、面白いというか、恐ろしいというか、次のような現象が起きます。

筆者が AV の仕組みなど、日本政府やファシズムや日本会議などのカルトにとって不都合なことをバラしたり、記事を書こうと考えると、次のような現象が起きます。

しかも、興味深いことに、考えて 1 秒以内に通信遮断が起きるのです。1 秒以内というのは、考えた直後なので、数 100 ミリ秒以内で「ほぼリアルタイム」です。

第 4 章 2 節 人間が因果関係を認識する「時間の壁」

実は人間が因果関係を認識するには、時間の壁があります。前に起きたことと、今起きたことを「原因と結果」として結びつけるには、二つの間隔がだいたい 1 秒以内、長くても 2~3 秒以内である必要があります。それ以上空いてしまうと、脳は「たまたま続けて起きた別々の出来事」と判断してしまい、因果関係を感じにくくなります。

たとえば、スイッチを押した直後に電気がつければ、「押したからついた」と誰でも思います。でも、押してから 10 秒後に電気がついたら、「何か別の原因かな？」「偶然かな？」と感じますよね。これが「時間の壁」です。

つまり、相手に因果関係を感じさせて、「原因と結果」として結びつけさせるには、相手の認知を観察しながら、数 100 ミリ秒以内にイベントを起こす必要があるのです。

第 4 章 3 節 考えただけで即座に「通信遮断」

通信遮断の仕方は様々です。Wi-Fi が急に切れる、VPN が急に切れる、ブラウザの送信ボタンが押せなくなる、自動保存が勝手に止まってネットワークエラーが出る——といったことが起きます。

また、考えて1秒以内に、書いているメモ帳アプリが突然落ちる、マウスが急に固まる、画面が固まる——例えば、急に画面が固まって動かなくなったので電源コードを抜くと急にスムーズに動き出すなどもあります。

第4章4節 X (Twitter) の高市批判妨害

また、これは筆者だけでなく大勢の人が言っていますが、X (Twitter) で高市批判や都合の悪いことを送信しようとする、送信ボタンが押せない、相手に通知が届かない、相手にDMを送っても通知が表示されない、いいねをしても消えている、リツイートをしても消えている、翻訳機能が働かなかった——とにかく、公開して広めたり、情報発信や拡散を妨害する仕組みがアチコチに散りばめてあります。

例え拡散されたとしても、ネトウヨやアンフェが気づいて集団リンチして黙らせる——「言論の自由」どころか、「言論弾圧が常態化」しています。

第4章5節 人体への拷問も

また、考えて1秒以内に、腹がグルグル音が鳴る、急に異臭がし始めるが異臭源は無い、急に屁が出る、急に腹痛になる——などの現象が起きます。

まさに、リアルタイムで『1984』の「思考検閲」や「思想検閲」が行われているような状況になってきました。リアルタイムで24時間、365日、全ての言動や思考を監視されるような世界になってきたのです。

トランプやネタニアフ、高市などファシストたちが悪事を行っても強気なのは、「予測警察システム」で反対したり潰そうとする打倒の動きがあれば、監視していて未然に芽のうちに潰して防ぐことができるからです。弱みを握って脅して、不正や犯罪を追及できなくしたり、ファシストたちは安心して強気で好き勝手できるのだということが見えてきます。

第4章6節 「神の目」システム

以前、金融エリートやテック企業は「神の目」のシステムで全てを監視していて、動きを知っているから先手を打ってボロ儲けしたり、弱みを握って脅したりできるから、どんなに不祥事や犯罪があっても逮捕されたり処罰されずに好き勝手にできるのだということがわかります。

イーロン・マスクも、当時恋人だったアシュリー・セント・クレアに、発表される数時間前に誰よりも正確な選挙結果を知っていたと言っていたそうです。アメリカの全国民の頭の中を覗いて、投票結果を知っていたら、そりゃ分かりますよね。まさに傲慢なテック経営者にふさわしい「神の目」システムです。

面白いことに、AIでイラストを作成したりしますが、富裕層批判やファシズム絡みやエプスタイン関連も拒否されることが多いです。他はスムーズなのに、カルト批判なども執拗に拒否したり、興味深い偏りの現象がよく見られます。以前はトランプ批判が拒否されることも多かったですが、最近はトランプ批判も通りやすくなりました。

第5章 「予測警察システム」の仕組み—— なぜ数100ミリ秒で阻止できるのか

多少推測もありますが、現代の技術とAIを組み合わせれば可能なので、その「予測警察システム」の概要を解説してみます。なぜ、トランプやネタニアフ、高市やエプスタイン階級など富裕層や権力者を引きずり下ろせないのか？ も見えてくると思います。

第5章1節 予測警察システムとは何か？

あなたが「政府の不正を追及しよう」「政府の犯罪を暴露しよう」「政権に対する批判を送ろう」と考えて、パソコンやスマホで送信ボタンを押そうとした瞬間、なぜか送信できない。何度試しても失敗する。そのうち「もういいや」と諦めてしまう——こんなことが、あなたが気づかないうちに起きているかもしれない。それが「予測警察システム」です。

第5章2節 第1層：脳波検知——「思考」を捉えるセンサー

「脳波を読む」と聞くと、頭に電極を付ける大げさな装置を想像するかもしれませんが。しかし今は、ワイヤレスイヤホン、スマートウォッチ、スマホ、スマートスピーカーなどに、小型の脳波センサーを仕込むことが技術的に可能になっています。

2026年6月、MetaはBrain2Qwerty v2というシステムを発表しました。これは頭蓋骨を開ける手術なしに、脳の活動から文章を読み取る技術です。被験者の脳活動をMEGで計測し、AIがそれをテキストに変換するというもので、78%の単語精度を達成しています。

また、2026 年 5 月にはスタートアップの Sabi が 10 万個の EEG センサーを内蔵したキャップを発表しました。これは非侵襲型のブレイン・コンピュータ・インターフェースで、1 分間に約 30 語の速度で思考をテキストに変換できるとされています。

何がどのような仕組みで、そのようなリアルタイム観測を可能にしているのか？ いろいろ諸説あって、正直まだ分からないのですが、水道や食品にナノ粒子を入れたり、飛行機からナノ粒子をバラ撒いたりしてコントロールしているのでは？ と思われます。

あなたが何気なく使っているスマホや iPad、パソコンや、家のルーターや Alexa や Google Home、AirPods、Apple Watch——これらが、「監視されている」と気づかないうちに、あなたの脳波を計測している可能性があるのです。

特に Apple Watch やスマホなど、睡眠アプリを入れたら、あなたが熟睡したり、浅い睡眠であるか？ を計測していますよね？ それは、あなたの呼吸を監視しているということです。

第 5 章 3 節 第 2 層：エッジ処理——「意図」をリアルタイムで解析する

脳波データを遠くの AI データセンターに送って記録して読解して、データを返していたのでは、時間がかかりすぎます。咄嗟の思いつきの行動や、予期せぬ突発イベントに対応できません。

そこで、あなたの手元にあるスマホやタブレットなどのデバイスや、家の Wi-Fi ルーター、街の携帯基地局が、その場でデータを分析します。Wi-Fi で室内を監視できるように、Wi-Fi ルーターが監視装置に変化するのです。

スマホや PC に搭載された NPU（Neural Processing Unit）が、脳波データをリアルタイムで解析します。Apple の Neural Engine、Qualcomm の AI Engine、Google の Tensor チップなどが、すでにデバイス上で AI 推論を実行しています。

つまり、あなたが「送信しよう」と考えた瞬間、その意図は最寄りのルーターや基地局や手元のスマホやタブレットなどのデバイスで即座に解析されるのです。

さらに、人工衛星もエッジノードとして利用可能です。スターリンクのような低軌道衛星群は、全球的なデータ中継だけでなく、衛星上で脳波データを解析することも技術的には可能です。1 万機以上の人工衛星が、アメリカの 3 億人の脳や日本の 1 億人の脳をリアルタイムで監視しているのかもしれません。

第 5 章 4 節 第 3 層：「送信しようとしている」を AI が検知

AI は、「SNS に批判を投稿しようとしている」「告発文を書いている」「送信ボタンを押そうとしている」という思考パターンや行動パターンを学習しています。人間の脳は、実際に行動する数百ミリ秒前に、すでに「動こうとしている」という信号を出しています。AI はその信号をキャッチし、「危険度」を瞬時に判断します。

あなたが「ジャーナリストにメールを書いている」「内部告発サイトを開いている」「SNS に批判を投稿しようとしている」——行動の文脈や脳波からも判断され、「これは阻止すべき」と判定されます。

このシステムの中核にあるのが、Palantir（パランティア）というアメリカの企業です。Palantir は移民関税執行局（ICE）に顔認識、SNS 監視、位置情報追跡のツールを提供し、「スーパーデータベース」と呼ばれる巨大な監視システムを構築しています。

第 5 章 5 節 第 4 層：送信を物理的にブロック

判定が下ると、あなたのパソコンやスマホの通信が遮断されます。送信ボタンを押しても何も起こらない——あるいは、X（Twitter）の表示などをおかしくしたり、不具合を起こして、送ろうとする行動そのものを阻止する——そんな偽装も可能です。

阻止のメカニズムは多層的です。ローカルレベルでは PC やスマホの OS レベルで特定のアプリケーションの通信をブロックします。ルーターレベルではルーターのファイアウォール機能が特定の IP アドレスやドメインへの通信を遮断します。VPN を使っても、ルーター自体が通信をブロックすれば外部への送信は不可能です。基地局レベルでは携帯基地局が特定のユーザーの通信を選択的に遮断します。衛星レベルではスターリンクのような衛星インターネットを使っている場合、衛星側で通信を遮断することも技術的には可能です。

まるで、あなたの家の玄関に、見えない壁ができたようなものです。

第 5 章 6 節 第 5 層：やがて「諦める」ようになる

何度も何度も妨害されると、人間はどうなるのでしょうか？ 最初は「おかしいな」「もう一度やってみよう」と頑張ります。しかし、10 回、20 回と失敗が続くと、次第に「もういいや」という気持ちになってきます。そして、X を開いて意見を表明すること自体が億劫になり、抵抗を諦めてしまうのです。

これは「学習性無気力」と呼ばれる心理状態で、CIA の尋問マニュアルでも使われてきた手法です。殴る蹴るの暴力ではなく、「何をしても無駄だ」と思わせることで、反抗意欲そのものを奪う——これが最も洗練された抑圧方法なのです。

第5章7節 まとめ——あなたの「言動や思考」が検閲される時代

予測警察システムとは、あなたが何かを告発しようと「考える」だけで、それを阻止し、最終的には「諦めさせる」仕組みです。そして、その構成要素のほとんどは、すでにあなたの身の回りに存在しています。

以前から多くの被害者が被害を訴えていました。すでにあなたの周りでも異変や異常が起きているかもしれません。相手の思考や弱みを含む全てを手に入れて自由にコントロールできるから、世界中を欺いて、大勢のアメリカ人や世界中の人を餓死させてでも巨額の投資をして、AI データセンターを建設したい——富裕層やテック企業や金融エリートたちの思惑が見えてきます。

自分達に逆らうことを考えるだけで、拷問されたり、不利益を被るようになれば、調教されて、そのうち誰もイスラエルやトランプやネタニアフ、高市などファシストたちに逆らえない世界を作るのが真の狙いなのでしょうね。それ以外、彼らが助かる手はありませんから。

【記事】「仕事の半分は米国政府」パランティアがホワイトハウスに近づくワケ

第6章 悪名高いICEの「どこにその人がいるのかを事前に知っているかのような摘発」

ここでは少し脱線して、「予測警察システム」とはどのようなものか、少し古い記事ですがクーリエ・ジャポンの記事から簡単に概要を見ておこうと思います。「予測警察システム」は、警察や諜報機関、そしてトランプのナチス親衛隊と名高い「移民関税執行局（ICE）」などで利用されています。

第6章1節 なぜ「的を絞った摘発」が可能になったのか？

前章では、Palantir（パランティア）が移民関税執行局（ICE）に提供しているシステムに簡単に触れましたが、この章では、そのシステムが実際の現場でどのように使われ、どんな変化をもたらしているのかを具体的に見ていきましょう。

鍵となるのは、「データの融合」という仕組みです。Palantir は、政府機関が持つ複数のデータベースを一つの中央ハブに集約するプラットフォームを構築しています。2025 年 4 月、ICE は Palantir と約 3,000 万ドルの契約を結び、「ImmigrationOS（移民ライフサイクル運用システム）」と呼ばれるシステムを導入しました。これは、移民記録、ビザ申請、生体認証ファイルなど、政府の様々なデータソースを統合する中央ハブとして機能します。

さらに、Palantir は「ELITE（執行のための強化された手掛かりの特定と標的化）」というアプリを開発しました。これは、地図上に潜在的な強制退去のターゲットを表示し、各個人の「住所の信頼度スコア（confidence score）」を生成するものです。このスコアは、政府のデータと商業データを組み合わせて算出されます。

つまり、Palantir のシステムは、「どこに誰がいるのか？」といった形で、ターゲットの現在地を事前に予測するのです。これが、「的を絞った摘発」を可能にした最大の理由です。

第 6 章 2 節 従来の摘発と何が違うのか

では、このシステムが導入される前と後で、何が変わったのでしょうか。

権利擁護団体「ミヘンテ」のハシンタ・ゴンサレスは、近年の ICE による摘発が以前よりも的を絞ったものになっていると指摘しています。まるで「誰を探していて、その人がどこにいるのかを事前に知っているかのような摘発」が行われており、そこが昔とは異なるのです。

従来の摘発は、どちらかと言えば「場当たりの」でした。職場への一斉捜査や、特定の地域での一斉検挙など、広く網をかける方法が主流でした。しかし、今は違います。特定の個人を、特定の場所で、ピンポイントで捕まえる——そんな摘発が可能になっているのです。

この変化の背景には、ICE が大量の個人情報にアクセスできるようになったことと、以前よりも精緻な摘発を実行するためのデータ分析能力を手に入れたことがあると、ゴンサレスは述べています。おそらく脳波などの生体データも収集できるようになっているのでしょう。

第 6 章 3 節 実際の現場での使われ方

では、実際の現場では、このシステムはどのように使われているのでしょうか。

WIRED の記者キャロライン・ハスキンスによれば、ELITE は ICE のエージェントがその場で任意の個人に関する「調書（dossier）」を作成できるようにするものです。そして、そのソフトウェアは「その人物がある瞬間に特定のエリアにいるかどうかの確率スコア」を生成します。

第 6 章 4 節 調査が示した結論

ミヘンテは調査会社の協力を得て政府文書を調べ、Palantir のソフトウェアが ICE の不法移民摘発を強化していると結論づけました。

ゴンサレスは次のように述べています。

「Palantir は特注で何かを作り、ICE はそれを使って、思い通りの摘発ができるようになっています。移民の強制退去の執行とは無縁だったという Palantir の言い草には笑ってしまいます」

彼女によれば、ICE は Palantir のソフトウェアを「任務遂行に欠かせない（mission-critical）」と評価しており、その重要性は明らかです。つまり、Palantir のシステムは、移民の追跡と摘発を「自動化」し、「効率化」するために設計されたもののなのです。

第 6 章 5 節 まとめ——「予測」が「執行」を変えた

Palantir が ICE に提供しているシステムは、移民の摘発を「事後対応型」から「予測先行型」へと変質させました。

- ・ ImmigrationOS が政府の様々なデータを統合し
- ・ ELITE がそのデータから「住所の信頼度スコア」と「存在確率」を算出し
- ・ エージェント がその確率に基づいて現場での行動を決定する

この仕組みによって、摘発はまるで「誰を探しているか」も「その人が今どこにいるか」も、事前に知っているかのような精度で行われるようになったのです。

そして、この能力こそが、Palantir が ICE にとって「任務遂行に欠かせない」存在となっている理由に他なりません。予測が執行を変え、執行が予測をさらに強化する——この循環が、現代の監視社会の最も恐ろしい側面なのです。

【記事】「仕事の半分は米国政府」パランティアがホワイトハウスに近づくワケ

第7章 仕組み2——なぜ「外部の異変」は数100ミリ秒で起きるのか？

ここからは、5章と6章で解説した「予測警察システム」の仕組みを、さらに深掘りしていきます。特に、「外部で起きる異変」——救急車のサイレン、暴走バイクのエンジン音、飛行機の低空飛行——これらがなぜ「考えただけで数100ミリ秒以内」に起きるのか？ という謎に焦点を当てます。「予測システムの最大のポイント」だからです。

第7章1節 なぜ？——身近なデバイスなら数100ミリ秒で異変を起こせるのか

まず、なぜMac、iPad、iPhone、そして身体に異変を起こすことは、数100ミリ秒以内に可能なのでしょうか？

回答：エッジ処理を使えば、物理的に可能だからです。

あなたの手元にあるデバイス——Mac、iPad、iPhone——は、すべてWi-FiやBluetoothでルーターや基地局とつながっています。そして、これらのデバイス自体が「エッジ端末」として機能します。

エッジ端末とは、データが生成される場所のすぐ近くで処理を行うコンピュータのことです。あなたが「送信しよう」と考えた瞬間、その思考は：

1. 脳波センサー（イヤホン、スマートウォッチ、スマホなどに内蔵）が検知する
2. デバイス内のNPUがリアルタイムで解析する
3. ルーターや基地局がその意図を確認する
4. 即座に通信を遮断する

この一連の流れは、すべてあなたの手元——数メートル以内——で完結します。データを遠くのデータセンターに送る必要がないため、数100ミリ秒以内に処理が完了するのです。

身体の異変——腹がグルグル鳴る、異臭がする、屁が出る、腹痛が起きる——これらも、身近なデバイスから発せられる電磁波や超音波によって、自律神経や消化器官に直接働きかけることが技術的には可能です。電磁波や音波は、人体に対して様々な生理的反応を引き起こすことが知られています。

つまり、身近なデバイスとエッジ処理の組み合わせなら、数 100 ミリ秒以内に同時多発的な異変を起こすことは、物理的に可能なのです。

第 7 章 2 節 なぜ？——外部の救急車や暴走バイクや飛行機は、数 100 ミリ秒で異変を起こせないのか

では、なぜ外部の救急車、暴走バイク、飛行機は、このシステムでは数 100 ミリ秒以内に異変を起こすことができないのでしょうか？

回答：物理現象と法則があるからです。

ここで、基本的な物理を考えてみましょう。

音は空気中を秒速約 340 メートルで伝わります。これは、1 秒間に 340 メートル進むという意味です。

もし、あなたが「考えた」瞬間に、1~2 キロメートル離れた場所にいる救急車のサイレンを鳴らそうとした場合、サイレンの音があなたの耳に届くまでには：

・ 1 キロメートル離れている場合：約 2.9 秒
・ 2 キロメートル離れている場合：約 5.9 秒

かかります。

つまり、数 100 ミリ秒以内にサイレンの音を聞かせることは、物理的に不可能なのです。

これは、救急車に限りません。暴走バイクのエンジン音も、飛行機の低空飛行による轟音も、同じ物理法則が適用されます。音源が遠くにあればあるほど、音が届くまでに時間がかかるのです。

なぜ、これが「予測警察システム」の矛盾点になるのか？ それは、このシステムが「考えた瞬間に外部で異変を起こす」と主張しているにもかかわらず、物理法則上それが不可能だからです。もし本当に数 100 ミリ秒以内に外部の異変が起きているのなら、そこには別の仕組みが存在するはずです。

第 7 章 3 節 なぜ？——「予め指令を出しておく」以外に方法がないのか

では、どうすれば数 100 ミリ秒以内に外部の異変を起こせるのでしょうか？

回答：予め数秒前に AI が指令を出しておくしかありません。

物理法則を逆手に取ると、数 100 ミリ秒以内に音を聞かせるためには、音源があなたの近くにいないか、あるいは予めサイレンを鳴らす準備ができていない必要があります。

具体的には、次のような仕組みが考えられます：

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. AI があなたの「考える内容」を予測する2. AI が救急隊員に対して「数秒後にサイレンを鳴らせ」という指令を送る3. あなたが実際に「考えた」瞬間、救急隊員がサイレンのスイッチを押す4. 数 100 ミリ秒以内にサイレンの音があなたに届く |
|--|

つまり、あなたが「考える」数秒前に、すでに AI が動いているのです。

これを図で表すと、以下のようになります：

AI は、筆者に対しては「考える内容」を送り、救急車に対しては「サイレンを鳴らす指示」を送ります。そして、筆者が実際に「考えた」瞬間に、救急車が

サイレンを鳴らす——これにより、あたかも「考えただけで外部の異変が起きた」ように見えるのです。

なぜ、このような仕組みが必要なのか？ それは、「考えた瞬間に外部で異変を起こす」という現象を、物理法則に反せずに実現する唯一の方法だからです。AI が事前に指令を出しておかなければ、数 100 ミリ秒以内に外部の異変を起こすことは不可能なのです。

第 7 章 4 節 なぜ？——「予測」がこのシステムの本質である理由

ここまでで、このシステムの本質が見えてきました。

このシステムは「予測」しているのではなく、「両方をコントロール」しているのです。

あなたが「考えた」瞬間に反応しているのでは、数 100 ミリ秒以内に外部の異変を起こすことはできません。しかし、あなたが「考える」数秒前に、AI があなたに思考を送り、先回りして指令を出しておけば、数 100 ミリ秒以内に同時に異変を起こすことができます。

この仕組みは、「予測とは名ばかりで、実際は支配システム」であることが分かります。警察が犯罪を「起こすよう促して」、事件が起きる前に介入する——それと同じように、このシステムはあなたの思考を「コントロール」して、送信が実行される前に阻止するのです。

そして、この「コントロール」や「予測」を可能にしているのが、あなたの過去の行動データ、思考パターン、人間関係、位置情報、購買履歴、SNS の投稿履歴——これらすべてを統合した AI 分析です。Palantir の Gotham のようなシステムが、あなたの「次の行動」を「脳に思いつき」として送り、先回りして指令を出す——これが、「予測警察システムの核心」なのです。

第7章5節 まとめ——「考えただけ」に見える現象の裏側

ここまでの話をまとめましょう。

- ・身近なデバイスや身体の変異は、エッジ処理によって数100ミリ秒以内に起こすことが可能です。
これは、デバイスがあなたのすぐ近くにあるからです。
- ・外部の変異（救急車、暴走バイク、飛行機）は、物理法則上、数100ミリ秒以内に起こすことができません。
音が届くまでに時間がかかるからです。
- ・しかし、AIが予め両方に数秒前に指令を出しておけば、数100ミリ秒以内に外部の変異を起こすことができます。
これが「予測」の仕組みです。
- ・つまり、あなたが「考えただけ」に見える現象の裏側では、AIがあなたの「次の行動」を「脳に思いつき」として送り、先回りして指令を出して動いているのです。

これは、まるで手品のような仕組みです。しかし、その種明かしをすれば、「次の行動」を「脳に思いつき」として送ることと「事前指令」という、ごく単純な原理に行き着きます。そして、この原理を支えているのが、あなたのすべてのデータを統合したAI分析なのです。

相手の思考や弱みを含む全てを手に入れて、自由にコントロールできる——だからこそ、彼らは安心して強気で好き勝手できるのです。自分達に逆らうことを考えるだけで、拷問されたり不利益を被るようになれば、調教されて、そのうち誰もファシストたちに逆らえない世界が完成する——それが、予測警察システムの真の狙いなのでしょう。

予測警察システム②：人体ハッキングのメカニズム(未完成版)

第8章 なぜ「正しいことを言う人」が弾圧されるのか？

第8章1節 「正しいことを言う人」が弾圧される社会背景

まず最初に、そもそもなぜこのような監視・妨害のシステムが存在するのか？、その社会的背景から考えてみましょう。

Q：なぜ正しいことをしようとすると脅されるのですか？

国連のパレスチナ人権状況特別報告者であるフランチェスカ・アルバネーゼは、2026年2月、複数の国の閣僚から「虚偽に基づく悪質な攻撃」を受けました。彼女はイスラエルによるガザでのジェノサイドを非難したために、組織的な中傷キャンペーンと「違法な制裁」に晒され、本人と家族に壊滅的な影響が及んだと国連特別手続き調整委員会が非難声明を出しています。フランス政府は彼女の辞任を要求しましたが、アルバネーゼは「私に向けられた攻撃のキャンペーンは、パレスチナ人が受けているジェノサイドに比べれば取るに足らない」と述べ、辞任を拒否しました。

また、国際刑事裁判所（ICC）に対しては、2025年から2026年にかけて、アメリカのトランプ政権がICCの裁判官や検察官に対して大規模な制裁を科しました。ICCによると、18人の裁判官のうち9人が米国の制裁対象となり、2人の次席検察官も指定され、元検察官や職員にも制裁が及んでいます。これは、ICCがイスラエルのネタニヤフ首相に逮捕状を出したことへの報復でした。ICCの赤根智子所長は「アメリカの主張は明らかにローマ規約と国際法に違反する、職員への違法な脅迫だ」と反論しています。

つまり、「正しいことを言う」と損をする」という構造が国際レベルで作られているのです。

第 8 章 2 節 なぜ強気で脅し続けられるのか？

Q：なぜトランプや高市早苗、ネタニヤフは強気なのですか？

彼らが強気でいられるのは、相手が脅しの手口を理解していないからです。脅迫すればいくらかでも従わせられると分かっているから、強気のまま行動できるのです。

この背景には、不都合な事実・情報・主張を情報統制したいという意図があります。正義や市民のために主張し、戦う政治家が、極右から攻撃されて失脚させられる——いわゆる「政権転覆工作」が各国で多発しています。2026 年には、ドイツで極右勢力がシュルツ首相の暗殺を計画していたことが判明し、裁判所はオンラインで政治家の「死亡リスト」を公開した男に 3 年の実刑判決を言い渡しました。ポルトガルでも、極右組織が首相や要人への攻撃を計画していたとして捜査が進められています。ボリビアでは、トランプ政権とアメリカ情報機関の交差点にいたアルゼンチン人の政治工作員が、政権転覆工作の一環として暗殺未遂事件を起こして拘束されています。

トランプの主張を肯定すれば拡散され、嘘を暴こうとすれば弾圧される。不都合な意見や情報は遮断し、「なかったこと」にしたいのです。

第 8 章 3 節 エプスタイン事件で被害を告発した被害者にも起きている悲劇

Q：エプスタイン事件の被害者はどうなっているのですか？

エプスタイン事件の被害者たちは、告発した直後から脅迫と嫌がらせに晒されています。マリナ・ラセルダは14歳のときにエプスタインから性暴力を受けたと公表した直後から脅迫が始まりました。司法省が公開した文書に彼女の名前が少なくとも46回も伏せられずに掲載された後、嫌がらせはさらに激化しました。彼女はオンラインで「嘘つき」「売春婦」と呼ばれ、12歳の娘は学校で「エプスタインの子供か?」といじめられました。現在、彼女は銃を枕元に置いて眠っているといいます。

ロイター通信が特定した23人のエプスタイン告発者のうち、ほぼ全員が脅迫、嫌がらせ、威嚇を経験しています。見知らぬ人が家の写真を撮ったり、正体不明の車が家の前に停まって近づくと高速で走り去ったり、暴力の脅迫電話がかかってきたりしています。エプスタイン文書に名前が挙がるVIPたちの証拠映像が完全に公開された場合の社会的影響を考慮し、米共和党のマイク・ジョンソン下院議長は「政治体制に永続的なダメージを与えないようにする」として、文書の公開を限定的にしていると述べています。

「陰謀論者」「フェイクニュース」というレッテルを貼られ、キチガイ扱いされて黙らされる——この手口は繰り返し使われてきました。

第8章4節 エプスタイン事件で被害を告発した被害者が追い込まれた手口

Q：具体的にどんな流れで被害者が追い込まれるのですか？

典型的な流れはこうです。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. 被害を正直に訴える2. 「キチガイ」「頭のおかしい人」とレッテルを貼られる3. デマや悪評、被害者の住所や居場所が晒される |
|--|

4. 被害者の安全が脅かされ、恐怖を感じる攻撃を受ける
 - ・不気味なストーキング
 - ・無言電話
 - ・人間関係を調べ上げられ、周りの人が攻撃される
5. 周りの人を裏切らせ、弱らせ、被害者を孤立させる
6. 最終的に人質を取られて脅迫されるか、脅しに屈して裏切る
7. 辻褄の合わない言動をするようになり、権力者に都合の良い言いなりの駒になる

このような奇妙な現象が、周りで多発しているのです。

第9章 人体ハッキングーどんな恐ろしい現象が起きるのか？

第9章1節 「車を自由自在にハッキング」の時代

その背景となっている恐ろしい技術を紹介しましょう。元 CIA のキアリク氏が Vault7 の車をハッキングして事故に見せかけて暗殺する手口などを紹介していましたが、今は遥かに進化しています。車のハッキングどころではなく、車のハッキングより遥かに恐ろしい人体ハッキングについて話をしましょう。

まずは、どんな奇想天外の恐ろしい攻撃や現象が起きるか？から紹介します。

元 CIA 工作員のジョン・キアリク氏は、2017 年に WikiLeaks が公開した「Vault 7」文書に基づき、CIA が自動車を遠隔操作して「事故に見せかけた暗殺」を行う能力を開発していたことを明かしました。「CIA はあなたの車を遠隔からハッキングして制御を奪う能力を開発した。あなたを橋から落としたり、木に衝突させたりできる」とキアリク氏は述べています。Vault 7 文書には、CIA が「自動車の制御システムに感染させて」運転者を暗殺する可能性のあるシステムの開発を検討していたことが記録されています。また、スマート TV をハッキングして、電源が切れているように見えても部屋の会話を録音する能力も持っていたとされています。

しかし、これは 2017 年の話です。今はさらに恐ろしい「人体ハッキング」の時代に入っています。

第9章2節 さらに恐ろしい「人体ハッキング」の時代

監視・ストーキング関連

・虫が襲ってくる

- ・カラスがタイミングよくカァカァ鳴く
- ・外出するとつきまとう人が現れる

殺意を感じる攻撃

- ・車の運転中に眠くなる
- ・車の運転中に目やにで見えなくなる
- ・車の運転中に視界が急にボヤける
- ・対向車のライトが眩しくて見えなくなる

呼吸・心臓関連

- ・急に喉が苦しくなって呼吸停止のようになる
- ・急に喉が苦しくなって咳が出る
- ・急に喉が苦しくなって吐き気が酷くなる
- ・何もないのに心拍数が異常に上昇する

嗅覚・筋肉・消化器関連

- ・急に異臭がする
- ・急に筋肉がピクピク痙攣する
- ・腹鳴（グルグル、グーッという音）が頻繁に起きる
- ・頻繁に屁が出る
- ・急に腹痛になる

第9章3節 「人体ハッキング」の恐ろしさ

これだけ聞くと「偶然の体調不良では？」と思うかもしれません。

しかし、前回述べたようにこれらの現象が自分の思考や言動とリンクしているから恐ろしいのです。

具体例：イジメ被害者が訴訟準備をしているケース

イジメ被害に遭った人が、被害を告発する記事を書いたり、訴訟を起こす準備をしているとしましょう。

イジメ被害の書類を書いていると

- ・急に腹がグルグル鳴ったり、グーッと鳴ったりする「腹鳴」が頻繁に起きる
- ・急に頻繁に「屁が出る」

- ・急に異臭がする

そして、訴訟を考えると

- ・急に腹痛になってトイレに駆け込む
- ・犬や猫などの動物が急に鳴き始める
- ・急に救急車のサイレンが鳴り始める
- ・非通知でスマホに電話がかかってくる
- ・急に家の電話が鳴る

加害者への反撃などを考えると

- ・何も無いのに、心拍数が異常に上昇する
- ・急に喉が苦しくなる
- ・急に胸が苦しくなる
- ・急に喉が苦しくなって吐き気が酷くなって咳き込む

作業に疲れて気分転換に外に出ると

- ・蜂や蛾などの虫が自分に向かって襲ってくる
- ・カラスがタイミングよくカァカァ鳴く

例えば、近くのスーパーに買い物に出かけたとしましょう。

- ・車の運転中に急に眠くなる
- ・車の運転中に目やにで見えなく無くなる
- ・車の運転中に視界が急にボヤけて見えにくくなる

など、車の事故を誘発するような異常現象が起きる訳です。

また、たかが近所のスーパーに行くだけで

- ・救急車やパトカーとすれ違ったりする

訳です。

被害者の中には、動画を撮影しながら救急車の出現を予測し、予測通りに救急車がサイレンを鳴らして現れるシーンを記録している人もいます。

まさに「逆予測」ですよ。

そしてスーパーでは、

- ・見知らぬ男が自分の買い物につきまとうように現れる
- ・急に客が増えて、10人以上、レジが混雑する
- ・こちらは知らないのに「向こうはなんか知っているようにジロジロみてる」

・自分が買い物が終わると客が急に激減して店がガラガラになる

もし、こんなことが身の回りで起きたと考えてみてください。

実に恐ろしく恐怖を感じませんか？

第9章4節 身体をハッキングされてるが「犯人も仕組みも不明」

この「予測警察システム」の一番厄介なところは、「身体が何者か？」に身体をハッキングされていること」です。そして、犯人も仕組みも分かりません。防ぐ方法もなかなかありません。

例えば、ストーキング被害や付き纏いが嫌で引っ越ししたとしても、引っ越し直後は被害が激減しますが、その後しばらくするとまた激増して変わらなくなるのです。

つまり、地球上どこに逃げても逃げられない「神の目」のような奇妙なシステムな訳です。

第10章 なぜ身体は外部から操られるのか？ ——「意識」と「自動」の分離

さて、この謎の「予測警察システム」ですが、最近ようやく色々な仕組みが見えてきました。そこで、人間ハッキングについて、分かっている範囲でまとめて紹介しておこうと思います。これからファシズムが台頭して、被害者や被害を訴える人が急増するかもしれないので。

第10章1節 人の体は元々自動で動く部分がある ここからが本題です。

なぜこのような現象を外部から起こせるのか？

その謎を解くカギは人間の身体の「意識的な意思で動く部分」と「自動で動く部分」に分かれていると理解するところにあります。

第10章2節 人の身体は元々自動で動く部分がある

Q：実は、元々自分で腹痛を起こせなくありませんか？

はい。実は、理解する上で重要なポイントは、自分の脳や意思は腹痛を「知覚する」だけで、腹痛を「発生させる」のは別の神経回路やメカニズムだということです。

例えば、腕や筋肉は「動かそう」と思って動かします。これは「意識的な意思で動く部分」です。一方、食べた物の消化は、自分で胃や腸を動かそうと意識しなくても自動で行われます。これが「自動で動く部分」です。

つまり、人間の身体は3種類に分けられます。

1. 自動システム（不随意）主 — 自分の意思ではコントロールできない

- | |
|--|
| 2. 意識的な意思でコントロールできる（随意）主 — 自由に動かせる
3. 混合型（自動＋意識） — 一部は意識で、一部は自動 |
|--|

これをそれぞれの部位が

「意識的な意思で動く部分」なのか？「自動で動く部分」なのか？「混合の部分」なのか？を分類すると以下のような表になります。

第 10 章 3 節 不随意（自動）主のもの

第 10 章 4 節 随意（意識）主のもの

第 10 章 5 節 混合型（自動＋意識）

第 10 章 6 節 本人の意思でやってる作業を妨害する仕組み

つまり、どういうことか？

訴訟のための文書を書いているときに急に腹痛で下痢になるケースを考えてみましょう。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・「本人の意思で動く部分」を使って訴訟文書を書いている・その間、「自動で動く部分」である胃や腸が外部からコントロールされて、下痢や腹痛が起きる・「混合型」の部分でもあるので、「下痢だヤバイ、トイレ行かなきゃ」と「本人の意思で動く部分」を使ってトイレに行き、排泄する |
|--|

このように、「自動で動く部分」を外部から操作して、処理を割り込ませることで、「本人の意思でやってる作業」を邪魔したり、阻止したりして、本人がやろうとすると常に邪魔や妨害されるシステムが出来上がる訳です。

第 11 章 脳のどこで制御しているのか？—— 脳部位の対応まとめ

第 11 章 1 節 制御している脳の部位

では、これらの部分は脳のどこで制御しているのでしょうか？

自分の脳の以下の部分で、「意識的に手や腕を動かし」たり、無意識のうちに「胃や腸の消化活動」の指令を出して、自分の身体をコントロールしているのです。

第 11 章 2 節 外部から操作することは可能なのか？

Q：これらの脳部位を外部から操作することは可能なのですか？

研究レベルでは、磁性ナノ粒子や磁気電気ナノ粒子（MENPs）を使ったアプローチが進んでいます。MENPs は外部磁場を局所的な電場に変換し、ワイヤレスで脳深部の神経活動を制御・記録できる可能性を持っています。2026 年 3 月に発表された論文では、適切に設計された MENPs が「サブミリメートルの空間分解能とミリ秒の時間精度」で深部脳および皮質の神経調節と記録を可能にすると予測されています。また、MENPs が生きた成人ヒトの脳皮質スライスで神経活動を誘発することも 2026 年 5 月に確認されています。

やはり、「磁場」を使ってコントロールしているっぽいです。と言うかほぼ間違いないかと。だから、なかなか遮断したり、阻止したり、防御したりすることがなかなかできないみたいです。

今は、未完成版の公開なので、後日もっと磁性ナノ粒子などのコントロールの仕組みを詳しく解説した記事を書き直します。

第12章 2026年1月3日——「予測警察システム」が戦場に登場した日

第12章1節 突然の米軍のベネズエラ侵攻

Q：2026年1月3日、ベネズエラで何が起きたのですか？

米国東部時間 2026 年 1 月 3 日未明、米軍はベネズエラの首都カラカスに対して「絶対的決意（Absolute Resolve）」と名付けられた大規模な軍事奇襲を敢行しました。この作戦には 150 機以上の航空機が動員され、西半球の 20 の米軍基地から爆撃機、戦闘機、偵察機、回転翼機が飛び立ちました。トランプ大統領は米東部時間 2 日 22 時 46 分に命令を下し、マドゥロ大統領夫妻は米東部時間 3 日 3 時 29 分に米軍艦上に連行されました。トランプ大統領はその後、米軍がベネズエラのマドゥロ大統領とその夫人を捕らえ、ベネズエラ国外に連れ出したと発表し、ニューヨークで「麻薬テロリズム」の罪で起訴されることになりました。

この作戦により、少なくとも 40 人が死亡しました。その中には軍人と民間人が含まれます。しかし最も注目を集めたのは、そのうち 32 名がキューバの軍事要員だったことです。

Q：なぜキューバ兵士がベネズエラにいたのですか？彼らはどうやって死んだのですか？

キューバ政府は 2026 年 1 月 5 日、米国のベネズエラへの軍事攻撃で 32 名のキューバ国民が死亡したことを公式に確認しました。これらのキューバ軍事要員は、ベネズエラ側の要請に応じて、キューバ革命軍と内務省を代表してベネズエラで任務に就いていました。キューバの『グランマ』紙の発表によれば、彼らは「直接戦闘において攻撃者と頑強に抵抗した後に死亡したか、施設への爆撃により死亡した」とされています。

32名のキューバ将校の遺体は2026年1月15日にキューバに送還され、ハバナのホセ・マルティ国際空港で軍事儀式が行われました。キューバは全国哀悼を宣言し、各省都で追悼行事を実施しました。

第12章2節 不可解な攻撃で死亡したキューバ兵士たち

Q：32名のキューバ兵士の死にはどんな特殊性があるのですか？

問題の核心は、これらのキューバ兵士が「直接戦闘」で死亡したとされているにもかかわらず、その死に方が極めて不可解だという点にあります。キューバ政府の最初の発表では「戦闘で犠牲になった」とされていましたが、その後の調査と報道はまったく異なる説明を示しています。ベネズエラ政府が以前に発表したところによると、米軍のこの奇襲作戦により合計55名の軍人が死亡し、その中に32名のキューバ軍警察要員が含まれていました。

しかし、キューバ側の発表の文言は注目に値します。彼らが述べたのは「cayeron tras férrea resistencia en combate directo」——「直接戦闘において頑強な抵抗の末に倒れた」という表現です。もしこれが公平な正面交戦だったのなら、なぜ訓練された32名のキューバ将校がわずか3時間で全滅したのでしょうか？なぜ米軍側は「人員も装備も一切失っていない」のでしょうか？

第12章3節 原因は「ゴースト・マーマー(Ghost Murmur)」？

Q：トランプが言及した「秘密兵器」とは何ですか？

トランプ大統領は作戦後、「ベネズエラの防御を無力化する」ために「エネルギーの秘密兵器」を使用したと述べました。「ディスコンボブラトール(Discombobulator)」と呼ばれるこの兵器は、奇襲の中でベネズエラの防空システムと防御力を麻痺させたとされています。その後、トランプはさらに神

秘的な別のシステムに言及しました：「ゴースト・マーマー（Ghost Murmur／幽霊の心音）」です。

Q：ゴースト・マーマーとは一体何なのですか？

複数のメディアの報道によれば、ゴースト・マーマーは量子磁力測定技術に基づく遠隔探知システムであり、ロッキード・マーティン社の秘密部門「スキャンワークス」がCIAのために開発したものです。

その作動原理はこうです：人間の心臓の鼓動が生み出す独自の電磁パルスを探知し、数千平方キロメートルの範囲内で、AI アルゴリズムによってその信号を背景ノイズから分離する。

このプロジェクトに関係する情報筋は次のように述べています：「これは巨大なスタジアムで何千人もの中から特定の一つの声を識別するようなものだ。しかし我々の場合、『スタジアム』は数千平方マイルの荒野だ。条件が良ければ、君の心臓が鼓動していれば、我々は君の位置を特定できる」。

報道によれば、ゴースト・マーマーの探知距離は約 65 キロメートル（40 マイル）に達し、1000 平方キロメートルの面積をカバーできるとされています。このシステムは当初イランの救出作戦で使用され、撃墜された F-15E パイロットの位置特定に成功しました。しかし複数の情報筋によれば、ベネズエラ作戦におけるその使用規模と効果は、イランでのそれをはるかに超えていたのです。

第 12 章 4 節 実は「予測警察システム」だったのでは？

Q：ゴースト・マーマーと「予測警察システム」にはどんな関係があるのですか？

ここが問題の核心です。

「予測警察システム」の作動原理を思い出してください：脳波検知、エッジ処理、AI 行動予測、物理的遮断という多層的メカニズムを通じて、人が「行動する前」にその行為を阻止する。このシステムの中核能力は：相手が監視されて

いることに気づく前に、すでに相手の全情報を掌握し、事前に対応準備を整えていることです。

ゴースト・マーマーの技術論理はこれと完全に一致します。

米軍統合参謀本部議長のケイン氏は記者会見で、情報チームが数ヶ月にわたる「努力」を経て、米側がマドゥロの行方を特定し、「その移動方法、居住地、移動経路、食習慣、服装の好み、飼っているペットの情報まで」掌握したと明かしました。同氏は「我々は観察し、待機し、準備し、忍耐と専門性を保った」と述べています。

これこそが「予測警察システム」の中核論理です：長期的かつ死角のない監視を通じて目標のあらゆる行動パターンを掌握し、最適なタイミングで行動を起こす。

Q：32名のキューバ兵士の死は、ゴースト・マーマーと関係があるのですか？

これが最も不安を煽る可能性です。

キューバ政府はこれらの兵士が「直接戦闘で犠牲になった」と主張していますが、32名の訓練された将校が3時間以内に全員死亡し、米軍側には一切の人的損害がないという、この非対称な死傷比率は極めて異常です。

合理的な推測の一つはこうです：米軍は「予測警察システム」を利用し、キューバ兵士たちが自分たちが狙われていることに気づく前に、その位置特定と攻撃を完了した。キューバ側が言う「直接戦闘」とは、おそらく事後の現場解釈にすぎません——兵士たちは確かに抵抗の中で倒れたのですが、敵と正面から交戦する機会はまったくなかったのです。

Q：これは「予測警察システム」の全体像にとって何を意味するのですか？

ベネズエラ作戦は、「予測警察システム」の技術が当初想定されていた範囲をはるかに超えていることを示しています。

当初の枠組みでは、私たちが議論していたのは：脳波検知とAI予測を通じて、一人の人間がツイートを送信したり、メールを書いたり、電話をかけたりするのを阻止する方法でした。これはミクロレベルでの制御です。

しかしゴースト・マーマーが示すのは：同じ技術論理が、国家レベル、軍事レベル、地政学レベルにまで拡大適用されうるということです。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・国内では、市民の言論と行動を阻止するために使える。・国外では、「従わない」と見なされたあらゆる指導者や勢力を位置特定し、排除するために使える。 |
|---|

そしてこの両者は、同じ技術基盤を使用しています：遠隔探知、AI 分析、精密位置特定、事前行動。

キューバ兵士の死は、単なる軍事衝突における死傷者ではありません。それは一つの信号かもしれません：「予測警察システム」が個人から国家へと拡大するとき、抵抗しようとするあらゆる勢力は、発見された瞬間にすでに結末が定まっている可能性があるのです。

次回はこちらです。

予測警察システム③：「磁性ナノ粒子」で脳や身体をコントロールする仕組み(未完成版)

第13章 諜報機関は人間を支配し、コントロールしようとしてきた

第13章1節 MK ウルトラ計画からエプスタイン・ファイルまで

諜報機関や軍が人間を支配し、コントロールしようとしてきた歴史は、決してSFの世界の話ではありません。

CIAの「MK ウルトラ計画」では、LSDや催眠術を用いたマインドコントロールの研究が行われ、731部隊では人体実験が繰り返されました。これらの非人道的な計画は「極秘」とされながらも、長年にわたって密かに継続されてきたのです。

そして近年、エプスタイン・ファイルの公開によって、世界中の富裕層や諜報機関が人体実験やコントロール計画に強い関心を持っていたことが明らかになりました。人体ハッキングの技術は、もはや実験室の中だけの話ではないのです。

第13章2節 MK ウルトラ公聴会

MK ウルトラに関する公聴会は、1977年と2026年の2回、大きく注目されました。

1977 年、情報公開法による請求で約 2 万ページの財務記録が見つかりました。これをきっかけに、上院の委員会が合同公聴会を開きました。CIA 長官ターナーは、MK ウルトラが 80 の機関と 185 名の研究者を動員し、149 のサブプロジェクトを支援していたと証言しました。大学や病院、刑務所などで、本人の同意なしに LSD などが使われたケースもありました。公聴会は「被験者から事前の同意は得られていなかった」と結論づけました。その後、フォード大統領は 1976 年に、薬物実験には文書による同意が必要だと決めました。

2026 年には、下院のタスクフォースが再び公聴会を開きました。キンザー教授は、MK ウルトラを「医学的拷問に該当します」と批判しました。また、担当者が「消えても困らない人間」の提供を求めていたと証言しました。調査ジャーナリストのオニール氏は、1977 年に議会が真実を知らされていなかったと主張しました。ルナ議員は、CIA には透明性と説明責任が必要だと述べました。

最大の問題は、1973 年に CIA 長官ヘルムズが関連文書の破棄を命じたことです。そのため、公聴会に残った記録に頼らざるを得ませんでした。2026 年の公聴会でも、大量の墨消しが残っています。70 年が経過した今、国家安全保障を理由にした墨消しを正当化することは難しいです。

公聴会は MK ウルトラの一端を明らかにしました。しかし、記録の破棄と墨消しのため、全貌は今も完全には解明されていません。この未完の状態そのものが、諜報機関による人間支配の歴史が隠され続けてきたことを示しています。

では、具体的にどのような人体や動物を外部からコントロールする技術が開発されているのでしょうか？

まずは、表に公表されているその研究成果を見ていきましょう。

第 14 章 「NANO-Mind」 とは何か？

第 14 章 1 節 世界初の磁場による脳遠隔操作技術

「NANO-Mind (Magnetogenetic Interface for NeuroDynamics)」——この技術は、韓国の基礎科学研究院（IBS）と延世大学の研究チームによって開発されました。2024 年 7 月 2 日付で『Nature Nanotechnology』に発表されたこの研究は、世界で初めて磁場を用いて脳の特定領域を自由にコントロールすることに成功した画期的なものです。

研究チームは、磁化されたナノ粒子と磁場を組み合わせることで、マウスの特定の脳領域を遠隔操作することに成功しました。しかも、頭蓋骨に穴を開けたり、侵襲的な手術を行う必要はありません。完全にワイヤレスで、手術も不要なのです。

第 14 章 2 節 実験で実証された行動操作

Nano-MIND の能力は、マウスを使った実験で明確に実証されています。

研究チームはまず、脳の内側視索前野（MPOA）にある抑制性ニューロンを活性化させることで、マウスの食欲を 100% 増加させることに成功しました。逆に、これらのニューロンを興奮させると、摂食量は 50% 以上減少しました。

さらに驚くべきことに、生殖経験のないメスのマウスが、内側視索前野を刺激されると、仔マウスを巣に運んで育てるなどの母性行動を示したのです。

つまり、Nano-MIND は動物の行動を自由に遠隔操作できる技術なのです。

第 14 章 3 節 オプトジェネティクスとの違い

従来の光遺伝学（オプトジェネティクス）では、頭蓋骨に穴を開けて光ファイバーを挿入し、光を照射する必要がありました。これは侵襲的で、自由に動き回る動物には適用が困難でした。

しかし、Nano-MIND では、遺伝子操作によって標的となる脳細胞にイオンチャンネル（Piezo1）を組み込み、外部から磁場をかけるだけで、そのチャンネルを開閉できるのです。小型アクチュエータで磁場を発生させ、イオンチャンネルのスイッチを入れる——この仕組みによって、外科手術なしの完全ワイヤレス遠隔操作によるマインドコントロールが可能になりました。

第 14 章 4 節 NANO-Mind の技術的優位性

Nano-MIND の最大の特徴は、その「非侵襲性」にあります。磁場は生体組織を透過するため、頭蓋骨を通過して脳深部にまで到達します。これは、磁場が長年医療画像診断（MRI など）に使われてきた理由でもあります。

また、磁化ナノ粒子は非常に小さく、血流に乗って体内を循環させることができます。特定の脳領域に標的化することも可能です。これは、体内に埋め込まれた電極を必要とする従来の脳深部刺激療法（DBS）とは根本的に異なります。

Nano-MIND の開発者である IBS の CHEON Jinwoo 所長は、「これは磁場を使って特定の脳領域を自由に制御する世界初の技術です。脳機能の理解、高度な人工ニューラルネットワーク、双方向 BCI 技術、神経疾患の新しい治療法など、幅広い研究に活用されることを期待しています」と述べています。

しかし、この技術が悪用されたらどうなるでしょうか。次節では、その危険性について考えてみましょう。

第 15 章 独裁的なファシズム政権が手に入れたら？

第 15 章 1 節 誰にも知られず遠隔操作の基盤を作れる

Nano-MIND の危険性について、著者のマイケル・スナイダーは次のように警告しています。

「もし専制的な政府が、ナノ粒子を用いて一般大衆の心を遠隔操作する効果的な方法を見つけることができれば、大衆は何が起きているのかさえ気づかないまま、マインド・コントロール・プログラムが実行されるかもしれない」

この警告は決して誇張ではありません。Nano-MIND システムの中核をなす磁化ナノ粒子は、食品からワクチンに至るまで、多くの日用品にすでに含まれている可能性があります。多くの場合、一般の人々の意識に触れることはありません。つまり、誰にも知られず、遠隔操作によるコントロールの基盤作りが可能になってしまうのです。

第 15 章 2 節 倫理ガイドラインの必要性

Nano-MIND の開発は、神経科学とナノテクノロジーにおける重要なマイルストーンです。動物の行動を遠隔操作するその能力は、研究と医療にエキサイティングな可能性を開くものです。

しかし同時に、このような強力な技術が責任を持って使用されることを確実にするために、強固な倫理ガイドラインと規制当局の監視の必要性も強調されています。

例えば、トランプ大統領やネタニヤフ首相のような独裁者に権力が握られ、法律や規制を無視して好き勝手にやると、取り返しのつかない事態になりますし、既になっているかもしれません。

AI と同じように、ナノテクノロジーは人類にとって存亡の危機となるのです。

第 15 章 3 節 池上彰の番組でも紹介された「脳攻撃兵器」

Nano-MIND のような技術は、軍事利用の文脈でも研究されています。池上彰の番組でも「ターミネーター兵士計画」として報道されたことがあります。

アメリカを中心に研究が進むこの計画は、身体能力が高く、痛みを感じない「ターミネーター兵士」を作ることとしています。例えば、「脳をコントロール！？」と題して、記憶・感情・判断を人工的に操作し、戦闘意欲を与え、恐怖心を失くす技術が研究中であると紹介されていました。

まさに、これまで見てきたマインドコントロール技術を使ったファシスト兵士の育成技術です。

第 15 章 4 節 脳への直接刺激によるハッキング

さらに、脳に直接刺激を与えてハッキングし、脅したり買収したりして「命令に反する行動をさせる」「味方を裏切らせて」敵軍やライバル政党を混乱させ、内部破壊させる技術も紹介されていました。

「記憶や経験をデータ化する」と題して、脳内の文章・音声・映像の記憶を読み取り、巨大なデータセンターにデータを蓄積して、いつでも兵士の記憶の再生・分析が可能になる——そんな技術も紹介されていました。

米軍は 2050 年までにサイボーグ兵士を実現することを目標に掲げており、軍事研究者は「法律と倫理のジレンマ」を警告しています。しかし、こうした警告が無視される可能性は十分にありすし、実際にヘグセス戦争長官やトラン

プ大統領は完全に国際法や倫理を無視して「ファシズム兵士」を作ろうとしています。

第 16 章 磁性ナノ粒子で送受信やコントロールが可能

第 16 章 1 節 磁性ナノ粒子で脳信号を読み取ることは可能か？
Nano-MIND は「書き込み」——つまり外部から脳を操作する技術ですが、逆に「読み取り」——脳信号を外部に送信する技術も開発されつつあります。

その鍵となるのが「磁気電気ナノ粒子（MENPs）」です。

MENPs は、外部磁場を局所的な電場に変換する、ユニークな性質を持っています。この性質を利用すると、磁場をかけることでナノ粒子から電場を発生させ、ニューロンを刺激できます。逆に、ニューロンの電気活動を磁場の変化として検出することも可能です。

つまり、MENPs は「双方向のブレイン・コンピュータ・インターフェース（BCI）」を実現するプラットフォームになり得るのです。

第 16 章 2 節 読み取った脳信号を外部に送る仕組み

MENPs を使った BCI では、以下のような仕組みが想定されています。

まず、MENPs を脳内に導入します。MENPs は磁場を電場に変換する「磁電効果」を持つため、外部から磁場をかけると、ナノ粒子の周囲に電場が発生し、近くのニューロンを刺激できます。逆に、ニューロンが活動すると電位が変化し、それが MENPs を通じて磁気信号として外部に送信されます。

適切に設計された MENPs は、「サブミリメートルの空間分解能とミリ秒の時間精度」で深部脳および皮質の神経調節と記録を可能にすると予測されています。

2026 年 5 月には、MENPs が生きた成人ヒトの脳皮質スライスで神経活動を誘発することが確認されました。これは、ヒトの脳でも MENPs による神経調節が可能であることを示す重要な証拠です。

第 16 章 3 節 磁性ナノ粒子の動きを常に監視する——MPI 技術

もう一つの重要な技術が「磁気粒子イメージング（MPI）」です。

MPI は 2005 年に導入された比較的新しい医用イメージング技術で、超常磁性酸化鉄ナノ粒子（SPIONs）の非線形磁化を検出して画像化します。X 線被曝がなく、高い時間分解能と空間分解能を持つことが特徴です。

2025 年 1 月には、ヒトの脳をイメージングするための MPI システムが開発されました。このシステムは、機械的に回転する永久磁石ベースのフィールドフリーライン（FFL）を使用し、26kHz の駆動コイルで最大 7mT_{peak} の磁場を発生させます。受信コイルは人間の頭部にフィットするように設計されており、5 秒/画像の時間分解能で連続的に画像を取得できます。

MPI は、脳血流の変化を検出して脳活動をマッピングすることも可能です。つまり、脳内に導入した磁性ナノ粒子の動きを常に監視し、その位置や活動をリアルタイムで追跡できる技術が、すでに実用化の段階に来ているのです。

第 16 章 4 節 なぜこの技術が「ターミネーター」を生み出すのか？

これまで解説してきた技術を組み合わせると、以下のような「ターミネーター兵士」が実現可能になります。

第一に、磁性ナノ粒子を脳に導入し、扁桃体（恐怖を司る部位）の活動を抑制することで、恐怖心をなくすことができます。第二に、側坐核（快感を司る部

位)を戦闘行動とリンクさせることで、戦うことに喜びを感じるように調教できます。第三に、前頭前野(理性・判断を司る部位)の活動を抑制することで、命令に盲目的に従う兵士を作り出せます。第四に、磁性ナノ粒子を介した MPI 技術で兵士の脳活動を常時監視し、反逆の兆候があれば即座に鎮圧することも可能です。

これは SF の話ではありません。Nano-MIND 技術の延長線上に、十分に実現可能な未来なのです。そして、この技術が独裁政権の手に渡れば、民主主義や人権は根本から崩壊します。

第 17 章 磁場の異常が観測されている

第 17 章 1 節 ギャングストーキングの被害者の訴えとも一致する

ここで、これまで見てきた技術と、ギャングストーキングの被害者が訴えている現象との関連について考えてみましょう。

ギャングストーキングの被害者が人体拷問や人体操作の被害を訴える際に、計測器の証拠写真と共に、磁場や磁束密度の異常を訴えていることが多いです。この「磁場でコントロールされている」という訴えは、Nano-MIND や MENPs の技術と一致します。

例えば、未知の「磁場のビームフォーミング」のような方法で、磁場を自在にコントロールして、人間や動物の行動を外部から遠隔操作することは、技術的には可能なのです。

第 17 章 2 節 外部から磁場を照射するとピクンと痙攣する

磁場を外部から与えることで、他人の身体を動かすことができるのは、「TMS（経頭蓋磁気刺激）」や「rTMS（反復経頭蓋磁気刺激）」という装置を使うことでも実証されています。

TMS の仕組みはシンプルです。コイルに電流を流すと磁場が発生し、その磁場が頭蓋骨を通り抜けて脳細胞を刺激します。大脳皮質に渦電流が発生し、ニューロンが刺激されて、脳と繋がる腕や指が動くのです。刺激頻度やパターンを変えることで、ニューロンの興奮と抑制を調節できます。

TMS で磁場を頭部に当てることで、指を痙攣させることができる——これは実際の映像でも確認されています。人体を磁場でコントロールすることは、科学的に可能なのです。

ギャングストーキングの被害者が訴えている、指や腕が痙攣している動画ですが、TMS のように、磁場を頭部に当てることで人体を磁場でコントロールすることは、技術的にも科学的にも可能なのです。

第 17 章 3 節 スマートハウスで電流や磁場を自在にコントロールできる

要するに、コイルのように電流を自由自在にコントロールできれば、磁場も自由自在にコントロールすることが可能になります。

例えば、スマートハウスやスマートシティのようなもので、家電やパソコンやエアコンなどのスイッチをオン・オフしたりするように、家の中や部屋の中を流れる電流を自在にコントロールできれば、部屋の中の磁場も自在にコントロール可能になります。

家の中の磁場

屋外の磁場

第 17 章 4 節 デジタルツインで自在にシミュレーション

「デジタルツイン」という技術では、家や建物をスキャンして、家とそっくりのコピーをデジタルで作り出すことが可能です。どんな材質で、どこに配線があり、どこに構造上の欠陥があるか——デジタルツインを使って分析して見抜いたり、効果的に破壊する方法をシミュレーションして見つけることも可能なのです。

米軍情報将校の家の中を覗けるとの証言もあります。あるいは、未知の「磁場のビームフォーミング」のようなものかもしれません。正確なことはまだ分かりませんが、とにかく磁場なので「なかなか原因に気付けない」という点に注目して頂ければ幸いです。

【YouTube Video】 デジタルツインでスマートシティ AI エージェントを構築・テストする

【YouTube Video】 リアルタイム AI とデジタルツインの融合

米軍情報将校の家の中を覗けるとの証言もあります。

第 18 章 磁性ナノ粒子で具体的にコントロールする方法

第 18 章 1 節 なぜ自分の意思で腹痛を起こせないのに、外部からは起こせるのか？

ここからが本題です。

なぜこのような腹鳴や下痢や咳などを外部からコントロールして起こせるのか？、

その謎を解くカギは、前回も紹介したように、人間の身体が「意識的な意思で動く部分」と「自動で動く部分」に分かれているという理解にあります。

腕や筋肉は「動かそう」と思って動かします。これは「意識的な意思で動く部分」です。一方、食べた物の消化は、自分で胃や腸を動かそうと意識しなくても自動で行われます。これが「自動で動く部分」です。

つまり、人間の身体は 3 種類に分けられます。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 自動システム（不随意）主 — 自分の意思ではコントロールできない2. 意識的な意思でコントロールできる（随意）主 — 自由に動かせる3. 混合型（自動 + 意識） — 一部は意識で、一部は自動 |
|---|

重要なのは、「自動で動く部分」は自分の意志では元々コントロールできないということです。しかし、外部から磁性ナノ粒子と磁場を使って、この「自動で動く部分」に直接働きかけることができれば、腹痛や下痢などを人工的に引き起こすことが可能になるのです。

第 18 章 2 節 なぜ「腹がグルグル鳴る」のか？——腹鳴の科学

腹鳴（お腹がグルグル鳴る現象）は、医学的には「腹鳴音」と呼ばれます。これは、胃や腸が内容物を移動させるために行う蠕動運動の際に、ガスや液体が混ざり合って発生する音です。

この蠕動運動は、腸神経系と自律神経によって制御されています。

つまり、「自動で動く部分」です。脳の延髄や視床下部が指令を出し、迷走神経を通じて腸に伝達されます。

磁性ナノ粒子を迷走神経や腸神経系に標的化し、外部磁場で刺激することで、蠕動運動を人工的に亢進させることができます。

実際に、腸溶性磁性ナノ粒子（EMNPs）を経口投与し、外部磁場でその位置と振動を制御することで、腸の蠕動運動をリアルタイムで操作できることが研究で示されています。

つまり、磁性ナノ粒子を使って「腹鳴」を人工的に引き起こすことは、技術的に可能なのです。

第18章3節 なぜ「急に下痢になる」のか？——下痢のメカニズム

下痢は、腸が内容物を押し出す波のような動き（蠕動運動）が、必要以上に活発になりすぎて、水分を吸収する時間がなくなることによって起こります。この「必要以上に活発になりすぎることを、医学用語では「亢進（こうしん）」と言います。

通常、大腸では水分が吸収されて、便が固まっていきます。しかし、腸の動きが速くなりすぎると、内容物が先へ先へと送られ、水分が吸収されないまま排出されてしまいます。これが下痢です。

この腸の動きの速まりは、自律神経、とくに副交感神経（体を休めるときに働き、消化を促す神経）が過剰に働くことで起こります。磁性ナノ粒子を腸壁や

迷走神経（脳と腸をつなぐ神経）に届くようにして、外部磁場で刺激すると、副交感神経が活性化し、腸の動きを速めることができます。

また、磁性ナノ粒子で腸の一部を刺激し、水分の分泌を促すことも可能です。こうして、人工的に下痢を引き起こせると考えられます。

第 18 章 4 節 なぜ「急に異臭がする」のか？——嗅覚のハッキング

嗅覚は、鼻の奥にある嗅上皮の嗅神経細胞によって感知されます。匂い分子が嗅神経細胞の受容体に結合すると、信号が嗅球に送られ、さらに梨状皮質や扁桃体、眼窩前頭皮質に伝達されて「匂い」として認識されます。

嗅覚は「自動で動く部分」と「混合型」の両方の側面を持っています。受容と反射、情動記憶は自動的ですが、注意・同定・言語化は意識的です。

磁性ナノ粒子を嗅神経や嗅球に標的化し、外部磁場で刺激することで、匂いのない状態でも「異臭」を感じさせることが可能です。嗅神経を直接刺激すれば、実際の匂い分子が存在しなくても、脳は「匂い」を認識します。

これは、「嗅覚のハッキング」です。

第 18 章 5 節 なぜ「心拍数が急上昇する」のか？——自律神経の操作

心拍数は、心臓の洞房結節（ペースメーカー）が自動的に発火することで維持されています。この洞房結節の活動は、自律神経——交感神経と副交感神経——によって調節されています。

交感神経が活性化すると心拍数が上昇し、副交感神経が活性化すると心拍数が低下します。

磁性ナノ粒子を心臓の神経節叢（ganglionated plexi）や迷走神経に標的化し、外部磁場で刺激することで、自律神経の活動を操作し、心拍数を人工的に上昇させることができます。実際に、磁性ナノ粒子を用いて心臓の自律神経を制御する研究が進められています。

また、ロシアの研究者たちは、無毒性の磁性マイクロ粒子を使って、マウスの脈拍と呼吸を遠隔操作することに成功しています。迷走神経への刺激により、呼吸数の増加と心拍数の低下が引き起こされたのです。

第18章 6節 なぜ「喉が苦しくなる」のか？——迷走神経と呼吸の操作

喉の違和感や呼吸困難は、迷走神経と呼吸中枢の操作によって引き起こされます。

迷走神経は、咽頭や喉頭の感覚を伝え、嚥下や発声にも関与しています。また、呼吸は延髄と橋にある呼吸中枢によって自動的に制御されています。

磁性ナノ粒子を迷走神経や呼吸中枢に標的化し、外部磁場で刺激することで、喉の違和感、咳、吐き気、呼吸停止感などを人工的に引き起こすことが可能です。迷走神経刺激は、実際にてんかんやうつ病の治療に応用されており、その技術は確立されています。磁性ナノ粒子を使えば、非侵襲的に迷走神経を刺激できるのです。

イスラエル人でもある歴史家ユヴァル・ノア・ハラリ氏は数年前から「人類は既に『ハッキングされる動物』になる時代に足を踏み入れている」と警告してきました。

もう既にハッキング可能になって、AIで制御可能になっているのです。

第 18 章 7 節 「磁性ナノ粒子」以外のナノ粒子

このように、「磁性ナノ粒子」を使えば、前回紹介したような身体の異変も外部から操作することが技術的に可能なのです。

もちろん、磁性ナノ粒子以外にも、外部から人体をコントロールするために研究されているナノ粒子と、その制御媒体（超音波、光、電場など）はいくつか存在します。

圧電ナノ粒子 圧電効果を利用します。超音波（機械的な振動）を当てると、ナノ粒子がそれを局所的な電気信号に変換し、近くの神経細胞を刺激します。
磁電ナノ粒子 磁場を局所的な電場に変換するナノ粒子です。 外部から磁場をかけると、粒子の近くに電場が生じ、神経細胞を刺激したり、逆に神経活動を記録したりできます。
金ナノ粒子 金ナノ粒子は光（特に近赤外光）を吸収すると、局所的に発熱します（光熱効果）。 また、光のエネルギーを音波（光音響効果）に変換することもできます。
上変換ナノ粒子（UCNP） 近赤外光を吸収し、より高エネルギーの可視光（青や緑など）に変換して放出します。この可視光を使って、光遺伝学で遺伝子操作した神経細胞を刺激（または抑制）します。

「磁性ナノ粒子」が自在に外部からコントロールできる技術として有力ですが、他のナノ粒子を使って組み合わせることも可能なのです。

第 19 章 昆虫や動物のコントロール

第 19 章 1 節 なぜ「蜂や蛾が自分に向かって襲ってくる」のか？——昆虫の行動ハッキング

昆虫の行動制御は、すでに研究レベルで実現しています。

2022 年 7 月、アメリカのライス大学の研究チームが、遺伝子操作したショウジョウバエの脳に酸化鉄の磁性ナノ粒子を注入し、外部磁場で刺激する実験に成功しました。ボタンを押してからわずか 0.5 秒以内に、ハエは翅を広げる行動をとりました。

仕組みはこうです。磁性ナノ粒子が磁場で発熱し、その熱でイオンチャネルが開き、ニューロンが発火する。つまり、外部から神経回路のスイッチを入れられるのです。

蜂や蛾も同じ昆虫です。攻撃行動や忌避行動を制御する神経回路に磁性ナノ粒子を標的化し、外部磁場で刺激すれば、特定の人間に向かって飛来させたり、攻撃行動を誘発したりすることは、原理的に可能です。昆虫は体が小さく、餌や水からナノ粒子を取り込ませるのも容易なので、誰にも気づかれずに「遠隔操作された兵器」に変えられるのです。

第 19 章 2 節 なぜ「猫や犬などの動物が急に鳴き始める」のか？——哺乳類の行動ハッキング

哺乳類の行動制御は、マウスですでに実証済みです。

2024 年 7 月、韓国の研究チームが『Nature Nanotechnology』に発表した Nano-MIND の研究では、マウスの脳に磁性ナノ粒子を導入し、外部磁場で刺激することで、食欲・社会的相互作用・母性行動などの複雑な行動を正確に操作できることが示されました。

マウスと犬や猫は同じ哺乳類です。脳の基本構造は共通しており、食欲や社会行動、情動を制御する神経回路も似ています。磁性ナノ粒子を標的領域に導入し、外部磁場で刺激すれば、鳴き声を上げさせたり、特定の行動を引き起こしたりすることは技術的に可能なのです。

実際に、ロシアの研究者たちは磁性マイクロ粒子を使ってマウスの脈拍と呼吸を遠隔操作することに成功しています。この技術を犬や猫に応用すれば、自律神経を操作して鳴き声や行動を人工的にコントロールできる可能性があります。

カラスがカァカァタイミング良く鳴いたりするのも似たような原理であると推測できます。

第 20 章 なぜ「考えただけで数 100 ミリ秒以内」に起きるのか？

ファシストたちが、なんでも自分たちの思い通りに支配したがる生物🦋であることを踏まえて、「予測警察システム」が「人類支配システム」であることを簡単に解説します。皆さんも是非自分で調べてみてください。

第 20 章 1 節 なぜ「外部の異変」は数百ミリ秒以内に起きるのか？——予測のトリック

ここで、前々回の記事で提起した「外部の異変」の謎に戻りましょう。

救急車のサイレン、暴走バイクのエンジン音、飛行機の低空飛行——これらがなぜ「考えただけで数 100 ミリ秒以内」に起きるのか？

物理法則上、音は空気中を秒速約 340 メートルで伝わります。1 キロメートル離れた場所のサイレンが聞こえるまでには約 2.9 秒かかります。数 100 ミリ秒以内にサイレンの音を聞かせることは、物理的に不可能です。

しかし、AI が予め両方に数秒前に指令を出しておけば、数 100 ミリ秒以内に外部の異変を起こすことができます。

第 20 章 2 節 磁性ナノ粒子で脳に「思いつき」を送る仕組み

ここはまだよく分かりませんが、このような感じだろうと思われる説を紹介します。

磁性ナノ粒子や磁電ナノ粒子（MENPs）を脳内に送り込み、外部から磁場をかけると、粒子が動いたり、発熱したり、磁場を局所的な電場に変換したりします。その刺激が神経細胞を発火させ、特定の感覚や衝動を呼び起こします。脳は刺激の出所を区別しないため、本人はそれを「自分で思いついた」と感じます。

第 20 章 3 節 なぜ「外部の異変」は数百ミリ秒以内に起きるのか？

そこで、AI はこう動きます。

アナタに「数秒後に●●の思いつきを送る」と予定し、その数秒前に救急隊員へ「数秒後にサイレンを鳴らせ」と指令を送ります。そして、あなたが実際にその考えを持った瞬間、サイレンが鳴り、数百ミリ秒以内に音が届きます。

つまり、あなたの思考はトリガーではなく、同期の合図として使われているのです。主観的には「考えたから鳴った」ように見えますが、実際は「AI が先に鳴らす準備をし、タイミングよくあなたに思いつきを送った」だけです

例えばトイレに行くと、暴走バイクがエンジンを吹かすパターンも、AI はこう動きます。

アナタに「数秒後に尿意を感じるシグナルを送る」と予定し、その数秒前に暴走バイクの運転手へ「数秒後にエンジンを吹かせ」と指令を送ります。そして、あなたが実際にトイレに瞬間、暴走バイクがエンジンを吹かし、数百ミリ秒以内に音が届きます。主観的には「トイレに行くたびにエンジンを吹かして監視している」と感じるようになります。

あなたの過去の行動データ、思考パターン、人間関係、位置情報、購買履歴、SNS の投稿履歴——これらすべてを統合した AI 分析が、あなたの「次の行動」を「脳に思いつき」として送り、先回りして指令を出す。

これが「予測警察システムの核心」で、「予測」ではなく「支配」なのです。

第 20 章 4 節 なぜ指示を出すのが AI だと思うのか？人じゃないの？

「予測警察システム」の話をする、「AI が指令を出している」という表現に、違和感を覚える人もいるかもしれません。「そんなの、人間がやっているんじゃないの？」と。

しかし、このシステムを人間だけで運用することは、物理的にも能力的にも不可能です。

まず、人間はミスをします。一人のオペレーターが何百人、何千人もの思考をリアルタイムで監視し、数百ミリ秒以内に正確なタイミングで指令を出す——そんな芸当はできません。人間の反応時間は、単純な反射でも約 200 ミリ秒。判断を伴えば数秒かかります。ましてや、相手の思考を先読みし、別の場所にいる人間や装置に先回りして指令を出すなど、人間の処理能力をはるかに超えています。

さらに、このシステムは 24 時間 365 日、休みなく動き続ける必要があります。人間は睡眠も必要ですし、集中力も持続しません。しかし AI は、疲れることなく、大量のデータを並列処理し、ミリ秒単位の同期を正確に実行し続けられます。

とはいえ、完全に AI だけが動いているわけではありません。人間は、システムの設計や目標設定、時には特定の標的に対する最終判断など、高次の意思決定に関与していると考えられます。つまり、AI が膨大なデータを分析し、リアルタイムで指令を出し、人間がその枠組みを定めたり、例外的なケースに対応したりする——AI と人間のハイブリッドシステムなのです。

このハイブリッド構造の恐ろしさは、AI の処理能力と人間の悪意が組み合わさることで、これまでにない精度と規模で人類を支配できる点にあります。人間だけでは不可能だった「思考の検閲」が、AI によって現実のものになってしまう。だからこそ、「予測警察システム」は「予測」ではなく「支配」なのです。

そして、その中核にいるのが、虐殺するイスラエルを一面広告で支持する悪名高い「パランティア社」なのです。

第 20 章 5 節 なぜ「周りの人間が奇妙な行動をとる」のか？——社会工学のハッキング

周りの人が奇妙に動くのは、AI が直接体を操っているからだけではありません。スマホアプリの「ゲーム」と「報酬」で、人の行動を間接的に動かしているからです。これは社会工学（ソーシャルエンジニアリング）のハッキングです。

第 20 章 5 節 1 項 ポイントや報酬で釣る仕組み

まず、ポケモン GO を思い浮かべてください。ポケモン GO は、位置情報を使って人を特定の場所へ移動させます。レイドやルアー、イベントが起きると、プレイヤーは自然とその場所に集まります。誰かに命令されたわけではありません。アプリが「今ここへ行けば得をする」と知らせ、報酬を与えるから、人が動くのです。つまり、アプリは人の行動を集団でコントロールできます。

同じ仕組みは、イスラエル系の一部のアプリでも使われています。通報や拡散、特定の相手への嫌がらせをすると、ポイントがもらえ、ランキングやボーナス、特典が手に入る。すると、参加者はゲーム感覚で行動します。政治的目的でも、報酬とゲーム化があれば、人は動いてしまうのです。

第 20 章 5 節 2 項 ボーナスや特典が手に入る仕組み

この仕組みを予測警察システムに応用すると、次のようになります。AI があなたの位置情報や行動パターンを常に監視し、次にどこへ現れるかを予測します。

そして、あなたの周囲にいる人たちのスマホへ、「この時間にこの店へ行け」「この人物を尾行して報告しろ」「写真を撮れ」「通報しろ」といったミッションを送ります。ミッションをこなすとポイントがもらえ、ボーナスや特典が手に入る。すると、周囲の人はゲームのクエストをこなすように動きます。

あなたから見ると、見知らぬ男がつきまとい、急に客が増えてレジが混雑し、自分が買い物を終えると客が激減して店がガラガラになる。これは偶然ではなく、ミッションで動かされた集団行動かもしれません。店側や警備員が協力している必要はありません。ただの客や通行人が、アプリの報酬に従って動いているだけなのです。

第 20 章 5 節 3 項 ポケモン GO の開発元 CEO は CIA の投資機関から資金提供を受けて起業

ポケモン GO と CIA の関係は、ゲームの生い立ちをたどると見えてきます。

開発元 Niantic の創業者ジョン・ハンケ氏は CIA の投資機関から資金提供を受けて起業し、その技術は Google に買収され、Niantic も Google から独立したという経緯があります。そして近年、ポケモン GO で収集されたデータが軍事利用されたという報道も出ています。

ポケモン GO は、プレイヤーに現実世界の場所をカメラで撮影させる「AR スキャン」機能を提供し、報酬と引き換えに膨大な街頭画像データを収集してきました。2026 年、オランダの新聞『Trouw』の調査により、Niantic が約 300 億枚にのぼるプレイヤーのスキャンデータを、アメリカの防衛請負業者 Vantor（旧 Maxar Intelligence）に提供していたことが報じられました。このデータは、GPS が使えない環境でドローンなどを cm 級でナビゲートするための AI モデルの訓練に使われたとされています。

つまり、周りの人間の奇妙な行動も、磁性ナノ粒子と AI を組み合わせた予測警察システムの一部です。物理的に身体をハッキングするだけでなく、スマホアプリで報酬で人の行動をハッキングする。これが社会工学のハッキングであり、ポケモン GO やイスラエル系アプリの仕組みと同じなのです。

第 21 章 まとめ——なぜ平気で虐殺できるのか？

なぜ、トランプやネタニヤフ、高市のようなファシストたちは、平気で虐殺を行い、不正を繰り返し、それでも強気でいられるのでしょうか？

それは、それを支える技術があるからです。

予測警察システムと思考監視と人体ハッキング技術——磁性ナノ粒子による脳の遠隔操作、脳波の読み取り、MPI による常時監視、そして AI による予測とソーシャルエンジニアリングの自動化——これらの技術が組み合わせることで、支配者は反対意見を未然に防ぎ、抵抗する個人を「調教」し、最終的には誰も逆らえない世界を作り出そうとしています。

自分達に逆らうことを考えるだけで、拷問されたり不利益を被るようになれば、調教されて、そのうち誰もファシストたちに逆らえなくなる——それが、「予測警察システム」と「思考監視と人体ハッキングの真の狙い」なのでしょう。

前々回の記事では、予測警察システムの全体像と、なぜ「外部の異変」が数 100 ミリ秒で起きるのかという謎に迫りました。今回は、その中核技術である磁性ナノ粒子と NANO-Mind の仕組みを解説し、具体的な人体ハッキングのメカニズムを明らかにしました。

予測警察システム④：健康被害の仕組みと 「簡易対策」——国家テロによる市民迫害(未 完成版)

第 22 章（補完） なぜ身体は外部から操られ るのか？——10 個の症状の謎を解く

前回の「第 19 章の補完」で解説した磁性ナノ粒子による健康被害——腰痛、関節痛、視界不良、筋肉痙攣、皮膚の痒みに加えて、いくつかの症状についても追加しておきます。

第 22 章 1 節 なぜ「腰痛」が起きるのか？——痛みの信号を大 きくする仕組み

Q：腰痛って、そもそもどうして起きるのですか？

腰痛は、腰の筋肉や骨から発生する「痛みの信号」が、脊髄という神経の通り道を通して脳に届き、脳が「痛い」と感じることで発生します。

ここで重要なのは、痛みの信号は脊髄を通る途中で「増幅」されることがあるという点です。これを医学用語で「中枢性感作」と呼びます。実際に、坐骨神経の圧迫による腰痛の研究では、磁性ナノ粒子 (Fe_3O_4) を使ったナノプラットフォームが、痛み関連の神経活動と中枢性感作マーカーを効果的に抑制することが確認されています。これは逆に言えば、磁性ナノ粒子と磁場の組み合わせで、この「増幅」の仕組みを外部から操作できる可能性があるということです。

磁性ナノ粒子を使って腰痛を引き起こすには、次の 2 つの方法が考えられます。

一つ目は、脊髄の中にある「痛みの信号を伝える神経」に磁性ナノ粒子を集め

て、外部から磁場をかけて刺激する方法です。これは、痛みの信号をわざと大きくするイメージです。

二つ目は、脳の延髄という部分にある「痛みを抑える指令を出す中枢」の働きを、磁性ナノ粒子で邪魔する方法です。これは、脳が本来持っている「痛みを和らげるブレーキ」を効かなくするイメージです。

さらに、自律神経（自分の意志では動かせない神経）のバランスが崩れることも、腰痛に関係しています。磁性ナノ粒子を含むテープを使って神経を調整すると、腰痛が軽くなることが確認されています。これは逆に言えば、磁性ナノ粒子と磁場を使って自律神経を操作すれば、腰痛を引き起こしたり悪化させたりできるということです。

第 22 章 2 節 なぜ「膝や肘の関節痛で動けなくなる」のか？——炎症と痛みのスイッチを入れる仕組み

Q：関節痛はなぜ起きるのですか？磁性ナノ粒子はどう関係しているのですか？

関節痛、特に膝や肘の痛みは、関節の軟骨がすり減ったり、関節の中で炎症が起きたりすることで発生します。変形性関節症は世界中で約 5% の人が罹患しており、慢性的な関節の痛みと動きにくさを主な症状とします。

ここで重要なのが、「TRPV1（ティーアールピーブイワン）」という痛みのセンサーです。TRPV1 は、もともと唐辛子の成分（カプサイシン）で活性化されることで知られている、細胞の表面にある小さな門のようなものです。この門が開くと、細胞の中にカルシウムという物質が入り、痛みの信号が発生します。

関節の中には、この TRPV1 を持った免疫細胞（マクロファージ）や軟骨の細胞が存在します。TRPV1 が繰り返し刺激されると、関節の炎症が進み、軟骨が壊れていきます。

2025 年 4 月に発表された研究では、磁性ナノ粒子（MNPs）に TRPV1 の抗体を結合させ、交流磁場を照射することで、TRPV1 を活性化させる「磁気温熱スイッチ」が開発されています。この研究自体は関節症の進行を抑えることを目

的としていますが、逆に考えれば、同じ仕組みを使って TRPV1 を繰り返し刺激し、関節の炎症と軟骨の破壊を進めることも技術的に可能なのです。

つまり、磁性ナノ粒子と磁場の組み合わせで、関節痛を人工的に引き起こし、進行させることが技術的に可能なのです。

第 22 章 3 節 なぜ「突然の視界不良で焦点が合わずボヤけて見えなくなる」のか？——目と脳の視覚回路を邪魔する仕組み

Q：視界が急にボヤけるのはなぜですか？目に何が起きているのですか？

視覚は、光が目に入り、角膜と水晶体を通して網膜に像を結び、その信号が視神経を通して脳の視覚野に伝わることで成立しています。この経路のどこかが邪魔されると、視界がボヤけたり、焦点が合わなくなったりします。

磁性ナノ粒子を使って視界不良を引き起こす方法は、大きく分けて 2 つあります。

一つ目は、目の中に直接作用する方法です。磁性ナノ粒子を目の中（硝子体）に注入し、外部磁場でナノ粒子を動かすことで、網膜に加わる圧力を操作できることが特許文献に記載されています。ナノ粒子が網膜の近くに集まると、光の通り道が遮られたり、網膜への圧力が変化したりして、視界がボヤける、像が歪むといった症状が起きます。

二つ目は、脳の視覚野に作用する方法です。研究チームは、磁性ナノ粒子とパルス磁場を組み合わせ、マウスの脳の視覚野を正確に刺激することに成功しています。また、網膜の神経細胞を磁電ナノ粒子（MENPs）で刺激する研究も進んでおり、実際に光がなくても視覚の信号を人工的に発生させられることが示されています。網膜を電氣的・磁氣的に刺激すると、実際に光がなくても「光の点滅」が見える現象（リン光）が起きることが知られており、磁場刺激によっても同様の現象が確認されています。

これを応用すれば、脳の視覚野や網膜に異常な信号を送り込むことで、実際には何も見えていないのに視界がボヤけたり、チカチカしたり、焦点が合わなくなったりする感覚を引き起こすことが可能です。

例えば、「第 25 章 5 節 対策 5：充電電池を袋に入れて首の後ろにつける」で「視界不良が治る」こともあります。もし怪しいと思ったらダメ元で試してみてください。

第 22 章 4 節 なぜ「腕や足や肩の筋肉が急にピクンピクンと痙攣する」のか？——筋肉のスイッチを勝手に押す仕組み

Q：自分の意志で動かしているはずの腕や足が、勝手にピクピクするのはなぜですか？

筋肉の痙攣（ピクピクとした勝手な収縮）は、運動神経から筋肉への信号伝達が異常に活発になることで発生します。通常、筋肉は脳からの指令を受けて収縮しますが、この指令が外部から乱されると、自分の意志とは無関係に筋肉が収縮を繰り返すのです。

この仕組みを理解するために、まず「カルシウム」の役割を説明します。カルシウムは、筋肉を収縮させるために必要な物質です。筋肉の細胞の中にカルシウムが入ると、筋肉が縮みます。そして、細胞の表面にある「カルシウムチャネル」という小さな門が開くことで、カルシウムが細胞の中に入ってきます。

研究により、磁性ナノ粒子に外部磁場を加えると、ナノ粒子が機械的な力や回転力を発生させ、細胞の膜を直接変形させたり、機械に反応するカルシウムチャネルを刺激したりすることが確認されています。具体的には、磁性ナノ粒子が細胞の膜にある N 型カルシウムチャネルに機械的な力を及ぼすことで、カルシウムの流入が引き起こされます。

磁性ナノ粒子を運動神経や神経と筋肉のつなぎ目に集めて、外部磁場で刺激すれば、運動神経から筋肉への信号伝達を人工的に活発にし、腕や足、肩の筋肉をピクピクと痙攣させることが可能になります。

これが、実際に被害者さんたちが痙攣する被害を訴える動画です。

第 22 章 5 節 なぜ「皮膚が酷い痒みの炎症になる」のか？—— 痒みの物質を放出させる仕組み

Q：皮膚が急に痒くなったり赤く腫れたりするのはなぜですか？

皮膚の痒みは、皮膚にある感覚神経の末端が刺激されることで発生します。この刺激の主な原因の一つが、「ヒスタミン」という化学物質です。ヒスタミンは、皮膚の免疫細胞である「マスト細胞」から放出され、感覚神経のヒスタミン受容体にくっつくことで、痒みの信号を発生させます。

ここで、マスト細胞の仕組みを簡単に説明します。マスト細胞は、皮膚や粘膜に存在する免疫細胞で、アレルギー反応に関わっています。マスト細胞の表面には「IgE 受容体」というアンテナのようなものがあり、これが集まると、細胞の中にカルシウムが入り、ヒスタミンが放出されます。

研究では、磁性ナノ粒子（酸化チタンなど）がマスト細胞を活性化し、炎症性メディエーターの放出を引き起こすことが確認されています。また、マスト細胞はナノ粒子を取り込んだり反応したりして、ヒスタミンや活性酸素種（ROS）などのさまざまなメディエーターを放出することが示されています。

つまり、磁性ナノ粒子を皮膚のマスト細胞に集めて、外部磁場で刺激すれば、マスト細胞からヒスタミンを人工的に放出させることができるのです。ヒスタミンが放出されると、血管が広がって皮膚が赤くなり、腫れが生じ、感覚神経が刺激されて強い痒みが発生します。

第 22 章 6 節 なぜ「心臓発作」が起きるのか？——心臓の電気の流れを狂わせる仕組み

心臓は、自分で電気を出して動いています。この電気は「洞房結節」という心臓の中にある小さな発電所から始まり、心房→心室へと流れていきます。この電気の流れが乱れると、心臓は正常に動けなくなり、心臓発作や不整脈が起きます。

ここで重要なのが「カルシウム」です。カルシウムは骨を作るだけの物質ではありません。実は、心臓の細胞が収縮するためにも必要な「スイッチ」のような役割をしています。心臓の細胞の表面には「カルシウムチャネル」という小さな門があり、この門が開くとカルシウムが細胞の中に入って、心臓がキュッと縮みます。

研究によると、磁性ナノ粒子（鉄を含む非常に小さな粒子）を体内に入れると、このカルシウムチャネルに直接影響を与え、心臓の電気の流れを乱すことが分かっています。具体的には、「CaV1.2」というカルシウムの門が磁性ナノ粒子によって異常に開きっぱなしになり、心臓が正常なリズムを保てなくなります。

また、心臓には「自律神経節叢」という神経の集まりがあり、心臓の動きを調整しています。磁性ナノ粒子はここにも集まりやすく、外部から磁場をかけることで、この神経の働きを抑え込むことができます。神経の調整が効かなくなると、心臓は自分勝手に速くなったり遅くなったりして、危険な状態に陥ります。

さらに怖いのは、心臓の心室や電気の通り道には、環境中の磁性ナノ粒子が蓄積しやすいということです。これらの粒子は、地球の磁場よりもずっと弱い「30～50 マイクロテスラ」という磁場にも反応して動くことが確認されています。つまり、外部から磁場を操作するだけで、心臓の電気系統に異常を引き起こせる可能性があるのです。

第 22 章 7 節 なぜ「脳出血」が起きるのか？——脳の血管を弱らせて破る仕組み

脳出血は、脳の中の血管が破れて血が出ることで起こります。最大の原因は高血圧ですが、血管そのものが弱くなっている場合も少なくありません。

ここで重要なのが「血液脳関門（BBB）」です。これは、脳の血管と脳の組織の間にある「関所」のようなもので、有害な物質が脳に入るのを防いでいます。この関所が緩むと、通常なら脳に入らない物質が入り込み、脳の血管や組織にダメージを与えます。

研究により、磁性ナノ粒子に外部から磁場をかけて熱を発生させると、この血液脳関門の関所が一時的に緩むことが確認されています。つまり、磁性ナノ粒子と磁場の組み合わせで、脳の血管のバリアを意図的に緩めることができるのです。

血液脳関門が緩むと、脳の血管に炎症が起きたり、血管壁が弱くなったりします。また、磁性ナノ粒子が脳の血管壁に蓄積し、外部磁場で機械的な力を加えることで、血管壁を物理的に弱らせることも考えられます。血管壁が弱ったところに血圧の変動が加われば、血管が破れて脳出血が起こります。

さらに、脳動脈瘤（血管にできたこぶ）の血栓に磁性ナノ粒子が集まることが報告されており、動脈瘤が不安定になって破裂するのにも関与する可能性が指摘されています。つまり、磁性ナノ粒子は「血管を弱らせる」と「血管のバリアを緩める」という二つの方法で、脳出血のリスクを高めることができます。

第 22 章 8 節 なぜ「便秘」が起きるのか？——腸の動きを止める仕組み

便秘は、腸の動き（蠕動運動）が弱まったり、止まったりすることで、便が長くとどまり、水分が吸収されすぎて硬くなる状態です。

腸の動きは、前回の記事で解説したように、自律神経と腸神経系によってコントロールされています。磁性ナノ粒子を使って便秘を引き起こすには、この腸の動きを「逆に操作する」ことが鍵になります。

研究では、磁性ナノ粒子を包んだ水凝膠（ゼリーのような物質）を口から飲み込ませ、外部磁場でその動きを制御することで、腸の動きを活発にできることが示されています。逆に言えば、磁性ナノ粒子を腸の壁に集めて、外部磁場で腸の動きを抑えれば、腸の動きが低下して便秘が引き起こされます。

また、磁性ナノ粒子を腸の粘膜に接着させ、外部磁場で腸壁を変形させる研究も進められています。この技術を使って腸壁の動きを制御できれば、腸の動きを人為的に止めることも原理的には可能です。

さらに、マウスを使った実験では、ロペラミドという薬で便秘を起こした群では、消化管の中にある磁性物質が排出されるまでの時間が大幅に延びることが確認されています。これは、腸の動きが低下すると、腸の中にある磁性ナノ粒子の排出も遅れることを示しています。裏を返せば、磁性ナノ粒子を使って腸の動きを操作すれば、便秘を引き起こせるということです。

第 22 章 9 節 なぜ「寝られない睡眠障害」が起きるのか？——睡眠のスイッチを壊す仕組み

睡眠は、脳の複数の部分が協力して作り出すリズムです。中でも重要なのが「オレキシン」という物質を作る神経細胞です。オレキシンは「起きている状態を保つ」ために必要な物質で、これが不足すると「ナルコレプシー」という突然眠ってしまう病気になったり、逆に多すぎると不眠症になったりします。

研究によると、環境中の磁性ナノ粒子（鉄を含む非常に小さな粒子）が、脳の「オレキシン神経」や「睡眠と覚醒に関わる脳の部分」に蓄積することが確認されています。メキシコシティの若い人の脳を調べた研究では、睡眠と覚醒を司る脳の中継地点に磁性ナノ粒子が蓄積しており、これらの粒子が「30～50 マイクロテスラ」という弱い磁場にも反応して動くことが示されています。

つまり、磁性ナノ粒子が睡眠のスイッチとなる神経に蓄積すると、外部からの磁場によって粒子が動き、神経細胞に機械的な刺激を与えたり、細胞を傷つけたりします。これにより、オレキシン神経が傷つき、睡眠と覚醒のリズムが崩れて、寝られない、あるいは寝すぎるといった睡眠障害が引き起こされるのです。

この研究は、睡眠障害が「脳の神経細胞の傷み」と「磁性ナノ粒子の蓄積」の両方によって引き起こされることを示しています。磁性ナノ粒子が睡眠の中核に集まり、外部磁場で操作されることで、不眠症や睡眠の質の低下が人為的に引き起こされる可能性があるのです。

第 22 章 10 節 なぜ「大腸癌」が起きるのか？——細胞の設計図を傷つける仕組み

大腸癌は、大腸の粘膜にできたポリープが癌化することで発生します。癌化の最大の原因は、細胞の DNA（設計図）が傷つき、修復されないまま細胞が異常に増殖することです。

ここで重要なのが「活性酸素種（ROS）」です。活性酸素種は、細胞を傷つける「酸化ストレス」の原因となる物質です。例えるなら、鉄が錆びるのと同じように、細胞が酸化することで傷んでいくのです。

研究によると、超常磁性鉄酸化物ナノ粒子（ Fe_3O_4 MNPs）をヒトの大腸癌細胞に作用させると、活性酸素種が増加し、DNA が傷つき、細胞が自死することが確認されています。重要なのは、この研究は「癌細胞を殺す」ための治療研

究ですが、同じ仕組みが「正常な細胞を癌化させる」方向にも働きうるということです。

活性酸素種は DNA を傷つけると同時に、細胞の増殖スイッチを入れてしまうことも知られています。磁性ナノ粒子が正常な大腸の細胞に蓄積し、外部磁場で繰り返し刺激されると、活性酸素種が慢性的に発生し、DNA の傷が蓄積して、癌化のリスクが高まる可能性があります。

また、磁性ナノ粒子は腸の粘膜に接着しやすく、長期間とどまることが確認されています。腸の中に磁性ナノ粒子が蓄積した状態で、外部から磁場を繰り返しかけることで、腸の細胞に持続的な酸化ストレスを与え、慢性炎症を引き起こすことができます。慢性炎症は、大腸癌の最も重要なリスク要因の一つです。つまり、磁性ナノ粒子による持続的な酸化ストレスと炎症が、大腸癌の発生を促進する可能性があるのです。

第 22 章 11 節 まとめ——「自分で動かしている部分」と「勝手に動く部分」の境界を突く攻撃

ここまで、10 個の症状について、磁性ナノ粒子がどのようにしてそれらを引き起こすのか、そのメカニズムを解説してきました。改めて振り返ると、これらは大きく 3 つのグループに分けることができます。

第 22 章 11 節 1 項 第 1 のグループ「混合型」

第 1 のグループは「混合型」——痛みと感覚の境界を突く症状です。

腰痛、関節痛、視界不良がこれに当たります。腰痛は脊髄・延髄・視床下部が関与し、痛みの信号を大きくすると同時に、脳が本来持っている「痛みを抑えるブレーキ」を弱めることで引き起こされます。関節痛は、関節の中の TRPV1 センサー・免疫細胞・軟骨細胞を標的に、炎症と軟骨の破壊を進めることで発生します。視界不良は、網膜・視神経・脳の視覚野という視覚回路に介入し、

網膜への圧力や人工的な視覚信号によって、実際には何も見えていないのにボヤけやチカチカを感じさせます。

これらはすべて、痛みや感覚が「発生してから脳で処理されるまで」のプロセスに、外部から干渉できることを示しています。

第 22 章 11 節 2 項 第 2 のグループ「随意（意識）主」

第 2 のグループは「随意（意識）主」——自分の意志で動かしているはずの部分を奪う症状です。

筋肉痙攣がこれに当たります。本来は「意識的な意思で動く部分」である腕や足の筋肉が、運動神経・神経と筋肉のつなぎ目・カルシウムチャンネルへの介入によって、外部から「勝手に収縮する」という現象です。自分で動かしているはずの自分の腕が、自分の意志とは無関係にピクピクと痙攣する——これは、随意運動の根幹を外部から揺さぶる攻撃です。

第 22 章 11 節 3 項 第 3 のグループ「自動（不随意）主」

第 3 のグループは「自動（不随意）主」——本人が制御できない臓器や神経系を直接操作する症状です。

皮膚の痒み、心臓発作、脳出血、便秘、睡眠障害、大腸癌がこれに当たります。皮膚の痒みは、マスト細胞・感覚神経の末端・角化細胞を操作し、ヒスタミンを人工的に放出させることで引き起こされます。心臓発作は心臓のリズムや冠動脈に、脳出血は脳血管や血圧調節に、便秘は腸の蠕動運動や自律神経に、睡眠障害は睡眠と覚醒のリズムや視床下部に、大腸癌は細胞の増殖と死の制御に——それぞれ介入することで発生します。

これらの臓器や機能は、本来、自分では意識して動かせない「自動システム」です。だからこそ、外部から操作されても本人は気づきにくく、防御も難しいのです。

第 22 章 11 節 4 項 見えてくる全体像

ここからが見えてくる全体像です。

10 個の症状のうち、最初の 5 つ（腰痛・関節痛・視界不良・筋肉痙攣・皮膚の痒み）は、「意識と自動の境界」を巧みに突く攻撃でした。自分の意志で動かしているはずの腕が勝手に痙攣し、自分の意志で感じているはずの痛みが外部から増幅される——このような現象が、技術的にはすでに可能な時代に入っています。

そして後半の 5 つ（心臓発作・脳出血・便秘・睡眠障害・大腸癌）は、完全に「自動システム」そのものを標的にした攻撃です。心臓の拍動、脳の血管、腸の動き、睡眠と覚醒のリズム、細胞の増殖と死——これらはすべて、本人が意識して制御できないからこそ、外部からの操作に気づきにくく、防御も難しいのです。

つまり、磁性ナノ粒子と外部磁場の組み合わせは、「自分の意志で動かしている部分」と「勝手に動く部分」の境界を巧みに突き、本人が「自分の意志で動かしている」と感じている部分にまで介入できる点に、その真の恐ろしさがあります。そして、完全に自動で動く部分については、操作されても気づくことすら困難なのです。

自分の身体は自分のもの——その当たり前の感覚が、この技術によって根本から揺るがされている。これが、「磁性ナノ粒子」システムの最大の危険性なのです。

詳しくは知りませんが、アメリカで「My Body, My Choice」という運動がありました。元々は女性の身体に関する自己決定権を求めるものだったようです。

しかし、2024 年、トランプ氏が大統領選挙で勝利した後、一部の極右活動家の間で「Your Body, My Choice（お前の体、俺の選択）」という対抗スローガンが広まりました。まさに、そんな感じです。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・ Your Body, the Wealthy Class's Choice・ Your Body, the Epstein Class's Choice |
|---|

・ Your Body, the Privileged Class's Choice
--

と言う訳です。

「磁性ナノ粒子」については、まだ詳しくなく、対策などもまだよく知らない
ので、後日調べたりして改めて、ご紹介します。

第2部 簡易対策編——なぜ？どうやって防ぐ？

ここからは「どうやって防げば良いのか？」に着目して日常生活でできる簡易な対策を紹介します。磁性ナノ粒子についてはまだ不明ですが、放射線やマイクロ波など他の攻撃に対して、いくつか対策を紹介します。

第23章 放射線編

まず、シンプルに放射線のような危険な攻撃について、普通の一般家庭でもできる簡単な方法を紹介します。本格的な方法については専門書をご覧ください。

第23章1節 鉛が放射線を防ぐ仕組み——なぜ鉛は放射線を遮るのか？

Q：放射線を防ぐのに、なぜ鉛が使われるのですか？

放射線は、物質の中を通過するときに、物質の原子とぶつかってエネルギーを失います。鉛は原子番号が82と大きく、原子核が重いため、放射線（特にガンマ線やX線）が鉛の原子核の近くを通ると、強い電磁力で跳ね返されたり、吸収されたりします。これを「遮蔽効果」と呼びます。

つまり、鉛は放射線にとって「通り抜けにくい壁」になるのです。ただし、鉛は有毒なので、放射線防護服には鉛を含むゴムやビニールが使われることが多いです。

第 23 章 2 節 放射線防護服——どんな仕組みで身を守るのか？

Q：放射線防護服は、どうやって放射線を防いでいるのですか？

放射線防護服は、鉛やタングステンなどの重金属をゴムや樹脂に混ぜ込んで作られています。放射線が防護服を通過するとき、重金属の原子が放射線を吸収・散乱させることで、体内に届く放射線の量を減らします。

ただし、防護服で完全に放射線を遮断できるわけではなく、あくまで「減らす」ことが目的です。アマゾンなどで購入できるので、万が一に備えておくのもありだと思います。

第 24 章 マイクロ波編

次は最近よく聞かれるようになった「マイクロ波」について解説します。電子レンジにも使われているので、意外と身近な電磁波です。

第 24 章 1 節 マイクロ波とは？——電子レンジと同じ原理

Q：マイクロ波って何ですか？人体にどんな影響がありますか？

マイクロ波は、電磁波の一種で、周波数が 300MHz～300GHz の範囲のものを指します。電子レンジは、2.45GHz のマイクロ波を使って、食品中の水分子を振動させ、摩擦熱で温めています。

人体の約 60%は水でできています。そのため、マイクロ波が人体に照射されると、体内の水分子が振動し、組織が温められます。これを「熱作用」と呼びます。電子レンジで食べ物が温まるのと同じ原理です。

第 24 章 2 節 アクティブ・ディナイル・システム——皮膚に痛みを感じさせる仕組み

Q：マイクロ波で皮膚に痛みを感じさせることができるのですか？

はい。アメリカ軍が開発した「アクティブ・ディナイル・システム（ADS）」は、95GHz のミリ波を照射して、皮膚表面の水分子を急激に加熱することで、強烈な痛みを感じさせます。このミリ波は皮膚の表面からわずか 0.3 ミリメートルしか侵入しないため、皮膚の表面だけを 45℃以上に加熱し、火傷のような痛みを与えます。しかし、照射を止めればすぐに痛みは消え、組織に深刻な損傷は残らないとされています。

つまり、マイクロ波の技術を使えば、実際に傷つけることなく「痛み」だけを感じさせることが可能なのです。

「アクティブ・ディナイル・システム（ADS）」で実際にマイクロ波を人間に照射する実験をしているところです。逃げ惑う人たちをご覧ください。

【YouTube Video】非致死性兵器：アクティブ・ディナイル・システム（ADS）

【YouTube Video】THOR、マイクロ波兵器でドローン群を撃退

第 24 章 3 節 マイクロ波で電源を勝手にオンオフできる？——電子機器への影響

Q：マイクロ波で電子機器を遠隔で操作することはできますか？

マイクロ波は、電子機器の回路に影響を与えることがあります。特に、電源が入っていない蛍光灯でも、マイクロ波を照射すると中のガスが励起されて光ることがあります。また、電子機器の回路にマイクロ波が入り込むと、誤動作を起こしたり、最悪の場合、回路が破壊されたりすることがあります。

電源コードが無いのに蛍光灯が点灯するのが分かります。

【YouTube Video】電子レンジのマイクロ波パワー／A Microwave's Microwaves

マイクロ波ではありませんが、同じく違法な電波を使って、全く火の気が無いところでも、遠隔攻撃で、ストーブに火をつけて放火することができる事が分かります。

【YouTube Video】“違法電波”放つ「外国製無線機」が急増...『電波Gメン』取り締まりに密着取材 「知らなかった」でも影響は家電や航空機にまで
(2023 年 4 月 5 日)

ドローンや電子機器の回路を破壊する兵器も研究されています。

ドローンに照射すると、ドローンの電子回路を破壊して、撃墜できるのが分かります。もちろん、アナタの家の家電や電子機器に照射したら破壊することができます。

もし、電子製品が頻繁に壊れるようになったら、近所からマイクロ波攻撃されている可能性も考える必要があるかもしれません。

【YouTube Video】「高出力マイクロ波照射装置」 日本の防衛“最新技術”

ドローンを撃墜するマイクロ波兵器です。

【YouTube Video】THOR、マイクロ波兵器でドローン群を撃退

第 24 章 4 節 マイクロ波は水が吸収する——防御のヒント

Q：マイクロ波から身を守るにはどうすればいいですか？

マイクロ波は、水に吸収される性質があります。つまり、水を含んだものを身につけることで、マイクロ波の影響を減らせる可能性があります。ただし、これは完全な防御ではなく、あくまで対処療法です。

第 25 章 車の運転中に急に眠くなる攻撃対策 ——ダメもとで試してほしい 4 つの方法

正直、仕組みはまだよく分からないのですが、以前紹介されていて、試してみたら有効だった方法をご紹介します。車の運転中に急に眠くなる攻撃は大きな事故や生死に関わる問題なので、ダメ元で試してみてください。

Q：車の運転中に急に眠くなるのは、攻撃ですか？対策は？

車の運転中に急に眠くなる原因は、目に見えない攻撃だけでなく、普通に蓄積した疲労や睡眠不足などでも起こり得ます。

しかし、明らかに睡眠不足でもないし、疲れてもいないのに「急に眠くなってウトウトする」ことがあります。そんな時は攻撃を疑って、以下の対処を試してみてください。

※注意  なぜか公表するとすぐに対策されるので有効でない可能性もありますが、

その場合は予めご了承ください。

第 25 章 1 節 対策 1：停車するのがベスト

一番安全なのは、車を安全な場所に停めて休憩することです。様々な攻撃チャンネルがあるので、効果があるかどうかは人によりますが、少なくとも運転を続けるよりは安全です。

第 25 章 2 節 対策 2：水を含んだタオルを首に巻く

マイクロ波は水に吸収されるため、水を含んだタオルを首に巻くことで、首の周辺のマイクロ波を吸収して減らせます。あと、オマケ効果で冷たいタオルだと目も覚めやすくなります。また、眠気が急に無くなることもあります。

第 25 章 3 節 対策 3：ジェルパッドを首に巻く

冷却用のジェルパッドも、水を含んでいるためマイクロ波を吸収します。首の後ろに当てることで、眠気を感じにくくなります。また、眠気が急に無くなることもあります。

第 25 章 4 節 対策 4：首を 45 度傾ける

あと、運転しながらでも分かる方法として、首を 45 度ほど大きく傾けると、眠気が急に無くなる場合があります。頸椎の位置が変わり、何か変化するのでしょう。

第 25 章 5 節 対策 5：充電池を袋に入れて首の後ろにつける

この方法は、原理はわかりませんが、他の人が紹介していて、試してみたら劇的に効果的だったので紹介しておきます。市販の充電池を買ってきて、小さな袋を作って、安全ピンなどで首の後ろにつけておくだけで、眠気が急に無くなる場合があります。

市販の充電池

布で小さな袋を作って、充電池を入れておきます。

安全ピンで首の裏や胸ポケットなどに入れておきます。

小さな袋を作って、安全ピンなどで首の後ろにつけておく

ただし、これらはあくまで対処療法です。根本的な解決には、磁場を遮断できるようになることが望ましいです。

また、有効だった方法があればコメント欄などで教えて頂ければ幸いです。

第 26 章 政府が国民を傷つけるシステム—— 南米の「死の部隊」「汚い戦争」「キャラバン・オブ・デス」

トランプ大統領がアメリカ国民に「経済 DV をして大勢の国民が困窮化」したり、「ICE で無実の国民を弾圧」したり、自国民を傷つけていますが、極右政権、ファシズム政権が国民を搾取して弾圧するのは有名な話です。

米国政府やイスラエル政府が、無実のフランチェスカ・アルバネーゼ氏や ICC の裁判官たちを制裁していたり、エプスタイン事件の被害者を FBI や CIA が守らずに、加害者を守って弾圧に加担しているのも有名な話です。

ここからは、政府が国民を密かに拉致・殺害した歴史の実例を、簡単に紹介します。これは決して遠い国の昔話ではありません。悪党が権力を握ると、悪が支配して「悪が正義」にすり替わります。このように「国家が国民を傷つけるシステム」がどう機能するのか、その構造を理解することは、「ギャングストーリーキング」のような犯罪を考える上でも重要です。

第 26 章 1 節 「死の部隊」とは何か？

死の部隊とは、社会主義や反体制の革命軍に対抗するため、市民を暗殺する白色テログループの総称です。冷戦時代の中南米で最も盛んに活動しました。構成員は、軍内の極右、保守反動派、退役軍人、予備役兵、現役警官などです。彼らは軍や警察の制服を脱ぎ、民間人の服を着て活動していました。

つまり、「国家機関が関与しながらも”非公式”を装うのが最大の特徴」です。

「ギャングストーリーキング」も「ファシズム」も、ハイテク兵器を使いながら一般の民間人が参加して集団リンチや嫌がらせに加担するのが特徴です。

Targeted Justice 氏など大勢が指摘するように、米国政府🇺🇸と考えるのが妥当です。

Targeted Justice Newsletter

Is Russia or China doing satellite microwave attacks on U.S. soil?

Is Russia or China doing microwave attacks on U.S. soil...

Read more

2 months ago · 32 likes · 4 comments · Targeted Justice, Inc.

ロシアまたは中国は、米国本土に対して衛星マイクロ波攻撃を行っているのか？

絶対に違います。

Targeted Justice Newsletter

The Treaty that put your name on the TI List. Reposted.

The Treaty that your Government signed...

Read more

17 days ago · 40 likes · 6 comments · Targeted Justice, Inc.

第 26 章 2 節 「汚い戦争」——アルゼンチンの国家テロ

「汚い戦争」は、1974 年から 1983 年までのアルゼンチン軍事政権による国家テロの時代です。この期間、22,000 人から 30,000 人が殺害または失踪したと推定されています。

軍事政権は「国家再組織プロセス」と称して、軍と治安部隊が組織的に左派活動家だけでなく一般市民まで拉致・拷問・処刑しました。特に悪名高いのが「アルゼンチン反共同盟（AAA、トリプル A）」です。これは軍や警察と密接に結びついた死の部隊で、政治的反对者を狩り立てました。

軍政府は各大都市に秘密収容所を設置し、そこに拉致した市民を監禁しました。そして最も残酷なのが「死の飛行（Vuelos de la muerte）」です。囚人を薬で眠らせ、服を脱がせ、飛行機から海に投げ落とすという方法で殺害しました。この方法が選ばれた理由は、遺体を完全に処分し、証拠を消すためでした。

【書籍】国家テロリズムと市民: 冷戦期のアルゼンチンの汚い戦争

【ゼロからわかるアルゼンチンの歴史】 第3部：軍政の悲劇と経済危機を経て

第26章3節 「キャラバン・オブ・デス」——チリの具体的な殺害作戦

1973年9月11日のチリクーデター後、ピノチェト将軍は地方の司令官たちが「政治犯に甘い」ことに不満を持ちました。そこで陸軍准将セルヒオ・アレジャノ・スタルクを派遣し、「裁判手続きを一度に片付けろ」と命じました。これが「キャラバン・オブ・デス（死のキャラバン）」です。

この部隊は数名の陸軍将校と2名の歩兵で構成され、アレジャノ准将が指揮しました。彼らは「プーマ」ヘリコプターに乗り、手榴弾、機関銃、ナイフで武装して、チリの南北の町を次々と回りました。各町に到着すると、裁判にかけられていた政治犯たちを連れ出し、峡谷などに連行して射殺しました。

1973年9月30日から10月22日の間に、この部隊は16の町を回り、97人を殺害しました。この作戦はピノチェト自らが命じたものであり、後に人道に対する罪として裁かれました。

第 26 章 4 節 なぜ「気づかれないように」できたのか——「失踪」という仕組み

これらの虐殺が長年見過ごされた理由は、「失踪」という仕組みにあります。拉致された人は「行方不明」として処理され、遺体は海に捨てられるか、秘密裏に埋葬されました。政府は「そういう人物は知らない」と言い、証拠が存在しない状態を作り出したのです。

しかし、遺体を隠しても、真実は消えません。アルゼンチンやチリでは、長い年月を経て、元軍人たちの証言や国際的な人権団体の調査により、これらの犯罪が明らかになりました。そして現在、多くの関係者が「人道に対する罪」で裁かれています。

第 26 章 5 節 まとめ——完全な防御は難しくても

ここまで、磁性ナノ粒子による 10 個の健康被害のメカニズムと、日常生活でできる簡易な対策、そして国家が国民を傷つける歴史の実例を見てきました。

「ギャングストーキング」も、圧倒的なハイテクを使ったこのような「国家が国民を傷つけるシステム」の 1 つだと考えられます。

予測警察システム⑤：国家テロとイジメは同じ構造——加害組織の「見えない偽装」を読み解く(未完成版)

さて、今回と次回の2回に渡って、加害者組織についてみて行きたいと思います。

今回は、「なぜ加害組織が見えないのか?」「どうやって加害者を増やすのか?」「ナチスと同じ設計であること」「国家が国民を傷つける国家によるテロ（ギャングストーキング）と学校のイジメの構造は同じ」であり、なぜイジメをするのか?について、見ていきます。

特にパターンは同じなので、なぜファシズム政権が次から次へとおかしい法律を作っているか?狙いを理解する上で役立つと思います。

第 27 章 民間人が突如モンスターに？

前回、南米の「死の部隊」「汚い戦争」「キャラバン・オブ・デス」について触れました。国家が国民を密かに拉致・殺害するシステムの実例です。今回は、いよいよ核心に迫ります。「予測警察システム」の加害組織は、一体誰なのか？ というテーマです。

「政府が国民を傷つける」と聞くと、多くの方は「そんな馬鹿な」と思うかもしれません。しかし、南米で起きたことは決して遠い国の昔話ではありません。南米や中東では知られていることですが、「国家が国民を傷つける国家によるテロ」というものが存在するのです。そして何より恐ろしいのは、加害者たちが「普通の民間人」に紛れ込んでいるという点です。

なぜ、そんなことが可能なのか？ 一緒に謎を解いていきましょう。

第 28 章 なぜ加害組織は「見えない」のか？

第 28 章 1 節 足がつかないように「民間に外注」する

Q. 悪事を働く組織なのに、なぜ警察に捕まらないのですか？

回答：足がつかないように「民間に外注」しているからです。

まず押さえるべきは、まともな選挙で政権交代が起き、野党が政権についてしまうと、それまでの悪事がバレてしまうリスクがあるという点です。表向きの政府が交代すれば、過去の不正や弾圧の記録が国会で追及され、責任者が処分され、組織そのものが解体される可能性があります。だからこそ、危険な仕事は「表の政府」から切り離され、民間企業や外注先に移されているのです。

この「民間外注」の必要性を如実に示したのが、Total Information Awareness (TIA) の失敗です。TIA は 2002 年、国防総省の DARPA が「テロリストを事前に察知する」名目で、国民の電話・メール・クレジットカード履歴・医療記録などを一元的に収集・分析する監視システムを構築しようとしていました。しかし、議会が「プライバシーと市民的自由への侵害が大きすぎる」として 2003 年に資金を削除し、TIA は正式に閉鎖されたのです。

TIA が潰された直後の 2003 年、Palantir (パランティア) が設立されました。当初は誰も出資しませんでしたでしたが、唯一手を挙げたのが CIA の投資部門「In-Q-Tel」でした。In-Q-Tel は「米国の諜報機関が技術的優位を保つこと」を目的とした CIA の準公的ファンドです。2005 年に約 200 万ドルを投資し、その後 3 年間、CIA は Palantir の唯一の顧客でした。Palantir の「Gotham」は、政府機関のバラバラのデータを統合し、AI が分析・監視するシステムです。議会で止められた TIA の機能が、民間企業の製品として、CIA の資金でよみがえったのです。

現在、Palantir は ICE (移民関税執行局) と 3,000 万ドル (約 45 億円) の契約を結び、「ImmigrationOS」と呼ばれる監視プラットフォームを提供しています。政府が直接やれば議会に止められる業務も、民間企業が請け負えば「契約業務」として遂行できてしまう——これが、この構造の恐ろしさです。

第 28 章 2 節 日本でも足がつかないように「民間に外注」する

Q. 日本でも、同じ「民間外注」の構造はあるのですか？

回答：はい。警察の監視機能が、OB の天下り先の警備会社に「移植」されています。

沖縄の辺野古で米軍基地反対派のリストを作成していた警備会社「ライジングサンセキュリティサービス」には、第 88 代警視總監を務めた池田●彦氏が 2015 年 11 月に顧問として迎え入れられていました。池田氏は警察庁警備局長を歴任した「公安畑」のエリートで、市民運動の監視に携わってきた人物です。防衛省沖縄防衛局が同社に対し、基地反対派のリストを作成して監視するよう依頼していたとする内部文書を毎日新聞が報じています。実際に、抗議する市民約 60 名分の顔写真や名前を記したリストが作成されていました。

警察が直接市民を監視すれば「政治弾圧」として批判されます。しかし、警備会社が「警備業務の一環」として同じことをすれば、表向きは「民間の警備業務」に見えてしまう。Palantir が CIA の外注先として作られたのと同じ論理で、日本の警察も民間企業を通じて監視機能を維持しているのです。

だからこそ、気づかないのです。何か問題が起きても、末端の外注先企業や個人を処分すれば、上層部には絶対にたどり着かない。そういう多層的な防火壁が作られているのです。

第 28 章 3 節 「愛国者」や「カルト」は偽装

もう一つ、加害組織を覆い隠すものがあります。それは「カルト」や「宗教」への偽装です。

Q. なぜ「右翼」や「カルト」に偽装するのですか？

回答：おかしい活動をしていても「熱心な信者」で済むからです。

加害組織は、右翼や日本会議^{🇯🇵}や統一協会^{🇯🇵}などのカルトに偽装しています。アメリカでは、キリスト教福音派がカルト化していて、トランプの熱烈な支持者として有名です。なぜなら、おかしい活動や行動をしていても「熱心なカルト信者だから」という理由で追及されずに見過ごされてしまうからです。キリスト教福音派や MAGA も、同じ理由で長年見過ごされてきました。偽装として、これほど都合の良いものはありません。

統一協会^{🇯🇵}の被害は 50 年以上前から日本に存在し、一部ではよく知られていました。しかし、一般の国民はそんな有害なカルト組織があることすら知らず、安倍晋三暗殺事件で犯人が統一協会^{🇯🇵}の宗教 2 世だったことで、初めて広く知れ渡るようになりました。ようやく「カルトに乗っ取られている」という話が、一般社会でできるようになったばかりです。

実際、2026 年 3 月 12 日の国会答弁で、高市早苗首相は自身の名前が統一教会の内部文書に 32 回登場していることを認めましたが、団体との関連は否定しました。文書には「安倍首相はきっと高市さんと関係を築かせてくれる」といった記述があったとされています。さらに、高市氏は統一教会と関係が深いとされる『世界日報』の取材を 5 回受けていたことも明らかになっています。

政権の中枢に、こうした組織と一体になった政治家が多数いる——これは単なる「保守層の政治家」ではなく、組織的な浸透が完了しつつあることを示しています。多くの国民が気付かぬうちに、ドンドン侵食されてファシズムに乗っ取られていったのです。

第 29 章 なぜ「普通の人」が加害に加担するのか？

第 29 章 1 節 報酬や出世と引き換えに倫理を捨てる

Q. なぜ人は加害に加担するのですか？

回答：報酬システムがあるからです。

これが、加害組織が「自発的な協力者」を大量に生み出せる理由です。イスラエルでは、通報や情報提供を「ビジネス」として成り立たせる仕組みが、国家レベルで構築されています。

イスラエル政府は、ガザ地区の住民に対し、人質の位置情報を提供した者に 500 万シェケル（約 1 億 4000 万円）の報酬と安全な国外退去を約束しました。ネタニヤフ首相自ら発表し、報酬額は当初の 100 万シェケルから 5 倍に引き上げられています。さらに、イスラエル軍はガザに 80 万ドル（約 1 億 2000 万円）の懸賞金を約束するビラを撒いていました。

また、イスラエルの政府高官が公認する監視ネットワーク「シリオン・コレクティブ」は、「反ユダヤ主義者」や「ハマス支持者」と分類した人物の情報提供に、社会的身分に応じた懸賞金を支払うプログラムを公表しています。学生の情報には 500～1500 ドル、医師の情報には最大 7500 ドル、政治家の情報には最大 1 万～1 万 5000 ドルが支払われるといます。「反ユダヤ主義者」というレッテルは、実際にはパレスチナ支持のデモに参加しただけの一般市民を指すことも多く、報酬目当ての密告が無関係な市民を標的にする構造ができあがっています。

第 29 章 2 節 「ゲーム化」された監視

Q. 報酬システムは、兵士たちにも使われているのですか？

回答：はい。イスラエル軍では、パレスチナ人の写真をどれだけ多く撮影したかを競わせる「ゲーム」が行われていました。

イスラエル軍はヨルダン川西岸のヘブロンに、顔認識技術を使った監視データベースを構築しました。兵士たちのスマートフォンに「ブルーウルフ」と呼ばれるアプリをインストールさせ、パレスチナ人の写真を撮影して送信させる仕組みです。最も多く撮影した部隊には休暇などの報酬が与えられ、兵士たちは競い合うようにパレスチナ人の顔を収集していました。元兵士はこのシステムを「パレスチナ人のためのフェイスブック」と呼んでいました。

この「ゲーム化」の恐ろしさは、罪悪感を完全に消してしまう点にあります。人権侵害を「ポイント稼ぎ」に変えることで、兵士たちは自分が何をしているのか深く考えることなく、日常的に監視と密告に加担してしまうのです。

第 29 章 3 節 「自発的な協力者」が大量に生まれる仕組み

Q. なぜ、こんな仕組みが成立するのですか？

回答：人間の弱さと欲に付け込んでいるからです。

金がもらえる。安全が手に入る。出世できる。仲間内で認められる。たったそれだけで、多くの人は「まともな人間」から「加害者」に変わってしまう。

イスラエルの報酬システムは、単なる「お金で買う」だけではありません。安全な国外退去、家族の保護、医療の提供——生存そのものを報酬として差し出すことで、追い詰められた人々にとって「拒否できない誘惑」を作り出しています。

パレスチナ人のゲイコミュニティを対象にしたケースでは、イスラエルの諜報機関が性的指向を理由に迫害される人々の弱みを握り、「保護と引き換えに協力しろ」と脅迫して情報提供者に仕立て上げる手口も報告されています。金や特典だけでなく、弱みを握ることも、協力者を生み出す強力な手段として使われているのです。

第 29 章 4 節 労組潰しで多額の報酬

具体的な事例を見てみましょう。

関西生コン事件——これは戦後最大規模の労働事件として知られています。連帯労組（関生）を潰すために、経営側の大阪広域生コンクリート協同組合が右翼活動家を雇いました。右翼活動家の瀬戸●幸氏は、自身のブログで「生コン企業の経営者と業務委託契約を結び、毎月 70 万円を頂いていた」と明かしています。大阪広域の木●理事長から直接電話があり、「武●一という男に今いじめられているから何とか助けてください」と依頼されたのがきっかけだったと瀬戸氏は述べています。同氏は「あなた方、仕事して金もらってるでしょ。我々も給料としてもらってるんです。業務委託として」と語っています。

この事件では、組合員が「ストライキが犯罪」として逮捕され、逮捕者は 81 人に上りました。しかし、後に無罪判決が相次ぎ、労働組合としての正当な行為が犯罪とされていたことが明らかになっています。

つまり、残念ながら金をもって嫌がらせを請け負う——これが現実に行われているのです。

そして、もっと広い視点で見ると、日本では性加害を隠蔽して被害者潰しに加担すると出世したりできる構造があります。エプスタイン事件も同じです。加害者を守ることで、自分も利益を得る。被害者を切り捨てることで、権力者に気に入られる。

第 29 章 5 節 多額の報酬が得られる仕組み

Q. なぜこんな仕組みが成立するのですか？

回答：人間の弱さと欲に付け込んでいるからです。

金がもらえる。出世できる。権力者に気に入られる。仲間内で認められる。たったそれだけで、多くの人は「まともな人間」から「加害者」に変わってしまう。倫理観や道徳を捨ててしまえば、多額の報酬が得られる——そういう仕組みになっているのです。

例えば、イスラエルが公式で認めている話ですが、多数のフォロワーがいるインフルエンサーがイスラエルを擁護する発言をすると多額の謝礼をもらえる仕組みがあります。多くのアメリカ人はイスラエルと決別したようですが、中には報酬目当てで擁護し続けている人もいます。

第 29 章 6 節 犯罪者をリクルートして手駒にする

Q. 犯罪者がなぜ「手駒」として使われるのですか？

回答：罪を揉み消すことができるのは、国家だけだからです。

CIA などの諜報機関や FBI など警察が、カルトや麻薬組織を手先の工作員として使うのは有名な話です。実際に麻薬カルテルを手駒にしているのはアメリカです。これは様々な調査結果から明らかになっています。

歴史を振り返ると、CIA は 1940 年代からマフィアや麻薬密売人を工作員として活用してきました。CIA の前身である OSS は、チャールズ・“ラッキー”・ルチアーノやマイヤー・ランスキーといったマフィアの大物と関係を築き、シチリアのマフィア指導者たちとの連絡役として活用しました。

犯罪者の罪を揉み消す代わりに手駒にする——これは CIA などの諜報機関がよく使う手口です。そして、犯罪の揉み消しができるのは国家や政府だけなのです。

パナマのノリエガ将軍はその典型例です。ノリエガは CIA と年 20 万ドルで契約を結び、その給与台帳に名を連ねる協力者でした。1976 年には CIA 長官ジョ

ージ・H・W・ブッシュの下で中米工作に従事し、見返りに CIA 航空機を使ったコロンビア産コカイン密輸を許可されていたとされています。しかし、その利用価値が失われると、1988 年 2 月にアメリカはノリエガを麻薬取引への関与で起訴しました。全ての罪状を合わせれば 145 年の刑期に相当するものでした。犯罪者を「資産 (asset)」として保護し、不要になれば切り捨てる——これが、諜報機関の論理なのです。

第 29 章 7 節 日本にもあった A 級戦犯の釈放

CIA は日本の暴力団のメンバーもリクルートし、日本が非共産主義圏にとどまるよう工作していました。日本のヤクザも同様です。児玉●士夫は第二次世界大戦後、巣鴨プリズンから出所した後、CIA のために働いていました。CIA を筆頭としたジャパンハンドラーたちは、ヤクザを利用し、数々のダーティワークに利用してきたのです。

第 30 章 鬼滅の鬼と同じピラミッド構造

第 30 章 1 節 まず「鬼滅の刃」とは何か？——鬼の組織を理解する

Q. 鬼滅の刃を知らないのですが、どんな話ですか？

回答：人間を喰らう鬼と、それに立ち向かう鬼殺隊の戦いを描いた物語です。

鬼滅の刃は、吾峠●世晴（ごとうげ こよはる）による漫画作品で、2016 年から 2020 年まで週刊少年ジャンプに連載され、アニメ化や映画化もされて世界的な大ヒットとなりました。舞台は大正時代の日本。主人公の竈門炭治郎（かまど たんじろう）は、家族を鬼に惨殺され、唯一生き残った妹の禰豆子（ねずこ）も鬼にされてしまいます。炭治郎は、妹を人間に戻す方法を探すため、鬼を狩る組織「鬼殺隊」に入隊し、戦いを繰り広げる——というのが大まかなあらすじです。

Q. 鬼とは何ですか？

回答：人間が鬼舞辻無惨（きぶつじ むざん）の血を受けて変貌した存在です。

鬼は、人間を喰らうことで生きながらえ、力を増していきます。太陽の光に弱く、首を日輪刀で斬られると死にますが、それ以外の方法ではなかなか殺せません。そして、鬼の頂点に立つのが、鬼舞辻無惨（きぶつじ むざん）という存在です。

Q. 鬼舞辻無惨は、どのように鬼を支配しているのですか？

回答：血を与えて力を与え、恐怖で支配しています。

無惨は、自らの血を人間に与えることで鬼を生み出します。そして、鬼たちには「無惨の血が濃ければ濃いほど強い」というヒエラルキーがあります。無惨は、鬼たちの思考を読むことができ、裏切ろうとすれば遠隔から即座に殺すこともできます。

また、無惨は「十二鬼月（じゅうにかげつ）」という上級の鬼たちを組織し、彼らにさらなる血を与えて強化します。十二鬼月は、上弦（じょうげん）と下弦（かげん）に分かれ、それぞれに序列があります。鬼たちは、無惨に認められればより強い血をもらえる——つまり、「餌」で釣られているのです。

第 30 章 2 節 加害組織の構造は鬼と同じ

Q. 加害組織の全体像をイメージで表すと？

回答：鬼滅の鬼と同じピラミッド型の組織です。

これが一番分かりやすいかもしれません。

鬼滅の刃の組織構造を思い出してください。

頂点：鬼舞辻無惨——すべての鬼の支配者。

自らの血で鬼を生み出し、恐怖と「餌」で操る。

上級鬼：十二鬼月——無惨から強い血を与えられた精鋭。

上弦と下弦に分かれ、それぞれに序列がある。

無数の鬼たち——無惨の血を受けて生まれた末端の鬼。

人を喰らって生きている。

加害組織の構造も、これとまったく同じです。

上級鬼——イーロン・マ●ク、トラ●プ、高市●苗、

ネタニ●フなどの権力者・富裕層・金融エリート。

彼らは「犬笛」を吹き、報酬をちらつかせ、

性欲や金や仲間内での承認欲求を餌にして、下級鬼を集める。

低級鬼——ネトウヨ、アンフェ、MAGA、統一協会信者、

右翼活動家など。彼らは「餌」に釣られて集まり、集団で襲いかかる。

そして、被害者やターゲットのように酷い目に遭いたくなければ、「言うことを聞け」「指示通りに動け」と買収する仕組みが横行しているのです。

第 30 章 3 節 見捨てられた MAGA

Q. なぜ「鬼」にたとえられるのですか？

回答：文字通り、人から搾取して生きているからです。

鬼は人を喰らう。加害組織も同じです。

武力を武器に、人から搾取する。被害を訴えたり、反撃しようとするを殺す。文字通り人を喰らって生きている生物——それが加害組織の正体です。

そして、トランプが不要なイラン戦争をしてアメリカ国民を困窮化させ、経済を破壊して、MAGA や極右ですら離反していることから、彼らが私利私欲の嘘つき集団であることは明白です。

鬼は「仲間」を大事にしません。餌がなくなれば、仲間さえも喰らう。加害組織も同じです。利益にならなければ、末端の人間は簡単に切り捨てられる。

第 30 章 4 節 罪悪感を感じにくい「悪魔のシステム設計」

Q. なぜ、加害者たちは罪悪感を感じないのですか？

回答：罪悪感を感じなくて済むように、システムが設計されているからです。

「鬼」になることに、何の罪悪感も必要ありません。報酬をもらって、出世して——ただそれだけで、普通の人が「鬼」になっていく。なぜ、そんなことが可能なのか？ それは、ナチスのシステムがそうだったように、罪悪感を感じないように組織が設計されているからです。

第 30 章 4 節 1 項 ナチスの「悪魔のシステム設計」

ナチス・ドイツのユダヤ人虐殺では、ガス室で直接殺したのはごく一部でした。しかし、数百万人が殺される過程には、何万人もの「普通のドイツ人」が関わっていました。

鉄道の職員は「輸送スケジュールを管理してただけ」、役所の職員は「書類を処理してただけ」、工場の労働者は「部品を作っていただけ」——誰も、自分が「殺人者」だとは思っていませんでした。

哲学者ハンナ・アーレントは、ナチス高官アイヒマンの裁判を傍聴して、彼が「自分の仕事をしてただけ」と主張する姿に衝撃を受け、これを「悪の凡庸さ」と呼びました。

ナチスのシステムには、罪悪感を消す仕組みがありました。分業で誰も全体像を見えなくし、婉曲表現（「最終解決」「移送」）で残酷さを覆い隠し、命令への服従で責任を上に移し、報酬と出世で「生活のため」という言い訳を与えました。

闇バイトも同じですね。そもそも貧しくなるような失政が元凶ですよね？

第 30 章 4 節 2 項 現代の加害組織も同じ設計

現代の加害組織も、同じ「悪魔のシステム設計」を持っています。

報酬システム

——「給料をもらっているだけ」「業務委託だ」という言い訳が成り立ちます。

関西生コン事件で月 70 万円をもらっていた右翼活動家も、

「業務委託として給料をもらっているだけ」と語っていました。

分業と匿名性

——SNS での誹謗中傷は、一人ひとり「ちょっとした書き込み」に過ぎません。

しかし、それが何百と集まれば殺人級の攻撃になります。

書き込んだ本人は「自分は大したことをしていない」と思っています。

婉曲表現

——「経済的国策」「効率化」「市場の調整」「自己責任」

——人を困窮させ、死に追いやる行為が、

ビジネス用語や政治用語で覆い隠されます。

システムへの埋没

——「AI が判断した」「アルゴリズムが決めた」——人間が判断しているのに、

「システムがやった」ことにすることで、誰も責任を取らなくなります。

仲間内での承認

——過激な発言をすればするほど、エコーチェンバー内で「英雄」として称賛されます。

罪悪感ではなく、承認欲求が行為を強化するのです。

「仕事だから」「言われただけ」「頼まれただけ」「バレなきゃ大丈夫」こうやって「加害を自己正当化する」のです。

第 30 章 4 節 3 項 システムを設計した者は「真の悪魔」である
鬼舞辻無惨がすべての鬼を生み出し、操っているように、加害組織の頂点に立つ者たちが、ファシズムシステム全体を設計し、末端の人間を「鬼」に変えているのです。

そして、彼ら自身は決して手を汚しません。

無惨が直接人を喰らわないように、上級鬼たちは直接手を下しません。彼らは「犬笛」を吹き、報酬をちらつかせ、末端の鬼たちに襲わせるのです。

これが、「鬼滅の鬼と同じピラミッド構造」の最も恐ろしい点です。そして、この構造を理解することが、加害組織の正体を見抜く第一歩なのです。

第 31 章 なぜ「国家が国民を傷つける国家によるテロ」と「学校のイジメ」が同じなのか？

第 31 章 1 節 「国家が国民を傷つける国家によるテロ」と「学校のイジメ」は同じ

Q. 国家レベルの弾圧が、なぜ学校のイジメと同じなのですか？

回答：ターゲットの選定と攻撃などのプロセスが、イジメの構造と完全に一致するからです。

Q. ターゲットはどうやって選ばれるのですか？

回答：イジメと同じ構造です。「組織的ターゲット化の 6 フェーズ」で理解できます。

ここからが核心です。加害組織のターゲット選定と加害方法は、基本的に学校のイジメと同じです。国や制度は違っても、学校のイジメや職場のイジメはあるでしょう。あなた自身の体験を思い出してみてください。なぜ、あの人はターゲットにされたのか？ どうやって「皆」が加害に加わったのか？ その構造を理解することが、予測警察システムの加害組織を理解する鍵になります。

第 31 章 2 節 イジメの 4 層構造とは？

まず理解すべきは、イジメの 4 層構造です。

社会学者の森田洋司が提唱した理論で、イジメは「被害者」と「加害者」だけでなく、イジメを煽る「観衆」と見て見ぬふりをする「傍観者」で構成されています。

なぜ傍観者が重要なのでしょうか？ イジメを煽ることで加害の継続や拡大を助長し、見て見ぬふりをするだけでもイジメを容認することにつながるからです。

そして重要なのは、イジメ加害は「地位の獲得」という目的を持った手段だということです。思春期では人気や注目を集めることが重要で、イジメ加害者は周囲からの人気（社会的な地位）を求めています。実際、地位を追求する子どもほどイジメ加害行為を行いやすく、イジメ加害者は人気が高い一方で、周囲からそれほど好かれていません。実際に、イジメにあまり加担しない傍観者の方が身分が低く、積極的に自ら加担する加害者の方が身分が高くなっています。

つまり、周囲がいじめ加害者がある意味で容認している——これがイジメが持続する最大の理由です。

そして、この4層構造の中でイジメが進行するプロセスが、「組織的ターゲット化の6フェーズ」です。以下、順に見ていきましょう。

第31章3節 PHASE 1【選定】——「次のターゲット」はこうして決まる

Q. なぜ、あの人がターゲットにされるのですか？

回答：目立つ人、弱みのある人、逆らう人が選ばれます。

イジメのターゲット選定には、いくつかの共通パターンがあります。

第一に、目立つ人。優れている人、正義感の強い人、発言力のある人——「出る杭」は打たれます。第二に、弱みのある人。経済的に苦しい人、家族に問題を抱えている人、心身に疾患のある人——守りが薄い人が狙われます。第三に、

逆らう人。権力者に対して「おかしい」と言える人——体制にとって都合が悪い人です。

なぜターゲットに選ばれるのか？ 目立つから、弱そうだから、反撃してこなさそうだから——理由は様々ですが、本質は「搾取しやすいかどうか」です。

予測警察システムのターゲット選定も同じです。政府や権力者の不正を告発しようとする人、戦争に反対する人、ファシズムに抵抗する人——「社会にとって都合が悪い」と判断された人が、静かにリストに載せられていくのです。

第 31 章 4 節 PHASE 2【監視】——本人が知らないうちに「弱みの収集」が始まる

Q. なぜ、私の情報が知られているのですか？

回答：あなたが知らないうちに、監視と情報収集が始まっています。

ターゲットが選定されると、まず「監視」フェーズに入ります。これは、学校のイジメでいえば「あの子はどんな子か？」「どんな弱点があるか？」「友達是谁か？」を調べる段階です。

予測警察システムの場合、この監視はテクノロジーによって自動化・効率化されています。前述の Palantir（パランティア）社は、ICE（移民関税執行局）に対して「ImmigrationOS」と呼ばれる監視プラットフォームを提供しています。公開された連邦契約記録によれば、ICE は 2025 年 4 月 17 日に Palantir に対して 3,000 万ドル（約 45 億円）の契約修正を授与し、このプラットフォームの開発を委託しました。このシステムは、政府の様々なデータベースを統合し、ターゲットの現在地を「予測」する能力を持っています。Palantir はまた、「ELITE」と呼ばれるツールも開発しており、これは監視対象の医療補助、納税記録、電気・水道の請求書など大量のデータを統合し、アルゴリズムによって地図上にターゲットを冷酷にマーキングするものです。

つまり、あなたの SNS 投稿、購買履歴、位置情報、人間関係——これらすべてがデータベース化され、AI によって分析されているのです。さらに、加害組織は、盗聴・盗撮・通信傍受・スマホやパソコンのハッキング・家宅侵入・GPS 尾行により、行動パターンや全ての個人情報を把握します。

あなたが気づかないうちに、あなたの「弱み」はすべて把握されているのです。

そして、その弱みが後の攻撃に使われる。なぜ、今、AI が勝手にハッキングしたり、個人情報保護が漏洩しているかわかりますか？ ショックドクトリンと同じで、災害に見せかけて「弱み」になる情報を次から次へと片っ端から収集しているからです。分析して後で「投票や支持の脅し」に使ったりできます。逆転勝利のためのシナリオの下準備な訳です。

例えば、トランプ政権は自分たちの手抜き工事を無実のアスリートに罪をなすりつけて罪をでっち上げました。既に多発しているので、予告しておきますが、これからはこのように無実の人が身に覚えのないでっち上げの罪や陥れられて濡れ衣を被せられる事件が増えると思われます。お気をつけください。

第 31 章 5 節 PHASE 3【ストーキング】——「自分だけがおかしいのかな」という錯覚を作る

Q. なぜ、周りの人の行動が急に変わるのですか？

回答：あなたを孤立させるための「心理的錯覚」が意図的に作られています。

監視の次は「ストーキング」フェーズです。これは「職場、地域ぐるみで細かいながらも執拗な嫌がらせを続け、ターゲットを疲弊させる集団犯罪行為」です。ここで重要なのは、「これは偶然かもしれない」と思わせるような微妙な嫌がらせが行われることです。

外出すれば見知らぬ男がつきまとい、スーパーに行けばタイミングよく救急車がすれ違い、家に帰れば非通知の電話がかかってくる。一つ一つは「偶然」に

思えます。しかし、それが毎日、繰り返し、あなたの行動に合わせて起こる。ターゲットが移動する際に車が行く手を遮ったり、衝突ギリギリの所を通過したりする——これが「コリジョン（衝突）キャンペーン」です。

すると、あなたはこう思い始めます。「自分だけがおかしいのかな？」「気のせいかもしれない」「こんなことを言ったら、キチガイ扱いされるかもしれない」。

これが、加害組織の狙いです。被害者自身に「自分の感覚を疑わせる」ことで、助けを求めることをできなくさせるのです。医学用語では「ガスライティング」と呼ばれる心理操作です。

第 31 章 6 節 PHASE 4【信用破壊】——「孤立」を制度化する

Q. なぜ、周りの人が自分の話を信じてくれないのですか？

回答：あなたの「信用」は、すでに組織的に破壊されています。

ストーキングで「自分はおかしいのかも」と思わせた後、今度は周囲に対する「先行信用の破壊」が行われます。

「あの人はキチガイだ」「陰謀論者だ」「フェイクニュースを流している」——こうした噂が、あなたの友人、家族、職場、地域社会に広められます。加害者は「キチガイ」「頭のおかしい人」というレッテルを貼り、デマや悪評を流します。被害者の住所や居場所が晒され、安全が脅かされます。

社会学者の森田洋司は、イジメ場面で見ても見ぬふりをする態度の背景には、「自分が被害者になることへの恐れ」と「集団への同調志向」があると指摘しています。傍観者たちは、こうした動きを見て、加害者を恐れて見て見ぬふりをして「被害者を見捨て」ます。つまり、周囲の人間は「自分がターゲットに

なりたくない」という恐怖から、被害者を孤立させる側に回るのです。これが「孤立の制度化」です。

エプスタイン事件の被害者たちが経験したことが、その典型例です。マリナ・ラセルダは14歳のときにエプスタインから性暴力を受けたと公表した直後から脅迫が始まりました。彼女はオンラインで「嘘つき」「売春婦」と呼ばれ、12歳の娘は学校で「エプスタインの子供か?」といじめられました。現在、彼女は銃を枕元に置いて眠っているといいます。

ロイター通信が特定した23人のエプスタイン告発者のうち、ほぼ全員が脅迫、嫌がらせ、威嚇を経験しています。見知らぬ人が家の写真を撮ったり、正体不明の車が家の前に停まって近づくと高速で走り去ったり、暴力の脅迫電話がかかってきたりしています。

被害者を「嘘つき」に仕立て上げる——これが、信用破壊フェーズの目的です。

第31章 7節 PHASE 5【攻撃】——「正当化」された暴力の実行

Q. なぜ、暴力が「正当なもの」として扱われるのですか？

回答：被害者が「悪者」に仕立て上げられているからです。

信用破壊が完了すると、攻撃フェーズに入ります。この段階では、もう多数派工作が完了していて、ターゲットが「キチガイ」であり「嘘つき」であり「社会の敵」であるという前提ができているため、孤立したターゲットに対して、集中的な攻撃が始まります。加害行為が「正当な制裁」あるいは「自衛」として正当化されるのです。

典型的なのが、戦前の「朝鮮人が井戸に毒を入れた」のようなデマの流布でしょう。「社会の敵」であるという前提を作って「無実の朝鮮人たちの虐殺」を「正当化」しました。

イジメ研究では、この段階を「無力化」と呼びます。暴力を集中的にふるい、「告げ口」への制裁を行い、被害者を「進んで、自発的に隷従」させる段階です。

そして重要なのは、この暴力が「正当化」されることです。被害者に責任が転嫁され、「あいつが悪いから」「あいつがおかしいから」という理由で、攻撃が正当化される。ラベリング論でいうところの「被害者への責任転嫁」と「被害の過小評価」です。

関西生コン事件では、経営側団体の理事長が「関生は労働組合とは思わない」と公言し、右翼活動家に月 70 万円を支払って労組潰しを依頼していました。組合員は「ストライキが犯罪」として逮捕され、逮捕者は 81 人に上りました。しかし、この弾圧は「労働組合の違法行為への対処」として自己正当化されたのです。

話し合って譲歩したり、諦めたりすれば良いのに、話し合わないで暴力で従わせて解決しようとするのです。

第 31 章 8 節 PHASE 6【継続的監視】——「逃げ場のない状態」を維持する

普通は、学校のイジメであれば、学校に行かなくなれば、イジメから逃げられます。会社のパワハライジメであれば、会社に行かなくなれば、パワハライジメから逃げられます。

しかし、逃げられなくなるのが、ギャングストーキングの恐ろしいところです。

Q. なぜ、引っ越しても逃げられないのですか？

回答：監視システムは地球上どこにでも存在するからです。

攻撃フェーズの後も、監視は終わりません。予測警察システムを導入してしまっているところが多いのも一因でしょう。ヨーロッパなどは排除しましたが。

ストーキング被害やつきまといが嫌で引っ越ししても、引っ越し直後は被害が激減しますが、その後しばらくするとまた激増して変わらなくなる——これは、予測警察システムの被害者に共通する体験です。

なぜ、引っ越ししても逃げられないのか？ それは、Palantir の「ELITE」のようなシステムが、ターゲットの現在地を「予測」するからです。「どこに誰がいるのか」を事前に知っているかのような精度で、摘発や嫌がらせが行われるのです。

これは「透明化」の段階と呼ばれます。イジメが常態化し、周りの人にも見えなくなる。そして、被害者は「逃げ場のない状態」に置かれるのです。

地球上どこに逃げても逃げられない「神の目」のようなシステム——これが、フェーズ 6 の恐怖です。

第 31 章 9 節 イジメの本当の構造について

このブログでは昔から取り上げているので、ご存知の方も多いでしょうが、もしかしたら、最近購読された方で、イジメの本当の構造「組織的ターゲット化の 6 フェーズ」について、初めて知って驚いた人も多いかもしれません。

実はイジメの構造を多くの人は勘違いしているのです。なので、永久に解決できないのです。そんなイジメの構造について詳しく解説した「イジメの構造の新教科書」を Kindle 出版しています。興味がある人は読んでみてください。

イジメの構造の新教科書 第 1 巻～イジメの本当の構造を体系的に理解する～

イジメの構造の新教科書 第 2 巻～告発者や被害者を潰す「村八分」と職場パワハラ

イジメの構造の新教科書 第 3 巻～日本のファシズムの病巣”体育会系”～

イジメの構造の新教科書 第 4 巻～性的暴力・ストーカー・痴漢・フェミサイドは衝動的犯罪ではなく「計画的犯罪」～

イジメの構造の新教科書 第5巻～なぜ「女話を聞かない」「女に反論したくなる」「買春するのか？」～

イジメの構造の新教科書 第6巻～支配の階層：ファシストはなぜレイプや拷問を”楽しんで”するのか？～

イジメの構造の新教科書 第7巻～アナタが知らないカルトと選民思想(男尊女卑)との深い密接な結びつき～

イジメの構造の新教科書 第8巻～なぜ女性議員が増えないのか？女性が”絶対”勝てないトリック～

イジメの構造の新教科書 第9巻～ファシズム国家～なぜ「正直者の発達障害」は排除され「共犯者」が生き残るのか？～

第32章 なぜイジメは「利益」を生むのか？

第32章1節 なぜイジメが無くならないのか？

Q. イジメに加担すると、誰が利益を得るのですか？

回答：加害者とその取り巻きです。イジメは「最も効率的な搾取システム」です。

これはとても分かりやすい例で説明できます。

学校の家庭菜園で野菜を収穫したとしましょう。クラスが平等であれば、皆が平等に分配されます。

しかし、イジメがあるとどうなるか？

皆がイジメのターゲットになることを恐れて、加害者に差し出すのです。「これ、あげるから許して」「私も何かするから、ターゲットにしないで」——こうして、加害者や加担者は、被害者や傍観者から搾取し、脅して略奪し、働かなくてもより多くの利益を簡単に得ることができます。

第 32 章 2 節 イジメ加担で得られる「搾取の利益」リスト

イジメに加担することで、加害者とその取り巻きは、被害者からさまざまな「利益」を搾取します。ここでは、その代表的なケースをリストアップしてみましょう。

① 宿題や課題をやらせる 被害者に宿題やレポートを書かせ、自分たちは遊ぶ。 勉強ができる子ほど、ターゲットにされやすい理由の一つです。 「お前がやれよ」と言えば従う——恐怖で支配された「無償の労働力」です。
② 金銭のカツアゲ 「金を持ってこい」「今日は奢れよ」——恐怖で金を巻き上げる。 定期的に搾取できる「ATM」として被害者を扱います。 断れば暴力、告げ口すればさらなる制裁——逃げ場をなくして搾取を続けます。
③ パシリ・使い走り 「ジュース買ってこい」「荷物を持て」——雑用を無償でやらせる。 これも「恐怖で支配した労働力」の搾取です。 断れば何をされるか分からないという恐怖が、従わせ続けます。
④ 性的搾取 イジメ被害の女性に対して、「裸の写真を送れ」「付き合い」 「体を許せ」と脅す——弱みを握って性的に搾取する。 拒否すれば「みんなに言うぞ」「写真をばらまくぞ」と脅し、逃げられない状態に追い込みます。これは性暴力であり、権力犯罪です。
⑤ テストのカンニングペーパーを作らせる 被害者にカンニングペーパーを作らせ、加害者たちが楽をして点数を取る。 バレれば被害者が処分されるという、最も卑劣な搾取の形です。
⑥ 身代わりにさせる

自分たちがやった悪事の責任を、被害者に押し付ける。 「お前がやったことにしろ」——断れば暴力、従えば被害者が処分される。 加害者たちは安全な場所から、被害者を「盾」にして楽しむのです。
⑦ 感情のゴミ箱にする 自分のストレスや不満を、被害者にぶつけて発散する。 「お前が悪い」「お前のせいだ」と罵倒し続ける ——被害者は加害者の「感情の処理場」にさせられます。
⑧ 集団の結束を高める「生贄」にする イジメのターゲットを共有することで、加害者グループの連帯感が高まる。 「あいつを叩こうぜ」と一緒に攻撃することで、「仲間」としての一体感を得る。 被害者は、加害者集団の「結束の道具」にされるのです。
⑨ 優越感と承認欲求を満たす 「自分はターゲットより上だ」という優越感を得る。 そして、仲間から「よくやった」「さすがだ」と称賛される ——これが「報酬」となり、さらなる加害を促します。
⑩ 「共犯の鎖」で支配を強化する 一度加害に加担した者は、「自分も加害者だ」という意識から逃れられなくなる。 そして、「裏切ればお前も終わりだ」と脅され、加害組織から抜け出せなくなる。 加害者は、加担者を「共犯者」にすることで、支配を強化するのです。

Q. これらの搾取に共通する構造は何ですか？

回答：「恐怖による支配」と「逃げ場のなさ」です。

これらの搾取はすべて、被害者が「拒否すればもっと酷い目に遭う」という恐怖を植え付けられているからこそ成立します。そして、一度従えば「共犯の証拠」として握られ、逃げられなくなる。加害者たちは、被害者を「恐怖で支配された資源」として扱い、あらゆる形で搾取し続けるのです。

そして、これは学校のイジメだけの話ではありません。職場、地域、国家レベルでも、同じ構造が繰り返されています。予測警察システムも、この「恐怖による搾取」の構造を、テクノロジーで効率化・大規模化したもののなのです。

第 32 章 3 節 搾取できる「勝ち組」

Q. なぜ、加担者は「搾取する側」に回るのですか？

回答：加害者に協力すれば、自分も被害者から搾取できると学習するからです。

加担者は、加害者に協力することで、カツアゲや性的搾取など、被害者から直接利益を奪うことができます。最初は恐る恐るでも、一度「うまい汁を吸う」ことを覚えてしまえば、それは忘れられない報酬になります。

同時に、自分が加担したという事実は「共犯の証拠」となり、加害組織から逃げられない鎖になります。抜け出そうとすれば、「お前も同じことをしただろう」と脅され、黙らされる。こうして、加担者は「被害者から搾取する側」でありながら、「組織から逃げられない駒」にもなるのです。

そして彼らは、こう学習します。

「コツコツ毎日出勤して僅かな給料を稼ぐのは負け組だ」

「効率よく稼げる奴が勝ち組だ」

搾取は、彼らにとって「効率的な儲け方」なのです。しかし、その優位は正々堂々とした競争からは得られません。だから、ハッキング、盗撮、監視、弱みの暴露——卑怯な手段で相手を支配し、常に優位に立っていなければ不安で仕方ない。フェアな勝負では勝てないからです。

この構造は、学校のイジメだけの話ではありません。国家レベルでも同じことが起きています。

イーロン・マスクの元恋人であり、MAGA を辞めて、批判に転じたアシュリー・セント・クレア氏が暴露したように、イーロン・マスクが何時間も前に選挙結果を知っていたのは偶然ではありません。監視システムで全国民をこっそりモニタリングしているからです。そう考えれば、極右が気づかれぬように資金援助され、勢力を拡大していることも、結果を捻じ曲げる脅しや不可解な不正が多発していることも、すべて説明がつきます。

かつては、国民が不満を持つ大統領は倒すことができました。しかし、トランプほど「歴代最も腐敗した大統領」と嫌われ、何度も阻止されかけたのに、無茶で無謀な破壊活動を止められないのはなぜか。その背景に「予測警察システム」があり、反対や抵抗の動きを未然に防いでいるからです。

第 32 章 4 節 地域の支配と搾取を安定させる

予測警察システムも同じです。ターゲットを追い詰めることに協力することで、「見せしめ」として機能します。誰も地域の金持ちや権力者に逆らわなくなり、被害者を犠牲にして切り捨てることで、誰も逆らわず、加害者に差し出す——支配と搾取を安定させ続けることができるのです。

つまり、ギャングストーキングも権力犯罪なのです。

予測警察システム⑥：モニタリングされる恐怖——なぜ「まともな人」が自殺や裏切りに追い込まれるのか？(未完成版)

第33章 なぜギャングストーキングは「自殺に追い込む」のか？

第33章1節 普通のイジメとギャングストーキングの違いは？

Q. 普通のイジメと何が違うのですか？

回答：相手の脳や感情をモニタリングできるからです。

普通のイジメでも十分怖いですが、しかし、ギャングストーキングは遥かにもっと恐ろしい。それは、自殺に追い込むシステムだからです。なぜ、自殺に追い込めるのか？ それは、相手の脳や感情をモニタリングできるからです。

第33章2節 被害者をモニタリングしながら弱点を突いて確実に追い込む

前回の記事で解説したように、磁性ナノ粒子と外部磁場の組み合わせによって、相手の感情状態をリアルタイムで把握し、それに合わせて攻撃を仕掛けることが技術的に可能になっています。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 怯えている ➡ さらにそのポイントを攻撃 ➡ 辛くて自殺・ 悲しんでいる ➡ さらにそのポイントを攻撃 ➡ 辛くて自殺 |
|--|

- ・泣き言を言っている➡さらにそのポイントを攻撃➡辛くて自殺
- ・怒っている➡さらにそのポイントを攻撃➡反撃してきたところを切り取って、加害者に仕立てる
- ・諦める

つまり、相手が最も苦しむタイミングや弱点を正確に把握し、そのポイントをピンポイントで執拗に攻撃する。相手の感情を「観察」しながら、最も効果的に追い詰める方法を選択できる——これが、ギャングストーキングの残酷さです。

例えば、ペットが好きな人のペットを次々と亡くならせるなど、弱点を正確に把握し、そのポイントをピンポイントで執拗に攻撃することで精神的に弱らせて、気付かぬうちに自殺に追い込むのです。

絶望に追い込まれて自殺した人も多い——これは、決して誇張ではありません。被害者が絶望している瞬間を狙って、さらに追い打ちをかける。希望を持ち始めた瞬間を狙って、それを打ち砕く。これが「自殺に追い込むシステム」の正体です。

海外では、ギャングストーキングの被害者が自殺に追い込まれた事例が多数報告されています。日本国内ではまだ十分認知されておらず、被害者が孤立しやすい現状が警告されています。国連も、世界中で問題となっている集団ストーカー（ギャングストーキング）と電磁波などによるサイバー拷問の報告を受け、その被害の深刻さから警告を発しています。

第 33 章 3 節 被害者をモニタリングしている

Q. なぜモニタリングしていると分かるのですか？

例えば、近所の音、工事音、暴走バイク音、救急車の音、飛行機の音など様々な音が一定のパターンで聞こえてストレスになる訳です。ですから、被害者たちは聞こえなくなるように、耳栓したり、イヤーマフをしたり、様々な方法を使って音を遮断しようと対策します。

普通であれば、対策したら、聞こえなくなるハズです。ところが、興味深いことに、出す音を大きくして音量を変えて聞こえ続けるので、被害者は「逃げられない」と絶望する訳です。逆に言えば、モニタリングしているから、被害者の反応を見て、出す音を大きく変更していると言えます。

こうやって、嫌がることを執拗にやり続けることで、被害者を精神的にドンドン追い詰めて行くことができる。極めて悪質な「人間破壊システム」なのです。

第 33 章 4 節 モニタリングしている工事業者

例えば、日本の被害者がよく訴える被害話に、工事音が挙げられます。

ターゲットにされると、家の周りでやたらと工事が多発するようになるそうです。

家の建て替え工事、水道管の工事、電線の工事、右隣、左隣、裏の家と言うように、とりあえず、近所でやたら工事が行われるようになるパターンが多いようです。そして、毎日のように工事音がタイミングよく聞こえてくるようになって被害者のストレスや精神的なプレッシャーになる訳です。近所の加害者のことを考えるとすかさずトンカチ音が聞こえる、ガシャーンと落とす音がするなど、「頻繁にタイミングよく音が鳴って、監視されていることを認識する」ようになります。

そして、前述したように、聞こえないように、耳栓で音を聞こえなくしたとしましょうすると、しばらく聞こえなくなりますが、やがてトンカチ音が大きくなり、また聞こえるようになる訳です。

逆に言えば、作業員は、AI などの指示通りに音を出しているだけかもしれませんが、同時に時間差でもモニタリングもしているから、被害者の反応を見て、叩く強さを変えたと言えられると思われます。

相手が自分が出した音にビクビク怯えているのを見て嘲笑っている訳です。

その意味で、指示しているのはAIでも、加害者もモニタリングしている、ハイブリッド形式なのだと言えるのかと思います。

業種としては、工事業者、トラック、バス、タクシー、電車、宅配業者や郵便配達業者などがよく指摘されているようです。筆者が聞いた話では、宅配業者などはパランティアを導入しているので、本人の意思はともかく、配達員自身が動くカメラのように監視ネットワークの一部になっていると言う話でした。

とても興味深い話だと思いました。

第 33 章 5 節 モニタリングする目的

Q. なぜモニタリングするのでしょうか？

回答：脅して相手を怯えさせて言いなりにするためです。

ファシズム支配の最大の特徴は、安全保障を叫びながら、国民の安全や安心を守るのではなく、国民を恐怖と疑心暗鬼に陥れて自分たちの私利私欲のために思い通りに軍隊を動かして支配することにあります。

実際に、トランプも高市も強い国や安全保障を掲げながら国はドンドン貧しく、国民の安全や権利はドンドン失われています。逆らうライバルが居なくなって、好き勝手できるように脅して相手を怯えさせて言いなりにしたいのです。

だから、モニタリングして怯えさせるのです。

第 33 章 6 節 突然現れる虫や動物や人

例えば、驚かせたり、怯えさせたりする手口として、突然、蟻などの虫が身体の上に居て驚かされることがあります。奇妙なことに、蟻が途中で身体の上を移動している時は気付かないのです。

突然、腕の上などに現れるのです。まるで、こちらの言動に合わせて瞬間移動してきたかのように。

しかし、これは、移動中は皮膚感覚の神経のスイッチを切っておき、突如神経のスイッチをオンにしたら、体の上に虫が瞬間移動してきたように感じる訳です。

また、タイミングよく突然無言電話や営業電話がかかってきて驚かされることもあります。これらは、モニタリングして、怯えさせたり、脅したりするのが狙いだとわかります。

第 33 章 7 節 「敵が嫌がる ➡ だから正しい」と嫌がらせを正当化する日本人の増加

Q. 「中国が嫌がるから軍拡は正しい」「北朝鮮が嫌がるから武器輸出は正しい」——こういう論法を最近よく聞くのですが、これはどういうことですか？

回答：これは「加害者が自分の行為を正当化するための論法」です。相手が不快を示すこと自体を「正しさの証明」にすり替える、極めて危険な思考停止です。

2026 年 4 月、お笑いタレントの東野幸治氏がテレビで、政府の殺傷武器輸出解禁について「中国、北朝鮮が嫌がるってことは、逆にこの政策っていい政策なんじゃないのかな」と発言しました。相手が嫌がるから正しい——一見、単純な「敵味方の論理」に見えます。しかし、ここには論理の根本的なすり替えがあります。

第 33 章 7 節 1 項 なぜ、この論法は間違っているのか？

第一に、これは「循環論法」です。

「中国は敵だ ➡ 中国が嫌がる ➡ だから正しい ➡ だから中国は敵だ」

——敵であるという前提から出発して、敵が嫌がることを正しさの証拠にし、

その正しさで敵であることを再確認する。

自分の主張を自分で証明しているだけで、行為そのものの是非は一切検証されていません。

第二に、「嫌がる」という感情と「正しい・間違い」という規範は、

まったく別のものです。

いじめの加害者は、被害者が嫌がるからこそいじめを続けます。

「あいつが嫌がる顔が見たい」——これは、相手の苦痛を「娯楽」にしているだけです。「相手が嫌がる = 正しい」という論法は、いじめの加害者の論理と完全に一致します。

第 33 章 7 節 2 項 この論法が「加害者の論理」である理由

加害組織は常に「自分たちは正しい」と主張します。しかし、その根拠は多くの場合、「自分たちがそう決めたから」に過ぎません。「敵が嫌がるから正しい」という論法は、この「自分たちの都合による正当化」を、あたかも「外部的な証拠」であるかのように見せかけるトリックです。

さらに深刻なのは、この論法が批判を封殺する装置として機能する点です。

「中国が嫌がるから正しい」と言ってしまうと、政策に反対する人は「中国の味方」「売国奴」というレッテルを貼られます。事実に基づいた政策批判が、

「敵の味方」というレッテルによって無効化される。これは、第 31 章 6 節で解説した「信用破壊」フェーズとまったく同じ構造です。

第 33 章 7 節 3 項 この論法が「嫌がらせ」と結びつくとき

この論法は、国家レベルの政策論争にとどまりません。職場や地域でも、同じ構造が使われています。

特定の社員や住民を集団で排除するとき、加害者たちは「あの人が嫌がるから、俺たちは正しいことをしている」と主張します。排除される人が苦しめば苦しむほど、加害者たちは自分たちの「正しさ」に確信を持ちます。相手の苦痛が、加害者の「正義感」の燃料になる——これが、いじめやギャングストーキングがエスカレートし続ける理由なのです。

第 33 章 7 節 4 項 この論法に騙されないためには

「相手がどう思うか」ではなく、「行為そのものが何をもたらすか」で判断することです。

中国や北朝鮮が嫌がるかどうかは、日本の軍拡が正しいかどうかの判断材料にはなりません。判断すべきは、その軍拡が日本の安全を本当に高めるか、地域の緊張を悪化させないか、憲法の平和主義と整合するか——こうした実質的な問いです。

そして何より、「敵が嫌がるから正しい」と言う人の言葉の裏にある意図を見抜くことです。その人は、本当に日本の安全を考えているのか。それとも、相手を傷つけること自体を目的にしているのか——この問いを持つことが、加害者の論理に加担しないための第一歩なのです。

第 33 章 8 節 加害者を追及すると自殺に追い込まれる事件

Q. なぜ加害者を追及した人が、逆に自殺に追い込まれるのですか？

回答：加害組織が「見せしめ」として、追及者を組織的に潰すからです。

兵庫県の告発文書問題は、その構造をこれ以上ないほど明確に示しています。

2024 年 3 月、西播磨県民局長だった男性（当時 60 歳）が、斎藤●彦知事のバワハラや贈答品受領などの疑惑を記した文書を匿名で配布しました。県は男性を特定し、5 月に停職 3 カ月の懲戒処分としました。そして 7 月 7 日、男性は音声データを残して死亡しました。自殺とみられています。

その後、百条委員会の報告書は、県の対応が公益通報者保護法に違反する「通報者探索」であり、処分は「違法な不利益取扱い」とであると指摘しました。公益通報者を死に追いやった対応そのものが違法だったと、公的に認定されたのです。

しかし、犠牲は公益通報者だけでは終わりませんでした。百条委員会の委員として知事を追及していた竹内●明元県議（当時 50 歳）が、2025 年 1 月 18 日に自宅で死亡しているのが見つかりました。自殺とみられています。竹内氏は SNS 上での激しい中傷を理由に議員を辞職しており、同僚議員は「顔が見えない集団リンチのような状況に大変怯えていた」と証言しています。

さらに不可解なのは、その後の司法判断です。立花●志氏は奥●県議への脅迫容疑で書類送検され、2025 年 12 月に不起訴となりました。しかし 2026 年 6 月、神戸第 2 検察審査会が「不起訴不当」と議決。ところが神戸地検は再捜査の結果、2026 年 9 月 25 日に再び不起訴（嫌疑不十分）とし、捜査を終結させました。

公益通報者は死に、追及した議員も死に、死に追い込んだ側の人物は脅迫容疑で不起訴——この不可解な結末が、「権力者を追及すれば自分が壊される」という「見せしめ」として機能しているのです。

兵庫県や鹿児島県警などで、内部告発をした職員が自殺に追い込まれた事件が起きています。激しい痛みを感じたという報告もあり、単なる精神的な追い詰めだけではなく、身体的な攻撃が加えられている可能性も指摘されています。

第 33 章 9 節 どのような人物が「危険人物」としてマークされるのか？

パランティア社の価値観や考え方や行動を分析すると、この問いへの答えが見えてきます。そして、同時に彼らがトランプや高市のように嘘ばかりついて騙していることも見えてきます。

創業者のピーター・ティール氏は、共産主義や社会主義に対して強い敵意を持っていることを公言しており、パランティアの製品を共産主義国には絶対に販売しないと明言しています。共同創業者のジョー・ロンズデール氏も、「パランティアは共産主義者を殺すために作られた」と語っています。

つまり、熱狂的な「反共産主義者」であることがわかります。

そして、「共産主義者」を敵視してソ連に飢餓作戦を仕掛けたり、大量虐殺したのがナチス🇩🇪や大日本帝国🇯🇵なのはニーメラーの警句📖からも良く知られた事実です。

第 33 章 10 節 虐殺するイスラエル🇮🇱を熱烈に支持するファシズム企業🇩🇪

また、パランティアはイスラエル軍に AI 兵器を提供しているほか、ニューヨーク・タイムズにイスラエル支持の全面広告を掲載するなど、特定の立場を強く打ち出す企業としても知られています。ガザ地区の戦闘では、国連人権高等弁務官事務所（OHCHR）の報告によると、死者の約 7 割が女性と子どもだったとされており、深刻な人道上の懸念が国際社会から示されています。

こうした背景から、パランティア社が守りたいのは「エプスタイン・ファイル」に記載されている富裕層などの「エプスタイン階級」であり、敵視して実際にマークしているのは、「共産主義者や特権階級の不正や搾取を追及する”まともな国民”」や「忖度して嘘をつかずに正直にいう人」であることが浮き彫りになってきます。

第 33 章 11 節 被害者に選定されるのは共産主義者？

男に従順でない女性？やフェミニスト？

内部通報者、公益通報者、悪党や権力の不正を追及している一般市民やジャーナリスト要するにまともな人や正義感が強い人です。

ニーメラーの警句に出てくる通りの人たちです。

とは言え、右や左、所属政党とかはあまり関係ないようです。

例えば、共和党支持者や MAGA でも、エプスタインファイルの公開で被害者を守らず、隠蔽工作して加害者を庇うトランプ政権を批判するまともな感覚の人は被害に遭っているようなので、弱者や被害者を擁護したり、加害者を批判する人をターゲットにする仕組みのようです。

逆に加害者に多いのが、不正を隠蔽する人や犯罪者など弱者や被害者を見捨てたり、被害者を踏みつけたり搾取するタイプが多いように見えます。

正直者➡被害者

嘘つき➡加害者

彼らファシストたちが世界の人たちを虐殺してでも破壊したいのは中国🇨🇳やロシアやイラン🇮🇷などの BRICS 諸国でしょう。

まず、アメリカや日本の経済を破壊して、国民から富などを奪い、男はファシズム兵士、女は性奴隷として思い通りに支配して、最終的に侵略して破壊するのが真の狙いだと思われます。

第 34 章 特殊な加害の手口

第 34 章 1 節 なぜ「対向車のライトが眩しく感じる」のか？——2 つの攻撃経路

被害者の人がよく訴えている被害の 1 つに対向車のライトが眩しく感じるというのがあります。以下の動画を見て貰えば分かるように、運転中に対向車からハイビームを頻繁に照射されるような被害を感じる訳です。

今回はこれについて解説します。

第 34 章 1 節 1 項 2 つの攻撃経路

運転中に対向車のライトが眩しく感じる現象には、2 つの攻撃経路が考えられます。

1 つ目は「光源側への攻撃」です。

マイクロ波などのエネルギーを対向車のライトに照射し、実際の輝度を人為的に高めます。マイクロ波は光と違い、車体を透過しやすいため、外部から見えない形でライトだけを明るくすることが技術的に可能です。

2 つ目は「受け手側への攻撃」です。

磁性ナノ粒子と磁場を使い、あなたの網膜や脳の視覚野を刺激して、眩しさの信号を増幅させます。実際のライトの明るさは変わらなくても、脳が「眩しい」と感じる度合いを強められるのです。

例えば、動画のようにカメラで撮影しても同じように見える場合は、運転手が意図的にハイビームにしたか？「光源側へのマイクロ波の攻撃」が行われた可能性がある訳です。

逆に、撮影した動画と自分が感じた眩しさに差がある場合は、あなたの視覚野を刺激して、眩しさの信号を増幅した可能性が高い訳です。このように2つの攻撃経路が考えられます。

第34章1節2項 なぜ「日によって眩しく感じたり感じなかったりする」のか？

答えはシンプルです。外部からの攻撃が「オン」の日と「オフ」の日があるからです。

磁性ナノ粒子は体内に蓄積していても、外部から磁場をかけなければ活性化しません。マイクロ波も、照射されなければ効果を発揮しません。攻撃側が「今日は眩しくさせよう」と決めた日にだけ照射すれば、その日だけ眩しさが発生します。

翌日は照射を止めれば、何事もなかったかのように消えます。

これは予測警察システムの基本的な作戦です。

ハイビームが多いと「加害が多い日」と感じさせ、ハイビームが無いと「加害が少ない日」と感じさせ、繰り返されると「これはおかしい」と気づき、被害者に自分が狙われている悪意やハイビームの意図を学習させる訳です。

第34章1節3項 まとめ——「眩しさ」は2つの経路で人工的に作れる

対向車のライトが眩しく感じる現象は、マイクロ波で光源を明るくする方法と、磁性ナノ粒子で視覚の感度を上げる方法の2つで説明できます。そして、日に

よって眩しく感じたり感じなかったりするの、攻撃がオンになったりオフになったりしているからです。

一度この仕組みを理解すれば、奇妙な不安から解放されます。

運転中の様子を録画したり、異常を感じた日時と場所を記録することで

いろいろなパターンや手法を見抜くこともできるようになります。

第 34 章 2 節 ストーリーシアター

第 34 章 2 節 1 項 ストーリーシアターとは何か？

Q. ストーリーシアターとは何ですか？

回答：公共の場で、加害者たちが「偶然を装って」ターゲットの周囲で繰り広げる、組織的な“芝居”です。

ストーリーシアター（ストリートシアター）とは、路上・店舗・駅などの公共空間を舞台に、ターゲットの周囲で不自然な状況や人間模様を演じさせる組織的な演出行為です。加害者たちは「たまたま居合わせた他人同士」を装い、ターゲットの監視情報に基づいた会話や行動を、あたかも偶然のように演じます。

第 34 章 2 節 2 項 どんな「芝居」があるのか？

Q. 具体的に、どんな「芝居」があるのですか？

回答：日常に溶け込んだ、一見ありふれた光景ばかりです。

報告されている例としては、路上で突然わめき散らす男、前方を歩いていた女が突如走り出す、数人のゴロツキ風の集団が現れる、飼い犬同士が不自然に喧嘩を始める、喪服の人々や霊柩車がタイミングよく現れる——などがあります。一つ一つは「偶然」に見えますが、ターゲットの移動に合わせて同じような状況が異常な頻度で発生する点が特徴です。

第 34 章 2 節 3 項 「芝居」をする狙いは何なののか？

Q. 狙いは何なのか？

回答：ターゲットを「主観的状况」に閉じ込め、正気を組織的に破壊することです。

この手口の恐ろしさは、ターゲットにだけ意味が分かり、周囲には普通の光景に見えるという構造にあります。ターゲットは「自分に向けられたメッセージだ」と確信しますが、誰かに説明しても「気のせいでは？」としか映りません。これを繰り返すことで、ターゲットの訴えの「奇怪さ」によって、周囲の人が精神障害を疑い始めるのです。

つまりストーリーシアターは、単なる嫌がらせではなく、ターゲットの「正気」そのものを組織的に破壊し、社会から孤立させるための心理戦なのです。

第 34 章 3 節 偽旗作戦

第 34 章 3 節 1 項 偽旗作戦とは何か？

Q. 偽旗作戦とは何ですか？

回答：実際の攻撃者が、あたかも「別の誰か」が攻撃したように見せかける、組織的な欺瞞工作です。

偽旗作戦とは、政府や組織が自分たちの行為を別の存在の仕業に見せかける秘密作戦のことです。核心は「真犯人を分からなくする」ことにあります。攻撃の実行者を隠蔽し、無関係な第三者の仕業に見せかけることで、被害者や社会は「誰が敵なのか」を見失い、永久に真犯人にたどり着けなくなるのです。

第 34 章 3 節 2 項 偽旗作戦の具体事例

Q. 具体的に、どんな事例がありますか？

回答：国家が自国民を攻撃し、それを口実に戦争を始めた事例が多数あります。

1939 年 8 月 31 日のグライヴィッツ事件では、ナチス・ドイツの親衛隊がポーランド軍の制服を着てドイツ領内のラジオ局を襲撃し、ポーランドによる攻撃に見せかけました。これがポーランド侵攻の口実となります。1931 年 9 月 18 日の柳条湖事件では、日本の関東軍が南満州鉄道の線路を自ら爆破し、中国軍の仕業として満州を占領しました。1939 年のマイニラ砲撃事件では、ソ連が自国領を砲撃し、フィンランドの攻撃と主張して冬戦争を開始しました。

これらに共通するのは、「自分たちが攻撃される側だ」という物語を作り、攻撃者としての立場を隠して正当化する構造です。

第 34 章 3 節 3 項 被害者を陥れて無関係な人と争わせるため

Q. 集団ストーカーの文脈では、どう使われるのですか？

回答：真犯人を隠し、被害者を誤誘導して、無関係な人と争わせるために使われます。

被害者が「誰がやっているのか？」を突き止めようと動き始めると、加害組織は偽の手がかりを巧妙に配置します。「隣人がやっている」「特定の団体がやっている」と思わせる状況を作り出し、被害者を無関係な人と争わせるのです。真犯人である加害組織は、その争いを遠くから眺めているだけで済みます。

また、加害者自身が「被害者を装う」偽旗も行われます。偽の被害者をネット上に配置し、特異な言動をさせることで、本物の被害者たちの訴え全体の信憑性を組織的に貶める工作が報告されています。

第 34 章 3 節 4 項 真の加害者を永久に隠し続ける悪質な仕組み

Q. 偽旗作戦の狙いは、結局何なのですか？

回答：加害者が「見えなくなる」ことです。

攻撃は起きている。被害者は苦しんでいる。しかし「誰がやっているのか」が分からない。捜査機関も動けない。社会も信じない。この状態を作り出すことで、加害組織は何のリスクも負わずに攻撃を続けることができます。被害者を誤った方向に誘導し、無関係な人と争わせ、本当の加害者を永久に隠し続ける——これが、偽旗作戦の恐ろしさです。

第 34 章 4 節 エコーチェンバー

第 34 章 4 節 1 項 エコーチェンバーとは何か？

Q. エコーチェンバーとは何ですか？

回答：同じ意見や情報が繰り返し共有されることで、閉じた世界観が強化される情報環境です。

SNS やグループチャットで、同じ考えの人たちだけと交流することで、特定の情報や意見が繰り返し増幅され、まるでそれが「世の中の常識」であるかのように感じられてしまう状態を指します。

第 34 章 4 節 2 項 「捏造された被害者像」が共有される

Q. なぜ、加害組織にとってエコーチェンバーが必要なのですか？

回答：被害者の「捏造された人物像」を共有・拡散し、真実を封殺するために不可欠だからです。

ストーリーシアターや偽旗作戦は、単独では効果がありません。加害組織が仕掛けた「芝居」や「偽の手がかり」を、大勢の人間が「真実」として共有し、拡散する——このプロセスがあって初めて、被害者は本当に孤立し、追い詰められます。

エコーチェンバー内では、以下のような「捏造された人物像」が被害者に貼り付けられます。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・「あの人はキチガイだ」「精神が不安定だ」・「あの人は陰謀論者だ」「フェイクニュースを流している」・「あの人は金目当てだ」「ハニトラを仕掛けている」・「あの人は反日だ」「国賊だ」「スパイだ」 |
|--|

これらのレッテルが繰り返し共有されることで、参加者たちは「自分たちは真実を知っている」という確信を持ち、被害者を「社会から排除すべき存在」として扱うようになります。

第 34 章 4 節 3 項 情報伝達ネットワークで台本通り

Q. エコーチェンバーは、どのようにして作られるのですか？

回答：グループチャットの階層化と、報酬による動機付けによって組織的に作られます。

MAGA のエコーチェンバーは、複数のグループチャットで階層化されています。最上位には政府高官やトランプ家、中位には有料キャンペーンを受ける大物インフルエンサー、下位には同調することで承認欲求を満たす一般のインフルエンサーが配置されます。

事件が起きると、ホワイトハウスや選挙陣営の広報担当者がグループチャットを通じて統一された反応トークを指示します。FOX ニュースなどの出演時には、あらかじめジョークや話のポイントを提出・承認される必要があったと証言されています。つまり、彼らは「自由に発言している」ように見えて、実際には台本通りに演じているのです。

第 34 章 4 節 4 項 レッテルを貼られた被害者は自己嫌悪になる

Q. エコーチェンバーは、被害者にどのような影響を与えるのですか？

回答：被害者は「自分が間違っているのかもしれない」という自己疑念に陥り、声を上げることを諦めさせられます。

エコーチェンバー内で「被害者は嘘つきだ」「キチガイだ」というレッテルが繰り返し共有されると、被害者はこう思うようになります。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・「自分がおかしいのかもしれない」・「声を上げれば、さらに叩かれるだけだ」・「もう諦めるしかない」 |
|---|

これは、第 31 章 5 節で解説した「ガスライティング」の集団版です。

「自分がおかしいのか?」「自分にも悪いところがあったのでは?」と自問自答を繰り返して自責の念に囚われるようになります。

そして、加害組織は、エコーチェンバーを使って被害者自身に「自分の感覚を疑わせる」ことで、「自分が悪いと洗脳できたら」助けを求めることをできなくさせるのです。

第 34 章 4 節 5 項 「真犯人を隠す」ために機能する

Q. なぜ、エコーチェンバーは「真犯人を隠す」ために機能するのですか？

回答：被害者を「偽の敵」と戦わせることで、真犯人から注意をそらすからです。

エコーチェンバー内では、「被害者を攻撃しているのは〇〇だ」という偽の情報が共有されます。「隣人だ」「特定の団体だ」「中国のスパイだ」——こうした偽の犯人が「真実」とされ、参加者たちはそれを信じて攻撃を加えます。

すると、被害者は無関係な人々と争うことになり、本当の加害者である組織には決してたどり着けません。被害者が「本当の犯人は別にいる」と訴えても、「また陰謀論を言っている」と嘲笑され、ますます信用を失うのです。

これが、エコーチェンバーが「真犯人を隠す」仕組みです。加害組織は、自分たちが直接手を汚すことなく、エコーチェンバー内の「自発的な協力者」たちに攻撃を実行させ、真犯人を永久に隠し続けることができるのです。

第 35 章 思考と感情をモニタリングされる恐怖——「心を読まれる」時代の最も危険なリスク

金融エリートやビッグテック企業や投資会社や WEF や軍産複合体などのエプスタイン階級が AI バブルで生み出そうとしているディストピアは「1984」を超えるこのような社会です。しかも、既に技術的に完成寸前まできているのです。

第 35 章 1 節 思考や感情をモニタリングできるとどんな恐ろしいことができるのか？

Q. 相手の思考や感情をモニタリングできると、具体的にどんな恐ろしいことができるのですか？

回答：相手が最も恐れていること、最も悲しむこと、最も辛いことを正確に把握し、それをピンポイントで攻撃できます。これは、人間が持つ最後の砦である「心の自由」を奪うことを意味します。

前回まで、監視システムが位置情報や購買履歴、人間関係を収集する話をしてきました。しかし、監視の技術はそこにとどまりません。磁性ナノ粒子や脳波センサーによって、相手の思考や感情をリアルタイムで読み取ることが、技術的には可能になりつつあります。

ここでは、思考と感情のモニタリングが実現したとき、具体的にどのような恐ろしいことが起きるのか。特に危険なものを 5 つ紹介します。

第 35 章 2 節 ① 完全な「感情の操作」——絶望のタイミングを狙って追い打ちをかける

Q. 感情をモニタリングされると、何が一番危険ですか？

回答：相手が最も弱っている瞬間を正確に把握し、そこに追い打ちをかけられることです。

通常のいじめや嫌がらせでは、加害者は相手がどれほど傷ついているかを推測するしかありません。しかし、感情をリアルタイムでモニタリングできれば、相手の絶望、悲しみ、恐怖の度合いを正確に測定できます。

そして、最も恐ろしいのは、相手が「もう耐えられない」と感じているまさにその瞬間を狙って、さらに追い打ちをかけることができる点です。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 相手が少し希望を持ち始めた ➡ それを打ち砕く・ 相手が助けを求めようとした ➡ その直前で妨害する・ 相手が「死のう」と考え始めた ➡ その背中を押す |
|--|

これは、第 33 章 2 節で解説した「自殺に追い込むシステム」の核心です。感情をモニタリングできれば、相手を自殺に追い込むタイミングを正確に計ることができるのです。

よく覚えていませんが、なんか、アマゾンか Google の AI に相談して自殺に誘導された事件（？）のようなものもあったような気がします。

第 35 章 3 節 ② 完璧な「ガスライティング」——相手の現実認識を根本から破壊する

Q. ガスライティングが、モニタリングでどう変わるのですか？

回答：相手が「何を疑い、何を確信しているか」を把握した上で、その認識をピンポイントで崩せます。

ガスライティングとは、「そんなことは起きていない」「あなたの記憶が間違っている」と繰り返すことで、相手に自分の感覚や記憶を疑わせる心理操作です。通常のガスライティングでは、加害者は相手が何を信じているかを推測するしかありません。

しかし、思考をモニタリングできれば、相手が「これはおかしい」と気づいている点、「これなら信じられる」と思っている点を正確に把握できます。そして、その認識を一つずつ、確実に崩していくことができるのです。

- ・相手が「あの人は敵だ」と疑っている ➡ 「あの人は味方だ」と思い込ませる
- ・相手が「これは犯罪だ」と確信している ➡ 「気のせいだ」と思い込ませる
- ・相手が「自分は正しい」と信じている ➡ 「自分が間違っている」と思い込ませる

これを繰り返すことで、被害者は自分の判断能力そのものを失い、加害者に完全に依存するようになります。これが、マインドコントロールの最も洗練された形です。

第 35 章 4 節 ③ 「弱点の完全な把握」——人間関係を破壊し、完全に孤立させる

Q. 人間関係のモニタリングは、どんな危険がありますか？

回答：相手が誰を信頼し、誰に助けを求めようとしているかを把握し、その支援ネットワークを組織的に破壊できます。

人は一人では生きていけません。信頼できる家族、友人、同僚がいるからこそ、困難に耐えられます。しかし、誰を信頼しているか、誰に助けを求めようとしているかをモニタリングできれば、そのネットワークを狙い撃ちで破壊できます。

- ・相手が「この人なら助けてくれる」と思っている ➡ その人に「あの人はキチガイだ」と吹き込む
- ・相手が「ここに相談しよう」と考えている ➡ その相談先に事前に圧力をかけ

る

・相手が「この情報を公開しよう」と準備している ➡ その情報を先に握り潰す
これにより、被害者は助けを求める先をすべて失い、完全に孤立します。そして、孤立した人間は、どんなに理不尽な扱いにも従うしかなくなるのです。これは、第 31 章 6 節で解説した「信用破壊」フェーズを、モニタリングによって完璧に、効率的に実行することを意味します。

第 35 章 5 節 ④ 「先回りの支配」——反撃や抵抗をすべて事前に封じる

Q. 思考を読まれると、なぜ反撃できなくなるのですか？

回答：反撃しようと「考える」だけで、それが事前に把握され、封じられるからです。

何かを告発しよう、訴訟を起こそう、組織的に抵抗しよう——そう考えた瞬間に、その意図がモニタリングされ、実行される前に阻止される。これは、第 33 章 1 節で解説した「予測警察システム」の核心です。

- ・告発文を書こうとしている ➡ 送信前に通信を遮断される
- ・弁護士に相談しようとしている ➡ その弁護士に事前に圧力がかかる
- ・仲間を集めようとしている ➡ その仲間が先に脅される

これにより、被害者は「何をしても無駄だ」という学習性無気力を植え付けられ、最終的には抵抗することを諦めてしまいます。これは、CIA の尋問マニュアルでも使われてきた手法です。

第 35 章 6 節 ⑤ 「拷問の完全な設計」——相手が最も苦しみ方法を正確に選べる

Q. モニタリングと拷問が結びつくと、何が起きますか？

回答：相手が最も苦しむ方法を、正確に選択して実行できるようになります。

拷問とは、単に肉体的な苦痛を与えることではありません。その人にとって何が最も辛いかを正確に把握し、それを与えることです。

- ・ ペットが好きな人 ➡ ペットを次々と亡くさせる
- ・ 家族を大切にしている人 ➡ 家族に危害を加えると脅す
- ・ 仕事に誇りを持っている人 ➡ 仕事を徹底的に破壊する
- ・ 正義感が強い人 ➡ 自分が「悪者」に仕立て上げられる

思考と感情をモニタリングできれば、相手が何を最も恐れ、何を最も悲しむかを正確に把握できます。そして、それをピンポイントで攻撃することで、肉体的な暴力をはるかに超えた精神的苦痛を与えることができるのです。

これは、第 30 章 4 節で解説した「悪魔のシステム設計」の最も恐ろしい応用です。罪悪感を感じないまま、相手を徹底的に破壊することができてしまうのです。

第 35 章 7 節 ⑥ ファシストたちが支配して就職や生存が不可能になる

ここまで、思考と感情のモニタリングがもたらす危険性を見てきました。しかし、この技術が最終的に向かう先は、もっと恐ろしいものです。

それは、「まともな人間が社会から排除され、生存そのものが不可能になる社会」です。

第 35 章 7 節 1 項 建前は「思想調査禁止」、実際は横行する監視

厚生労働省は「就職差別につながるおそれのある 14 事項」を定め、国籍・家族・宗教・思想・信条などを面接で聞いたり書類に書かせたりすることを禁じています。これらは「本人に責任のないこと」「本来、自由であるべきこと」だからです。

しかし、厚生労働省の文書自体が、「求人企業が調査会社を通じて応募者の SNS 裏アカウントを特定し、投稿内容を調査している」「企業の依頼で応募者の居住地を訪れ近隣住民に聞き込みを行っている」と認めています。

つまり、表向きは禁止でも、実際には思想調査が横行しているのです。企業側は膨大な個人情報を手に入れられるのに、労働者側は何が調べられているのか一切わかりません。完全な情報の非対称性です。

第 35 章 7 節 2 項　すでに始まっている「ブラックリスト」社会
この構造は、すでに具体化しています。

2025 年、韓国大手通販企業 Coupang は、労働組合のリーダーや同社を批判するジャーナリストを含む**16,450 人**のブラックリストを管理していたことが判明しました。内部告発者が公表しましたが、韓国の国民権益委員会は告発者保護の請求を棄却しました。

Google は労組組織化を支援する社員を監視・尋問し、報復的措置を取ったとして NLRB（米国労働関係委員会）から訴えられています。2026 年にはサムスン電子で労組加入の有無とスト不参加者名簿を含むブラックリストが共有されていたことが判明しました。同年、ロシアのボリショイ劇場では「政治的な見解」で「不忠実な従業員」を特定するシステム導入が報じられました。

2025 年にはイーロン・マスク率いる DOGE が AI で連邦職員の通信を監視し、「トランプ大統領への敵意」がないか探っていたことが報道されています。労働法弁護士は「政治的党派を理由に誰かを差別することは明確に禁止された行為だ。これは本質的に政治的差別である」と指摘しています。

つまり、企業が個人情報好き放題に見て、不正を告発したり労組で活動するような正義感のあるまともな人が排除される——そういう時代が、すでに始まっているのです。

第 35 章 7 節 3 項 残された道は「兵隊か低賃金奴隷労働」、女性は「結婚か性奴隷」

この監視社会化が進むと、まともな人間が生き残る道は極端に狭められます。

第一に、不正を告発する人、労組で活動する人、正義感を持って行動する人は、

ブラックリストに載せられ、再就職が不可能になります。
一度載れば、業界全体から排除される可能性があります。

第二に、残された選択肢は、「兵隊（軍や治安機関）か、
低賃金の奴隷労働」しかなくなります。ファシズムが台頭する社会では、
暴力装置に従順な人間が優遇され、そうでない人間は
使い捨ての労働力として扱われます。

第三に、女性はさらに過酷です。経済的な自立の道が閉ざされれば、
結婚して男性に依存するか、性奴隷として扱われるか

——そのどちらかしか生き残る道がなくなるのです。研究によれば、

経済的資源を持たない女性は経済的依存状態に追い込まれやすく、

それが性暴力や搾取からの脱出を困難にします。

ファシズム政権が女性の経済的自立を妨げる政策を取れば、

女性は「結婚か性奴隷か」という極端な選択を迫られます。

第 35 章 7 節 4 項 アルゴリズム管理が「自己監視」を強制する

この排除のメカニズムは、プラットフォーム経済やギグワークでも進行しています。

アルゴリズム管理は「監視と規律のモードとして機能し」、タスク配分を統制することで権力関係を再編し、経済的リスクを労働者に転嫁します。プラットフォームは「不透明で予測不能なブラックボックスアルゴリズム」を管理・監視・評価に使用し、労働者はその仕組みを知ることができません。

さらに、アルゴリズム管理は「労働者に継続的な不可視の監視下にあると感じさせ、アルゴリズム管理の期待に従うために自己監視を強いる」ものです。つまり、監視されているという意識そのものが、労働者を従順にさせるのです。

ドイツの労働法研究者ヴァレリオ・デ・ステファノ教授は、「技術をめぐる闘争は民主主義をめぐる闘争である」と指摘し、「上からのデジタル変革は権威主義的な管理形態を悪化させ、職場内外の民主主義を損なう」と警告しています。「職場で発言権と自律性を奪われた人は、市民としてそれらを行行使する可能性が低くなる」——この指摘は、監視社会化が民主主義そのものを破壊することを示しています。

第 35 章 7 節 5 項 まとめ——「まともな人間」が生き残れない社会

思考と感情のモニタリング、そしてそれに基づく監視と排除のシステムは、最終的に「まともな人間が社会から排除され、生存そのものが不可能になる社会」を生み出します。

この社会では、不正を告発する人はブラックリストに載せられ、労組で活動する人は排除され、正義感を持つ人は「危険人物」としてマークされます。残されたのは、権力に従順な兵隊か、使い捨ての低賃金労働者か、男性に依存する女性か、性奴隷として扱われる女性だけです。

これは、ファシズムが目指す最終形態です。人々が恐怖と監視によって自ら従順になり、抵抗する気力を失い、支配者に都合の良い「駒」として生きるしか

ない社会。そして、この社会は、すでに技術的には完成寸前まで来ているのです。

あなたの就職先は、あなたの SNS を監視しているかもしれません。あなたの労組活動は、ブラックリストに記録されているかもしれません。あなたの思想や信条は、AI によって分析されているかもしれません。そして、あなたが「これはおかしい」と気づいたときには、すでに排除する準備が整えられているのです。

第 35 章 8 節　まとめ——「心の自由」という最後の砦が奪われる

ここまで見てきたように、思考と感情のモニタリングは、人間が持つ最後の自由である「心の自由」を奪います。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・何を考えているか、常に把握される・何を感じているか、常に監視される・誰を信頼しているか、常に知られる・何を恐れているか、常に利用される |
|---|

これが実現した社会は、ジョージ・オーウェルの『1984』で描かれた「思考警察」そのものです。しかし、『1984』では「思考を読む」ことはできませんでした。今、その技術が現実のものになりつつあるのです。

そして、最も恐ろしいのは、この技術が「テロ対策」「治安維持」「効率化」という美名の下に正当化され、導入が進められていることです。あなたの心は、既にあなただけのものではなくなりつつあるのです。

第 36 章 まとめ——なぜ加害組織は「見えない」のか？

第 36 章 1 節 加害組織が「見えない」仕組み

ここまで、予測警察システムの加害組織について、その構造と心理的メカニズムを見てきました。

加害組織は、民間に外注され、報酬で動き、犯罪者を手駒にし、カルトに偽装している。そして、その攻撃プロセスは学校のイジメと完全に同じ 6 フェーズで進行する。

なぜ、これほど恐ろしいシステムが見過ごされてきたのか？ それは、加害者たちが「普通の人々」に紛れ込んで、先回りして必ず隠蔽できる仕組みができているからです。

第 36 章 2 節 精神疾患や陰謀論者、加害者に仕立て上げられてきたから

隣にいる人が、スーパーですれ違う人が、SNS でコメントする人が——知らないうちに「加害組織」の末端に加担しているかもしれない。そして、エプスタイン事件の被害者に対するのと同じく、被害者の個人情報をバラ撒いたり、悪評やデマを流して孤立させます。また、精神疾患に仕立てて強制入院させたりもします。

そして、これが恐ろしいところですが、トランプやネタニヤフや高市などのファシズム政権が増え続けており、「予測警察システムと偽装」して、「ファシズムの支配システム」が世界に広がっています。あなた自身も知らないうちにターゲットにされているかもしれません。

「自分だけがおかしいのかな？」と思ったその瞬間が、既にギャングストーキングシステムが、アナタに牙を剥き始めたのかもしれないのです。

予測警察システム⑦：「脳間通信」が生み出す話の通じない「支配者心理」とナノ粒子対策(未完成版)

第 37 章 なぜ脳間通信は「支配」を生むのか——心理メカニズムの謎解き

第 37 章 1 節 「脳間通信」という技術

「予測警察システム」において、被害者の思考や感情をモニタリングしているという話をしました。また、被害者の思考や感情をモニタリングしたり、加害者同士が通信したりする際に「磁性ナノ粒子」を使って「脳間通信」という技術が現実化しています。軍事情報ですが、分かる範囲で分かりやすく解説していきたいと思います。

また、思考や感情をモニタリングできていると、対話や共感がなくなり、支配的な性格になっていくことも分かりやすく解説していきたいと思います。

第 37 章 2 節 トランプ大統領のイラン戦略

2026 年、トランプ大統領は、イランに戦争を仕掛けて、アメリカ経済を始め、世界中の人たちの生活や経済を破壊する暴挙を行なっています。米軍基地が壊滅して、F15 の戦闘機、F35 のステルス戦闘機まで多くの兵器が撃墜されて、イラクの基地からも撤退し、米国民も米軍兵士もほとんどの人が戦争に反対しているにも関わらず、執拗に攻撃し続けています。しかし、「神の目のようなシステム」を想定して、「自分が相手をモニタリングし、操作できる」という

感覚があると考え、このトランプ氏の不可解な言動を多少理解できるようになります。

それを解説していきます。

第 37 章 3 節 なぜモニタリングがあると「交渉」しなくなるのか？

Q：普通は、相手と交渉したり妥協したりしますよね？なぜしなくなるのですか？

通常、交渉が成立するのは「不確実性」があるからです。相手の限界、本気度、どこまで譲歩できるか、本当に降参するつもりか——それが分からないから、探り合い、妥協し、合意点を探します。

しかし、相手の思考や感情がモニタリングできると、この不確実性が消えます。相手がブラフを言っているのか、恐怖を隠しているのか、内心ではもう折れかけているのか——すべてが見える。すると、交渉は「必要ない」ものになります。相手は「対話の相手」から「操作対象」へと変わり、コミュニケーションは「要求と従属」だけになるのです。

これはイジメの現場でも同じです。いじめる側が「こいつは泣き寝入りするタイプだ」「先生に言いつける勇気はない」と相手の反応を予測できると、対等な関係を築く必要性を感じなくなります。心理学者の森田洋司が提唱した「いじめの四層構造」では、加害者・被害者に加えて「観衆」と「傍観者」が存在するとされています。観衆がはやし立て、傍観者が見て見ぬふりをすることで、加害者は「自分は許されている」という感覚を持ち、ますます支配的に振る舞うようになるのです。

第 37 章 4 節 なぜ「降参するまで攻撃し続ける」のか？

Q：なぜ、相手が降参するまで攻撃をやめないのですか？

モニタリングがあると、どの攻撃が効いているか、いつ相手の限界が来るかが、手に取るように分かります。これは、攻撃側にとって決定的な優位です。

相手が「まだ耐えられる」と分かれば、さらに圧力をかける。相手が「内心では折れかけている」と分かれば、あと一押しで降伏させられる。相手が「実は抵抗を続けるつもりだ」と分かれば、その意志を潰すまで攻撃を続ける。つまり、モニタリングは「降伏のタイミングを正確に測るセンサー」として機能するのです。

イジメの心理研究では、加害行動が「認められたい」「支配したい」という欲求に基づいて強化されていくことが示されています。最初は「面白半分」で始めた行為が、周囲の笑いや励ましによって繰り返し強化され、やがて「相手を支配する快感」へと変わっていくのです。

第 37 章 5 節 心理メカニズム——なぜ傲慢で支配的になるのか？

Q：モニタリングが、なぜ支配者気質につながるのですか？

いくつかの心理メカニズムが重なります。

第 1 に、権力感と万能感です。相手の内面が見えるという感覚は、「自分は神の視点に立っている」という万能感を生みます。これは共感を低下させ、相手を自分と同等の人間として見ることを難しくします。

第 2 に、脱人間化です。相手の思考や感情がデータとして見えると、相手は「人間」から「駒」「獲物」「任務の対象」へと変わります。苦痛や恐怖は、支配の進捗を測る指標にすぎなくなります。

心理学者バンデューラが提唱した「道徳的免責」とは、まさにこの状態です。相手を「敵」や「データ」と見なすことで、罪悪感を感じなくなるのです。

第3に、ゼロサム思考です。

「降伏か支配か、中間はない」という思考パターンです。相手が従うまで攻撃を続けるのは、この思考の典型です。

第4に、サディズムや支配欲です。

相手の恐怖や絶望をモニタリングで感じ取ることで、快感や達成感を得る人もいます。

これは、相手を「操れる」という感覚そのものが報酬になるからです。

イジメ研究では、加害者に共通する特徴として「感情の不安定さ」「衝動制御の低さ」「虐待的な養育環境の経験」が挙げられています。しかし、それ以上に重要なのは、「周囲の観衆の存在」です。観衆がはやし立てることで、加害者は「自分は正しいことをしている」という感覚を得て、ますます傲慢になるのです。

トランプ氏の取り巻きのカルト連中が肯定し続けるので、もはや引くに引けなくなって、米国と世界を破壊する道へ突き進んでいます。

第37章 6節 なぜ共感が減るのか？——共感是不確実性の中で育つ

Q：なぜ、相手を見下すようになるのですか？

共感とは、相手の内面を「想像する」ことで成立します。相手が何を感じ、何を考えているか分からないからこそ、私たちは想像力を働かせ、相手を理解しようとしています。

しかし、相手の思考がすべて見えてしまうと、その想像の余地が消えます。相手は「理解すべき存在」から「データ」や「駒」へと変わります。

心理学者ダッチャー・ケルトナーは「権力の逆説」の中で、権力を持つと共感が低下し、他者を道具として扱いやすくなると指摘しています。相手を「自分と同じ感情を持つ人間」として見る回路が使われなくなると、見下しや軽蔑が生まれやすくなります。

イジメにおける「傍観者」の存在は、この共感の欠如を象徴しています。社会学者の森田洋司の「四層構造」理論では、いじめは加害者と被害者だけでなく、いじめを煽る「観衆」といじめを見て見ぬふりをする「傍観者」で構成されているとされています。傍観者が見て見ぬふりをすることで、加害者は「自分の行動は許されている」と感じ、共感のブレーキが外れてしまうのです。

第 37 章 7 節 なぜ道徳的免責が起きるのか？——脱人間化と正当化

Q：なぜ、罪悪感を感じなくなるのですか？

心理学者アルバート・バンデュラは「道徳的免責（モラル・ディスエンゲージメント）」という概念を提唱しました。人は、自分が傷つけている相手を「敵」「データ」「任務の対象」と見なすことで、罪悪感を感じなくなるのです。

「脳間通信」や「神の目のシステム」で相手を「思考が読める対象」として見ると、相手の人間性は抽象化されます。「どうせ自分は相手のすべてを知っている」という感覚が、相手を自分と同等の存在として扱うことを難しくするのです。

イジメの研究では、加害者が「面白さ」「スカッとする」といった自己中心的な欲求充足を求めている一方で、被害者の意識の深刻さとの間にズレが生じていることが指摘されています。このズレこそが、道徳的免責の表れです。加害

者は相手の苦痛を「大したことではない」と矮小化し、自分の行動を正当化するのです。

第 37 章 8 節 なぜ支配者気質が強化されるのか？——自己選抜と環境

Q：なぜ、兵士や工作員が支配者気質になるのですか？

すべての兵士や工作員がそうなるわけではありません。しかし、次のような要因が重なると、支配的な人格が強化されやすくなります。

第一に「自己選抜」です。マキャベリアニズム、ナルシシズム、サイコパシーといったダーク・トライアド傾向の人は、権力や情報優位が得られる職種に惹かれやすく、また選ばれやすいという研究があります。

第二に「環境」です。閉鎖された集団、秘密保持、厳格な階層、服従の文化は、共感よりも忠誠と支配を重視する価値観を育てます。さらに、成功体験が「自分は特別だ」という万能感を強化し、それが傲慢さにつながっていくのです。
--

イジメの研究でも、加害行動は「エコーチェンバー内でエスカレートする」ことが示されています。仲間からの承認を求めてドンドン酷いイジメにエスカレートしていきます。

第 37 章 9 節 なぜ悪循環になるのか？——フィードバックループ

Q：なぜ、一度傲慢になると抜け出せないのですか？

心理には「自己奉仕バイアス」があります。うまくいけば「自分のおかげ」、失敗すれば「相手や状況のせい」と考える傾向です。

脳間通信で相手を操作して成功体験を積むと、「自分は相手を理解し、操れる」という感覚が強化されます。予測が外れても「相手が悪い」「情報が足りない」と責任転嫁し、自分の傲慢さを省みなくなります。これが、支配者気質をさらに強化するフィードバックループになるのです。

イジメの研究では、加害者が被害者に対して「支配・統制のための行為」を行っているという視点が重要です。弱い者を攻撃することで自分の力を誇示し、支配欲を満たそうとする衝動が、暴力を繰り返させる原動力になっているのです。

第 37 章 10 節 まとめ——技術が人格を変えるのではなく、環境が人格を歪める

ここまでの話をまとめましょう。

- ・情報の非対称性が「神の目」感覚を生む。
- ・予測優位が「交渉不要」の感覚を生み、ワガママを強化する。
- ・共感の不使用が相手を見下し、脱人間化させる。
- ・道徳的免責が罪悪感を消す。
- ・自己選抜と閉鎖環境が支配者気質を育てる。
- ・成功体験のフィードバックが傲慢さを固定化する。

つまり、脳間通信そのものが人格を変えるのではなく、極端な情報優位と権力の非対称性が、人間の心理を歪めるのです。そして、これは「技術の必然」ではなく、「環境と選択」の産物です。倫理監督、相互性、説明責任、外部からのチェックがあれば、支配者気質への傾斜は緩和できます。

逆に言えば、こうしたチェックがないまま脳間通信が軍事・諜報の現場に導入されれば、支配者気質が制度化され、増幅される危険がある——これが、この技術を考える上で最も警戒すべき心理的リスクなのです。

第 38 章 米軍の脳間通信技術——Silent Talk から N3 へ

第 38 章 1 節 Silent Talk 計画とは何か——「声に出さずに会話する」技術

Q：Silent Talk 計画は、いつ、誰が、何のために始めたのですか？

Silent Talk 計画は、米国防総省の国防高等研究計画局（DARPA）が 2009 年に開始した研究プログラムです。次の会計年度の予算に 400 万ドルが計上され、カリフォルニア大学アーバイン校に研究助成が行われました。

プログラムの目標は、「発声による会話を使わずに、神経信号を分析することによって、戦場での人から人へのコミュニケーションを可能にすること」です。つまり、兵士が声を出さずに、お互いの思考を「読む」ように通信できる技術の開発を目指しているのです。

恐らく既に開発されてあちこちで実戦配備が進んでいるので、世界中で極右ファシズム政権が次から次へと誕生しているのだと思われます。

皆さんもぜひ調べてみてください。

第 38 章 2 節 なぜ「発声前」の脳信号なのか？——pre-speech の仕組み

Q：なぜ「発声前」の信号を読む必要があるのですか？

この計画の核心は、「会話は、声になる前に、それぞれの単語に固有の神経信号として思考の中に存在する」という考え方にあります。脳は、実際に口を動かして声を出すよりも前に、伝えたい言葉を「神経信号」として生成しているのです。

DARPA は、この「会話前 (pre-speech) 」の信号を EEG (脳波計) で検出し、分析した後、自分が意図する相手にその内容を伝達する技術を開発しようとしています。EEG は頭皮に電極を貼り付けて脳の電気活動を非侵襲的に計測する技術で、頭蓋骨を開ける手術は不要です。

研究レベルでは、発声の 1 秒以上前から「これからどれくらいの長さ話すか」という情報が脳活動に現れることが確認されています。また、発声の 200～500 ミリ秒前には「何を言おうとしているか」という内容レベルの情報が抽出可能です。発声の 100～300 ミリ秒前には「どのように発音するか」という運動プログラムが完成しているのです。

第 38 章 3 節 軍事利用の観点——「1 秒前」の情報は何に使えるか

Q：この時間差は、軍事利用にどう関係するのですか？

この時間差は、N3 プログラムが目指す「50 ミリ秒以内の往復通信」の実現可能性に直結します。

もし、発声の 1 秒前から「話す意図」が読み取れるなら、その 1 秒間を使って、別の兵士の脳に「今から話す」という準備信号を送り、50 ミリ秒以内に内容を伝達することが理論上は可能になります。

しかし、1 秒前の情報は抽象的で、具体的な内容は 200～500 ミリ秒前にならないと読み取れないという制約があります。そのため、N3 のようなリアルタイム

ム通信では、「発声の 200～300 ミリ秒前」のタイミングで内容を読み取って伝達するのが現実的なターゲットになると考えられます。

第 38 章 4 節 N3 プログラムとは何か——「手術なしで脳と機械をつなぐ」壮大な計画

Q：N3 プログラムは、いつ、何のために始まったのですか？

N3（Next-Generation Nonsurgical Neurotechnology）プログラムは、2018 年に DARPA が開始した研究プログラムです。近年では DARPA の N3（Next-Generation Nonsurgical Neurotechnology）プログラムが、Silent Talk の後継として位置づけられています。目的は、「手術を必要とせずに、人間の脳と機械の間で高速・双方向のコミュニケーションを可能にする」技術を開発することです。これは、Silent Talk の「声に出さずに会話する」という目標を、より広範な「脳と機械の直接接続」へと発展させたものと言えるでしょう。

まるで攻殻機動隊のようなことが既に現実になっているのです。

DARPA は 6 つの研究チームに資金を提供し、それぞれが異なる技術的アプローチでこの課題に挑んでいます。バテル研究所が主導する BrainSTORMS プロジェクトでは、磁電ナノトランスデューサー（MEnTs）という技術を使います。このナノ粒子は、磁場を電場に、電場を磁場に変換する性質を持っています。

第 38 章 5 節 脳同士を接続する仕組み——3 つのステップで理解する

Q：どうやって脳同士を接続して、視覚情報を共有するのですか？

脳同士を接続するには、大きく分けて3つのステップが必要です。

第38章5節1項 ステップ1：脳活動を「読み取る」——デコーディングの仕組み

ライス大学が主導するMOANAプロジェクトでは、「遺伝子治療」と「光」を組み合わせ、脳活動を読み取ります。まず標的となるニューロンに遺伝子を導入し、「カルシウム依存性インジケーター」と呼ばれる合成タンパク質を作らせます。このタンパク質は、ニューロンが活動したときに光を吸収する性質を持っています。頭蓋骨の外側から赤外線を照射し、反射して戻ってくる光を超高感度の光検出器で計測することで、「脳のどこが、いつ活動しているか」を読み取ることができるのです。

第38章5節2項 ステップ2：読み取った情報を「別の脳に書き込む」——エンコーディングの仕組み

受け手の脳に「磁性ナノ粒子」を導入します。このナノ粒子は、遺伝子治療によってニューロン内に固定されます。送り手の脳から読み取った視覚情報を伝えるとき、外部から磁場を発生させます。磁場がナノ粒子を加熱すると、ニューロンのイオンチャネルが開き、ニューロンが発火します。これによって、受け手の脳に「人工的な視覚信号」を発生させることができるのです。

第38章5節3項 ステップ3：脳と外部デバイスをつなぐ「ナノトランスデューサー」

バテル研究所の BrainSTORMS プロジェクトでは、ナノトランスデューサーを注射で体内に導入し、電磁場を使って脳の特定領域に誘導します。ニューロンが活動すると、その電気信号をナノトランスデューサーが磁気信号に変換し、頭蓋骨を透過してヘッドセットのトランシーバーに送信します。逆に、ヘッドセットから磁気信号を送ると、ナノトランスデューサーがそれを電気信号に変換し、ニューロンを刺激します。つまり、ナノ粒子が脳とヘッドセットの間の通訳者として機能するのです。

第 38 章 6 節 NHK のクローズアップ現代の N3 の放送

改憲反対デモを報道しない NHK なので、ホームページを消すのは驚きはしませんが、スクショで紹介しておきます。NHK のクローズアップ現代で「N3」は紹介されました。

画像

NHK のクローズアップ現代の N3 の放送

画像

NHK のクローズアップ現代の N3 の放送

画像

NHK のクローズアップ現代の N3 の放送

画像

NHK のクローズアップ現代の N3 の放送

このシステムは、血管などを通じて注入された「磁気電気ナノトランスデューサー（MEnT）」という極小粒子が脳の神経細胞が発する信号を読み取り、それを外部の受信機に送信することで、詳細に脳波を読み取ります。

読み取るだけでなく、逆に、外部の機器から信号を送ることで、神経細胞に直接電気信号を送ることもできます。

第 38 章 7 節 視覚情報を共有する具体的な実験——「目が見えない人に視覚を届ける」

Q：実際に、脳から脳へ視覚情報を伝える実験は行われているのですか？

はい。MOANA プロジェクトの目標は、まさに「目が見える人の視覚体験を、目が見えない人の脳に伝える」ことです。ライス大学のジェイコブ・ロビンソン准教授は、「4 年以内に、手術なしで、思考の速さで、直接的な脳から脳へのコミュニケーションを実証したい」と述べています。

このプロジェクトの最大の技術的課題は「速度」です。一方の人の視覚野の神経活動を解読し、それを 20 分の 1 秒以内に別の人の脳に再現しなければならない。つまり、「読み取り→変換→書き込み」の全プロセスを 50 ミリ秒以内に完了させる必要があるのです。

第 38 章 8 節 脳間通信の兵士システム——「沈黙のコミュニケーション」から「機械の直感操作」へ

Q：兵士は、この技術をどう使うのですか？

N3 プログラムの中核的な目的は、兵士が思考だけで機械を操作し、音声を使わずに仲間と通信できるようにすることです。DARPA の N3 プログラムマネージャー、アル・エモディ氏は次のように述べています。「N3 が成功すれば、最終的には装着可能な神経インターフェースシステムを手に入れ、数ミリメートルの範囲で脳と通信できるようになる」。

具体的には、兵士はヘッドセットを装着するだけで、ドローンの群れを思考で制御したり、爆発物処理ロボットを操作したりできるようになります。N3は「1立方ミリメートルあたり16箇所の脳領域と、50ミリ秒以内の往復通信」を要求しています。これは、脳の複数の領域から同時に情報を読み取り、リアルタイムで書き込む能力を意味します。

第38章9節　まとめ——「いつ、何が読み取れるか」の全体像
この時間的階層を理解することは、「思考のモニタリング」がどこまで可能で、どの段階で介入できるのかを考える上で、非常に重要です。

第 39 章 磁性ナノ粒子の研究と製造

この章では、磁性ナノ粒子が「どこで、誰によって、どのように研究・製造されているのか」という、ものづくりの現場に焦点を当てていきます。「予測警察システム」や「脳間通信」の話を理解する上でも、この粒子がどのような技術基盤の上に成り立っているのかを知ることは、とても重要です。

素人目には「ナノ粒子」と聞くと、どこか SF のような、特別な場所でしか作れないもののように思えるかもしれません。しかし実際には、日本、ドイツ、アメリカをはじめとする世界各国の化学メーカーや大学が、それぞれの強みを活かして研究・製造を進めています。

第 39 章 1 節 そもそも磁性ナノ粒子とは何か

まず、磁性ナノ粒子そのものについて簡単に整理しておきましょう。

磁性ナノ粒子とは、その名の通り「磁石に反応する、極めて小さな粒子」のことです。代表的なものは、酸化鉄 (Fe_3O_4 、いわゆるマグネタイト) を主成分とした粒子で、直径は数十ナノメートル (1 ナノメートルは 1 ミリメートルの 100 万分の 1) 程度です。

この粒子の最大の特徴は、「外部から磁場をかけると動く」という点にあります。つまり、磁石を近づければ粒子を引き寄せたり、逆に遠ざけたりできるのです。この性質を利用して、医療分野では「体内の特定の場所に薬を運ぶ」、工業分野では「液体の精密な制御」など、幅広い応用が進められています。

そして、この粒子の製造には、高度な化学合成技術と、粒径をナノレベルで精密に制御する技術、さらに大規模な製造設備が必要です。「誰でも簡単に作れるものではない」という点が、まず押さえておくべきポイントです。

第 39 章 2 節 イスラエル——「研究開発型」の強み

Q：イスラエルでも磁性ナノ粒子の研究は行われているのですか？

はい。イスラエルは、磁性ナノ粒子の分野で「研究開発型」の強みを持っています。特に、がん治療を目的とした磁性ナノ粒子の応用研究が盛んです。

代表的な企業の一つが、ペタハ・ティクバに拠点を置く New Phase Ltd. です。この企業は、「Sarah ナノ粒子 (SaNP)」と「電磁誘導システム (EIS)」を組み合わせ、ユニークな治療システムを開発しています。仕組みはこうです。まず、生体適合性ポリマーでコーティングされた磁性ナノ粒子を血流に注入し、腫瘍組織に集めます。次に、体外から交流磁場を発生させる装置 (EIS) で粒子を加熱し、50°Cまで温度を上げてがん細胞を破壊するのです。この技術は、正常な組織には熱損傷を与えずに、転移性固形腫瘍を治療することを目指しています。

また、バル＝イラン大学の Margel グループも、機能性磁性ナノ粒子の研究開発を行っています。ドラッグデリバリーや医療イメージング、診断などへの応用を目指した、粒径分布の狭いナノ・マイクロ粒子を開発しているのです。

イスラエルの特徴は、大規模な量産技術を持つ企業というよりは、大学発の技術や研究開発色の強いスタートアップが中心であるという点です。基礎研究から応用研究へと橋渡しをする、そうした「研究開発型」のエコシステムが、イスラエルの強みと言えるでしょう。

第 39 章 3 節 アメリカ——「スケール」と「多様性」の強み

Q：アメリカの企業は、どのような磁性ナノ粒子を製造しているのですか？

アメリカは、磁性ナノ粒子の分野で「スケール」と「多様性」の両方で強みを持っています。研究用から産業用まで、幅広い製品を供給する企業が存在するのです。

代表的な企業の一つが、カリフォルニア州サンタクララに拠点を置く American Elements です。この企業は、10 ナノメートルから 200 ナノメートルまでの磁性ナノ粒子を、コーティングや表面機能化した形で製造しています。2025 年 1 月には、磁鉄鉱ナノ粒子を組み込んだ新しいナノ粒子触媒のラインを発表し、エネルギー、水浄化、医療分野での応用を進めています。

もう一つの代表的な企業が、Nanocomposix です。この企業は、金ナノ粒子の製造で世界的なリーダーとして知られていますが、磁性ナノ粒子の分野でも高品質な製品を供給しています。

アメリカの強みは、何と言っても「多様性」です。研究用の少量多品種から、産業用の大量生産まで、さまざまなニーズに対応できる企業が揃っているのです。また、American Elements のように、顧客の要望に応じてカスタム仕様の材料を製造できる企業があることも、アメリカの強みと言えるでしょう。

第 39 章 4 節 台湾——「応用特化型」の強み

Q：台湾では、どのような磁性ナノ粒子の研究・製造が行われているのですか？

台湾は、磁性ナノ粒子の分野で「応用特化型」の強みを持っています。特に、核酸抽出用の磁性ビーズの製造で存在感を発揮しているのです。

代表的な企業が、2004 年に設立された台湾圓點奈米技術（TANBead）です。この企業は、台湾最大のナノビーズ、核酸精製試薬、核酸抽出装置の製造メーカーであり、核酸精製のためのトータルソリューションを提供しています。独自の「磁性ビーズ攪拌技術」により、抽出効率を高めることに成功しており、

その製品は FDA や CE の承認を取得し、EU、アメリカ、カナダ、韓国、日本、中国、台湾で特許を取得しています。

また、TANBead は磁性粒子の製造プロセスや自動化モジュールに関する発明特許を台湾や中国で取得しており、技術の保護にも力を入れています。

さらに、台湾の大学でも磁性ナノ粒子の研究が盛んです。国立清華大学や国立中興大学では、生体医学応用に向けた磁性ナノ粒子の合成と特性評価に関する研究が行われています。

台湾の特徴は、特定の応用分野（特に核酸抽出・分子診断）に特化して、高い技術力と品質管理を実現している点にあります。研究開発と実用化のバランスが取れた、まさに「応用特化型」の強みと言えるでしょう。

第 39 章 5 節 日本——「素材技術」の底力

Q：日本企業の磁性ナノ粒子技術には、どのような特徴があるのですか？

日本は、磁性ナノ粒子の分野で「素材技術」の底力を持っています。特に、長い歴史を持つ化学メーカーが、独自の微粒子合成技術を活かして高品質な製品を供給している点が特徴です。

代表的な企業の一つが、フェローテック です。この企業は、独自のナノ制御技術を活かしたバイオメディカル用磁性ナノ粒子を展開しています。主力製品の「EMG シリーズ」は、直径約 10 ナノメートルの酸化鉄ナノ粒子で、超常磁性を示します。中でも「EMG707」は水ベースの磁性流体で、粒子表面が陰イオン性界面活性剤でコーティングされており、水中に安定して分散します。飽和磁化は 50～70 emu/g と高い磁気応答性を有しているのです。

もう一つの代表的な企業が、SEGNOS（セグノス）です。この企業は、温度や塩濃度の変化に応答して凝集・分散を制御できる「刺激応答性磁性ナノ粒子」で知られています。「Therma-Max」シリーズは、粒径約 100 ナノメートルの磁性ナノ粒子に熱応答性高分子を固定化した磁気分離ツールで、30℃付近での

可逆的な相転移を利用して、温度変化で凝集と分散を繰り返します。従来のミクロンサイズの磁気ビーズと比べ、10～100 倍以上の高感度化を実現しているのです。

さらに、戸田工業 は、200 年以上の歴史を持つ無機微粒子合成技術を基盤に、精密な粒子設計技術を有しています。マグネタイト粒子「HM-305」や「TM-023」などの磁性コア粒子を提供しており、粒子の組成・形状・サイズを精密に制御する独自技術を持っています。

日本の強みは、何と言っても「素材技術」の蓄積です。長年にわたって培われてきた微粒子合成技術と、それを精密に制御するノウハウが、高品質な磁性ナノ粒子の供給基盤となっているのです。

第 39 章 6 節 まとめ——世界の磁性ナノ粒子製造マップ

ここまでの話をまとめましょう。

イスラエルは、がん治療を目的とした磁性ナノ粒子の研究開発に強みを持っています。New Phase Ltd.のように、ナノ粒子と電磁誘導システムを組み合わせた治療技術を開発するスタートアップが存在するのです。

アメリカは、研究用から産業用まで幅広い製品を供給する企業が揃っており、「スケール」と「多様性」の両面で強みを持っています。American Elements や Nanocomposix のように、カスタム仕様にも対応できる企業が存在するのです。

台湾は、核酸抽出用の磁性ビーズの製造で存在感を発揮しています。TANBead のように、特定の応用分野に特化して高い技術力と品質管理を実現している企業が強みです。

日本は、長い歴史を持つ化学メーカーが、独自の微粒子合成技術を活かして高品質な磁性ナノ粒子を供給しています。フェローテック、SEGNOS、戸田工業 のように、素材技術の底力を持った企業が揃っているのです。

そして、これらの企業が供給する磁性ナノ粒子は、医療、診断、環境浄化、そして「予測警察システム」や「脳間通信」といった、私たちがこれまで見てきた技術の基盤となっています。磁性ナノ粒子の製造現場を知ることは、こうした技術が「どこから来て、どこへ向かおうとしているのか」を理解するための、確かな手がかりになるのです。

第 40 章 磁性ナノ粒子システムへの対抗策——今日からできること

さて、「予測警察システム」や「ギャングストーキング」のシステムには、「磁性ナノ粒子」が利用されていることがわかってきました。そこで、今度は、これに対する対策を少しずつ考えていきたいと思います。皆さんもいろいろ調べてみて何かわかったらぜひコメント欄で教えて頂ければ嬉しいです。

第 40 章 1 節 対抗策の基本方針——「入れる」「動かす」「感じる」を分断する

まず、対抗策を考える上での基本方針を整理しましょう。このシステムが機能するには、次の 3 つの段階が必要です。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・体内に磁性ナノ粒子が入り込む・外部から磁場で粒子を操作される・操作された粒子が神経細胞に働きかける |
|--|

対抗策は、この 3 つの段階のどこかを断ち切ることを目指します。具体的には、「入り込ませない」「動かせなくする」「影響を弱める」という 3 つのアプローチです。

以下、研究レベルで確認されている情報に基づき、今日から実行できるものから順に整理します。

第 40 章 2 節 第 1 層：吸入そのものを減らす（最も即効性が高い）

Q：そもそも、磁性ナノ粒子はどうやって体内に入るのですか？

磁性ナノ粒子は、主に呼吸器から体内に入り込むと考えられています。大気中の PM2.5 に含まれる磁性ナノ粒子は、呼吸によって肺に入り、そこから血液中に移行し、さらに血脳関門を通過して脳に到達することが確認されています。つまり、侵入経路を遮断することが第一の防御になります。

第 40 章 2 節 1 項 具体的な方法①：N95 マスクの着用

N95 相当のマスクは、ナノ粒子に対しても有効です。日本では、労働安全衛生法に基づく国家検定に合格した防じんマスク（JIS T 8151）のうち、DS2 または DL2 区分が N95 に相当する性能区分とされています。DS2・DL2 では、粒子捕集効率が 95%以上（透過率 5%以下）と規定されており、ナノ粒子に対しても一定の防護性能が期待できます。ただし、実際の使用環境では顔への密着性などにより防護性能が低下することがあるため、自分の顔に合ったマスクを選び、鼻と口をしっかりと覆ってください。

第 40 章 2 節 2 項 具体的な方法②：空気清浄機の稼働

室内の PM2.5 濃度を下げること、吸入する磁性ナノ粒子の量を減らせます。HEPA フィルター搭載の空気清浄機を、特に寝室と作業部屋に設置してください。

第 40 章 2 節 3 項 具体的な方法③：鼻腔洗浄

鼻粘膜に付着した粒子を物理的に洗い流します。生理食塩水による鼻腔洗浄を、外出後や帰宅時に習慣化してください。鼻毛や粘膜は粒子の最初のバリアですから、乾燥を防ぐことも重要です。

第 40 章 3 節 第 2 層：磁場と電子デバイスの影響を減らす

Q：磁性ナノ粒子を「磁場で操作させない」ためにはどうすればいいのですか？

研究により、イヤホン・ヘッドホンや携帯電話（スマートフォン）が発生する静磁場が、吸入された磁性ナノ粒子の脳内蓄積を 5 倍以上に増幅させることが確認されています。ある研究では、イヤホン・ヘッドホンや携帯電話（スマートフォン）が発生する静磁場によって、吸入された磁性ナノ粒子が脳内に 5 倍以上蓄積することが確認されています。この研究に基づき、以下の「3 つの 60 原則」が提案されています。

第 40 章 3 節 1 項 「3 つの 60 原則」

- ・イヤホンの使用時間を 1 日 60 分以内に抑える
- ・音量を最大の 60%以下にする
- ・連続使用は 60 分以内に留める

第 40 章 3 節 2 項 耳机・手机の听筒を清潔に保つ

イヤホンやスマートフォンの受話口に付着した粒子を除去するため、定期的に清掃してください。アルコール綿棒などで拭き取るだけでも、付着した粒子を減らせます。

第 40 章 3 節 3 項 睡眠時のデバイス管理

- ・就寝時はスマートフォンを枕元に置かない
- ・Wi-Fi ルーターは寝室から離し、可能なら夜間は電源を切る
- ・有線 LAN を使用し、自宅での Wi-Fi への曝露を減らす

第 40 章 3 節 4 項 磁性ナノ粒子による磁気シールド

磁性ナノ粒子そのものに、磁気をさえぎる働きがあることが、特許の文献で報告されています。ナノ磁性粒子の薄い膜は、磁力線をつかまえて動かないようにすることで、磁場をさえぎります。この膜は、磁場の強さを 50%以上、条件によっては 90%以上も減らせるとされています。

もっと実用的な方法として、 Fe_3O_4 という磁性ナノ粒子で加工した繊維が研究されています。羊毛混紡の布に磁性ナノ粒子をつけると、電磁波障害（EMI）と電離放射線の両方に対応できる、柔らかいシールド素材が作られています。また、銀ナノ粒子を含む繊維素材を使った電磁波防護服は、30MHz～1.5GHzの範囲で約40dBの遮蔽効果があります。これは、電磁波のエネルギーを99.99%以上減らせるということです。

第40章 3節 5項 具体的な方法

- ・ 磁性ナノ粒子や銀ナノ粒子を含む防護繊維で作られた衣服を着用する。
- ・ 特に頭部や頸部を保護する帽子やスカーフを活用する。
- ・ 目、口、鼻などの露出部分には、透明で電気を通す素材のフェイスシールドを併用する。

ただし、これらの繊維は研究段階であり、一般に入手できるものは限られています。また、静磁場に対しては効果が限定的であるという課題もあります。

第40章 4節 第3層：体内に入った粒子の排出を促す

Q：すでに体内に入ってしまった磁性ナノ粒子は、除去できるのですか？

体内に入った磁性ナノ粒子（酸化鉄）は、肝臓から胆汁を経由して糞便中に排泄される経路が主要です。尿中への排泄は糞便に比べて少ないとされています。

第40章 4節 1項 消化管を正常に保つ

- ・ 食物繊維を十分に摂取し、便通を整える。
糞便としての排泄を促します。

- ・水分を十分に摂取し、腎臓からの排泄も維持する。
- ・胆汁の流れを良くするために、脂っこい食事を控え、規則正しい食生活を送る。

第 40 章 4 節 2 項 運動による代謝促進

定期的に体を動かすと、血の流れがよくなり、肝臓や腎臓が老廃物を処理して体の外へ出す働きを助けます。また、運動には、Wi-Fi から出る電磁波によって脳の海馬（記憶をつかさどる部分）が傷つくのをやわらげる、という研究報告もあります。

第 40 章 4 節 3 項 体外磁気フィルターによる血液浄化

研究の世界では、血液の中にある磁性ナノ粒子を磁石の力で分離する、持ち運べる装置が開発されています。この装置は、体にやさしい細い管と、磁石にくっつくワイヤを外部の磁場の中に置き、血液中の磁性ナノ粒子だけを選んで捕まえます。研究では、うまく調整した分離装置を使うと、血液中の磁性ナノ粒子を 90%以上取り除けたと報告されています。ただし、これは体に管を入れるなど負担のかかる処置で、定期的に行う必要があります。

第 40 章 5 節 第 4 層：神経保護と抗酸化

Q：粒子が入り込み、磁場で操作されてしまった場合、神経への影響を減らす方法がありますか？

研究レベルでは、神経保護作用を持つ物質が、電磁場による神経損傷を軽減することが確認されています。

第 40 章 5 節 1 項 メラトニンとオメガ 3 脂肪酸

2025 年に発表された研究では、妊娠中のラットを 900MHz の電磁波にさらしたとき、メラトニンとオメガ 3 脂肪酸を与えると、脊髄にある運動ニューロンが傷んだり、軸索（神経の信号を伝える細い部分）が壊れたりするのをやわらげられることが分かりました。

第 40 章 5 節 2 項 抗酸化物質の摂取

- ・ ビタミン C・E、ポリフェノール（ベリー類、緑茶など）を日常的に摂取する。
- ・ 姜黄（ターメリック）に含まれるクルクミンは、抗炎症・抗酸化作用を持ちます。
- ・ リナロール（ラベンダーなどに含まれる）が、携帯電話の 900MHz 無線周波数波による学習・記憶障害を軽減したという報告もあります。

第 40 章 5 節 3 項 食事の基本

- ・ 魚油（EPA・DHA）を週 2～3 回の魚食で摂る。
- ・ ナッツ類（ビタミン E、マグネシウム）。
- ・ 緑黄色野菜（抗酸化ビタミン、フィトケミカル）。

第 40 章 6 節 第 5 層：日常生活の調整

Q：日常でできる、最も簡単な対策はありますか？

はい。日常生活レベルでできる対策があります。

第 40 章 6 節 1 項 環境の磁場源を把握する

- ・ 変電設備、大型モーター、MRI 装置の近くに長時間滞在しない。
- ・ 電子レンジ、IH 調理器の使用中は近くに立たない。
- ・ スマートメーターが設置されている場合は、寝室から離れた場所にあるか確認する。

第 40 章 6 節 2 項 就寝環境の最適化

- ・ 寝室には電子機器を持ち込まない。
- ・ 電源タップは就寝時に切る。
- ・ 可能なら寝室の Wi-Fi を夜間オフにする。

第 40 章 6 節 3 項 電磁波防護服の活用（条件付き）

銀や金属の繊維を使った電磁波防護服には、5G などの高い周波数の電磁波を 99%以上さえぎる製品があります。しかし、磁石の力のように、向きや強さが変化しない磁場（静磁場）に対しては、さえぎる効果は限られています。そのため、体内の磁性ナノ粒子を磁場から守る、という目的で完全に防御すること

は期待できません。高周波の電磁波を浴びる量を減らす、補助的な対策として使ってください。

第 40 章 7 節 第 6 層：緊急時の対応と記録

Q：異常を感じたとき、どうすればいいのですか？

第 40 章 7 節 1 項 異常を感じたときの即時対応

- ・異臭を感じたら、その場を離れ、換気する。
- ・動悸・呼吸困難が急に起きたら、
安静にし、深くゆっくり呼吸する。
- ・腹痛・下痢が起きたら、その時刻と状況をメモする。

第 40 章 7 節 2 項 証拠の記録

- ・時刻・場所・症状・そのとき何をしていたかを詳細に記録する。
- ・可能なら動画・音声で記録を残す。
- ・通信障害（送信失敗、Wi-Fi 切断など）が起きたら、
スクリーンショットを撮る。

これらの記録は、将来第三者に説明する際の客観的資料になります。

第 40 章 8 節 根本的な課題——なぜ完全な防御が難しいのか

ここまで、さまざまな対抗策を紹介してきました。しかし、正直に言って、これらはすべて「被害を減らす」ためのものであり、「完全な防御」ではありません。

第 40 章 8 節 1 項 なぜ完全な防御が難しいのか

- ・磁場は生体組織をほとんど減衰せず透過する。
磁気シールドは外部からの磁場を遮断できますが、
体内にすでに入った粒子を無力化するものではありません。
- ・磁性ナノ粒子は呼吸器から容易に体内に入り込む。
PM2.5 レベルの微粒子は、
通常のマスクでは完全に捕捉できない場合があります。

・システムの全容が不明である。誰が、どこで、どのように磁場を発生させているのかが分からなければ、ピンポイントでの対策は困難です。

・静磁場に対するシールドは、電磁波に対するシールドよりも技術的に難しい。

磁場は電場と異なり、導電性素材では遮断できません。高透磁率の磁性材料（パーマロイなど）が必要ですが、これを衣服に組み込むのは現実的ではありません。

第 40 章 9 節 まとめ——「知ること」が最初の防御

現時点で、磁性ナノ粒子システムに対する完全な防御は存在しません。しかし、以下の多層的なアプローチを組み合わせることで、リスクを減らすことは可能です。

最も重要なのは、「知ること」と「記録すること」です。このシステムは、あなたが気づかないことを前提に機能しています。マスクをし、耳机を制限し、便通を整え、症状を記録する——これらの行動自体が、システムへの最初の抵抗になります。

第41章 おわりに――支配の連鎖を断ち切るために

ここまでの話をまとめましょう。

- ・情報の非対称性が「神の目」感覚を生み、交渉を不要にする。
- ・予測優位が相手を「操作対象」に変え、ワガママを強化する。
- ・共感の不使用が相手を見下し、脱人間化させる。
- ・道徳的免責が罪悪感を消し、支配を正当化する。
- ・自己選抜と閉鎖環境が支配者気質を育て、成功体験がそれを固定化する。

そして最も重要なのは、このメカニズムがイジメから国際紛争まで、同じ心理的基盤の上に成り立っているということです。脳間通信技術は、この支配のメカニズムを「効率化し、最適化し、ためらわせなくする」装置として機能します。

もしあなたがそのような状況に置かれているなら、一人で抱え込まず、いろいろ情報収集して、調べて共有してみてください。

次回も対策を紹介します。

予測警察システム⑧：電場でも人体を操るナノ粒子——完全監視が選挙を成立させなくして極右が支配する未来(未完成版)

第41章 はじめに

被害者や人の命を助けたい平和を願う一心で、これまで「予測警察システム」の仕組みについて調べて成果を公開していますが、人を陥れるための嫌がらせや誹謗中傷キャンペーンが始まる可能性があります。自滅プログラムのような物で自滅させられそうなので、遺書のように書いておきます。

前回まで磁性ナノ粒子による脳や身体のコントロールについて解説してきましたが、実はそれだけではありません。

モニタリングされているので、筒抜けなので、磁場だけでなく、電場（電氣的な信号）でもナノ粒子を操作して、人体をコントロールできることが判明しましたので、簡単に紹介しておきます。

第42章 加害組織について

加害者の特徴は、離婚された妻子に執着する夫のように、別れた妻子や弱者、まともな人が幸せそうに生活しているのが許せないという動機で動いています。自分達が不幸なのは「幸せそうにしているアイツらせいだ」と。

そして、その幸せそうな人たちに罠を仕掛け、騙しておとしいれ、生活を破壊する——自分と仲間以外が幸せになったり、勝って豊かになるのが許せない、そんな感覚で生きているようです。

そして彼らは「自分たちに従うべき」という思想を持っています。そのような人たちにハイテクを駆使した装置を提供して、テロや攻撃を行い、怯えたまともな人たちが負けて行き、テロや攻撃の連中が弱肉強食で好き勝手に支配する、それが「極右」が支配して乗っ取る仕組みだと言えそうです。

第 43 章 ブログを公開後の異変報告

第 43 章 1 節 ブログを公開後の異変報告

ブログを公開してから、モニタリングされていることを実感しました。

磁性ナノ粒子の話を書いて、簡易なファラデーゲージのようなものを作って電場ゼロ、磁場ゼロの状態にすると、人体攻撃は最初は減りました。

しかし、そのうち「2V/m の電場」が簡易なファラデーゲージ内に生じるようになって、また腹がグーグー鳴る攻撃が始まってしまいました。要するに、「逃げられない」ことを強調する狙いがあるようです。

つまり、身体をハッキングすることで、逃れられない、告発できないように脅したり、圧力をかけ続ける、——一般の民間人で人体実験や運用している、「告発者潰し隠蔽プログラム」とも言うことができそうです。

第 43 章 2 節 モニタリングの弊害

モニタリングしていて、被害者の反応をコントロールして、真犯人の追及を阻止する。モニタリングして、様々な演出や情報コントロールをして、勘違いさせて誤誘導させる。そんな感じで真相に辿り着けない仕組みになっています。

恐らく思考のモニタリングはどんな状況でも続けることができ、人体ハッキングの方は電場ゼロ、磁場ゼロの状態だと完全に防げないが、弱くすることはできるようです。

例えば、磁性ナノ粒子で磁場を強調したブログ記事を書いたので、それで防げないことをアピールしたかったのか？

簡易なファラデーゲージ内の電場ゼロ、磁場ゼロだったのが破られて、最初は2V/mの電場で腹がグーグー鳴る攻撃が起きるようになりました。とにかく、相手の動きに応じて自由に切り替えられるので、嘘つきや間違いや正しくない情報にされてしまう、それがモニタリングの恐ろしさです。

大手メディアがフェイクニュースだらけで、ご存知の方も多いとは思いますが、AIなどで「現実や事実を自由に歪めてしまえる」「歴史改竄してしまえる」それが現代社会の恐ろしさです。

第 44 章 電場で人体操作できるナノ粒子とメカニズム

第 44 章 1 節 電場で動くナノ粒子

Q：磁性ナノ粒子以外にも、電場で動かせるナノ粒子はあるのですか？

回答：はい。特に「圧電性ナノ粒子」と「電場応答性ナノ粒子」という 2 種類のナノ粒子が研究されています。磁性ナノ粒子は「磁場」で操作しましたが、電場（電気刺激）でも腸の動きを操作できる可能性があります。中心になるのは、圧電性ナノ粒子と電場応答性ナノ粒子です。

第 44 章 2 節 圧電性ナノ粒子——「圧力を電気に変える」小さな発電機

Q：圧電性ナノ粒子とは何ですか？

回答：機械的な圧力を受けると電気を発生させるナノ粒子です。

圧電性ナノ粒子（例：チタン酸バリウム BaTiO_3 ）は、機械的な圧力を受けると電気を発生させる性質を持っています。

2024 年に発表された研究では、この粒子にカプサイシン（唐辛子の辛味成分）を結合させ、胃の粘膜にある迷走神経の感覚終末に結合させました。迷走神経は、脳と腸をつなぐ重要な神経です。そして、外部から超音波を照射すると、粒子が電気パルスが発生し、迷走神経を刺激します。迷走神経が刺激されると、腸の蠕動運動が活発になります。

つまり、超音波で圧電性ナノ粒子を強制的に発電させ、迷走神経を刺激すれば、腸の動きを人工的に亢進させ、腹鳴を引き起こすことが原理的に可能です。

第 44 章 3 節 電場応答性ナノ粒子——外部電場で直接刺激する

Q：電場応答性ナノ粒子とは何ですか？

回答：外部の電場に直接反応する粒子です。

電場応答性ナノ粒子は、外部の電場に直接反応する粒子です。代表例として、導電性ポリマー（PEDOT など）や窒化ガリウム（GaN）のナノ粒子があります。

これらの粒子を腸壁の近くに置き、外部から電場をかけると、粒子が局所的な電流を発生させます。その電流が腸壁の神経や平滑筋を直接刺激し、腸の収縮を引き起こします。

また、GaN のような半導体ナノ粒子は、超音波などの外部エネルギーで励起され、「小さな電池」のように電位を発生させることが知られています。これにより、腸の蠕動運動を人工的に強めることができます。

第 44 章 4 節 腹鳴が起きる共通の経路

Q：なぜ、どのナノ粒子でも腹が鳴るのですか？

回答：最終的に腸の蠕動運動を活発にするからです。

どちらのナノ粒子でも、最終的な流れは同じです。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 外部からエネルギーを照射（超音波または電場）2. ナノ粒子が電気信号を発生3. 腸の神経または平滑筋を刺激4. 腸の蠕動運動が異常に活発になる5. 腸内のガスと液体が混ざり、腹鳴が発生 |
|---|

つまり、外部から腸の動きを人工的にコントロールし、腹鳴を引き起こすという点では、磁性ナノ粒子とよく似た仕組みです。

第 44 章 5 節 磁性ナノ粒子との違い

Q：磁性ナノ粒子と何が違うのですか？

回答：操作に使うエネルギーが違います。

原理的には、外部から超音波や電場を操作することで、腸の動きを人為的に亢進させ、腹鳴を引き起こすことは可能です。

第 45 章 電場で腹鳴を起こすメカニズム

第 45 章 1 節 活動電位と電場

Q：電場の強さによって、体に起きることは変わるのですか？

回答：はい。2V/m と 148V/m では、作用する場所とメカニズムが変わります。

電場の強さによって、作用する場所とメカニズムが変わると考えられます。
2V/m は「神経を刺激するレベル」、148V/m は「筋肉やナノ粒子を直接動かすレベル」と考えると分かりやすいです。

第 45 章 2 節 2 V/m の電場——神経反射の“スイッチ”を入れる

Q：2V/m の電場で、なぜ腹が鳴るのですか？

回答：迷走神経を介した反射が起きるからです。

2V/m は、末梢神経が刺激を感じ始める程度の強さです。ICNIRP のガイドラインによれば、末梢神経刺激は約 2V/m という低い電場でも知覚される可能性があり、刺激閾値は 4～6V/m 程度と推定されています。

この場合、主に迷走神経を介した反射が関与すると考えられます。

流れは次のとおりです。

1. 迷走神経の感覚線維を刺激
2. 脳幹の孤束核に信号が届く
3. 副交感神経の反射が起きる
4. 腸の蠕動運動が亢進
5. 腹鳴と屁が出る

つまり、2V/m は神経反射を通じて、間接的に腸を動かすと考えられます。

第 45 章 3 節 148 V/m の電場——筋肉やナノ粒子を直接刺激する

Q：148V/m の電場では、何が起きるのですか？

回答：平滑筋やナノ粒子を直接刺激します。

148V/m は、神経刺激の閾値よりもはるかに強い電場です。このレベルでは、腸の平滑筋そのもの、または体内のナノ粒子を介して、直接的に腸を動かすことが考えられます。

第 45 章 4 節 仕組み①：平滑筋を直接刺激する

Q：なぜ、強い電場で筋肉が動くのですか？

回答：カルシウムチャネルが開くからです。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 平滑筋の細胞膜にあるカルシウムチャネルが開く2. カルシウムイオンが細胞内に流入3. 平滑筋が収縮4. 腹鳴と屁が出る |
|---|

1962 年の研究では、ネコの腸の平滑筋に電場をかけると、0.5～2V/cm (50～200V/m) の電場で収縮が起きることが確認されています。148V/m はこの範囲内にあり、平滑筋を直接刺激して収縮を引き起こすのに十分な強さです。

第 45 章 5 節 仕組み②：ナノ粒子を介して刺激する

Q：体内にナノ粒子があると、何が変わるのですか？

回答：より低い電場で筋肉を動かせます。

体内に電場応答性ナノ粒子や圧電性ナノ粒子がある場合、148V/m の電場で次のことが起きます。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. ナノ粒子が電気信号を発生 |
|---|

2. 腸壁の神経や平滑筋を刺激
3. 腸の収縮が強制的に起こる
4. 腹鳴と屁が出る

つまり、148V/m は筋肉やナノ粒子を直接動かすことで、強制的に腸を収縮させると考えられます。

第 45 章 6 節 まとめ

- ・ 2V/m は「神経のスイッチ」を入れるイメージ。
- ・ 148V/m は「筋肉そのもの」や「ナノ粒子」を直接動かすイメージ。
- ・ どちらも、最終的には腸の蠕動運動が異常に活発になり、腹鳴や屁が発生するという点では同じです。

このようなメカニズムで異変が発生しているようです。

第46章 証拠？水の中に？

昔の古いものなので、今も証拠と言えるか分かりませんが、以前、外出できなくなる攻撃を受けていた時期がありました。

第46章 1節 外出妨害

外出しようとする「腹痛が起きて出かけられない」、外出できないように「足腰が痛くなる攻撃」、運転していると「急に眠くなる攻撃」「急に視界がぼやける攻撃」を体感してきました。

第46章 2節 スポンジに含んだ水でマイクロ波を吸収

その際に、水がマイクロ波を吸収することを知ったので、スポンジをジッパーの袋に入れて、ウエストポーチの中に入れて腰に巻いて、痛みを和らげる策を使っていたことがあります。この時は痛みが激減して助かりました。

今も有効かどうか分かりませんが、興味ある人は試してみてください。

マイクロ波エネルギーは、水を含む物質に吸収されやすい性質があります。人体の約60%は水でできているため、マイクロ波が照射されると体内の水分子が振動し、組織が温められます。水を含んだタオルやジェルパッドを身につけることで、マイクロ波の影響を減らせるのです。先日紹介した水タオルやジェルパッドはその対策です。

これを使って、1ヶ月近く腰に水を入れたスポンジを巻いていたら、以下の写真のようになぜか粉末のようなものが大量に発生していてビックリした経験がありました。その当時は何か分かりませんでしたが、今思うとナノ粒子の一種だったのかもしれません。

赤いのはただのスポンジです。

第 47 章 「N3 兵士」と「極右が勝てる仕組み」

第 47 章 1 節 「N3 兵士」とは？

前回紹介した「N3」を使った兵士とはどんなものか？簡単に紹介しておきます。

秘密でもなく公開情報はいろいろあるので、興味ある人は自分でも調べてみてください。

戦闘能力：相手の脳＝神経活動をモニタリングできるので、敵の殺意・攻撃意思・次の動きを先読みできるようになります。実質的に「未来予知に近い戦い方」ができ、通常兵士では太刀打ちできないエース兵士になります。さらに、選民思想で次から次へと躊躇わずに殺すようになれば「虐殺兵士」のようになります。

戦術面：敵の脳を読む兵士が複数いれば、相互に思考を共有して完璧な連携が可能になります。無線も命令も不要で、一人が見た敵の意図を全員が瞬時に把握する。通常の軍隊相手なら一方的な虐殺ができるでしょう。

第 47 章 2 節 完全モニタリングしている兵士の状態

敵は「半透明」になります。思考まで読めるなら、意図・命令・迷い・恐怖・投降意欲まで見える。

- ・ 敵の主攻、退却路、伏撃地点を事前に把握
- ・ 指揮官、通信ノード、弱点部隊を特定して狙う
- ・ 士気が低い部隊、疲労した部隊から崩す
- ・ 投降勧告を個別・最適タイミングで出す
- ・ 敵の欺瞞を見破る

- ・ 敵が迷っている瞬間、指揮が空白になった瞬間を突く
- ・ OODA ループで敵より先回りする

つまり、奇襲を「無効化」し、心理的崩壊点を狙う訳です。

つまり、テロや内部告発や公益通報を「無効化」することができます。

戦い方の中心が「火力と機動」から「情報と心理」に移ります。

第 48 章 まとめの前に——完全モニタリング で「野党が極右政党に負け続ける理由」と 「勝てなくなった理由」

米国の中間選挙ですが、民主党が圧勝する予想ですが、ICE のようなこの「N3 兵士」が大勢いることで負ける可能性についても予測しておきたいと思います。

そもそも、議論も無く強行突破でドンドン勝手にルールを変更する「ショックドクトリン」が横行しています。知らぬ間にドンドン不利になって奪われています。

第 48 章 1 節 なぜ、完全モニタリング下では「通常選挙が成立しない」と言えるのか？

この記事では、これまで「予測警察システム」と「ギャングストーキング」の仕組みを解説してきました。磁性ナノ粒子や電場で人体を操作できること、思考や感情をモニタリングできること——これらの技術が完全・即時・全域で運用されたら、何が起きるのか？

今回はその帰結として、戦争や選挙そのものが成立しなくなるという話をします。

一方的に支配するのと、支配される側になる仕組みです。「勝ち組」と「負け組」に固定される仕組みかもしれません。

これは軍事の話のアナロジーではありません。選挙も戦争と同じ「情報の非対称性」で決まるゲームだからです。

第 48 章 2 節 なぜ、野党は極右政党に負け続けるのですか？

Q.なぜ、野党は極右政党に負け続けるのですか？

回答：監視側が「敵の思考・感情・迷い・投降意欲・反乱の芽」を行動前に把握できるからです。

軍事の世界で「完全・即時・全域」の監視が実現したら、監視される側は通常の軍隊としてはほぼ戦えません。戦い方の差で覆すというより、戦争のゲーム自体が変わるのです。

選挙も同じです。監視側は、有権者の思考・感情・迷い・投票意欲・棄権の芽を、行動前に把握できます。野党候補が「どの選挙区で、どの層に、何を訴えれば勝てるか」を考えるその瞬間に、その思考は読まれている。すると、何が起きるか――

- ・野党の奇襲（政策発表、街頭演説、緊急記者会見）が不可能になる
- ・有権者に届く前に、対立候補の陣営が先回りして潰す
- ・野党支持層の投票意欲、棄権の芽を事前に特定し、投票所へのアクセスを妨害できる
- ・野党候補者の弱み、健康状態、家族関係、過去の失敗をすべて把握し、最適なタイミングで暴露できる
- ・「この候補者は勝てない」という諦めの空気を、投票日のかなり前に植え付けられる

つまり、監視される側は「何を考えても先に読まれる」。監視側から見ると、選挙戦はほぼ透明で、選挙というより野党の崩壊管理になるのです。

第 48 章 3 節 具体的に、どんな仕組みで野党は「勝てなくなる」のですか？

Q.具体的に、どんな仕組みで野党は「勝てなくなる」のですか？

回答：監視技術と AI を組み合わせた「予測的選挙管理」が機能するからです。

第 48 章 3 節 1 項 仕組み①：思考の事前把握と先回り

パランティアの「Gotham」のようなシステムは、政府機関のバラバラのデータを統合し、AI が分析・監視します。このシステムが選挙管理に応用されると、有権者の SNS 投稿、購買履歴、位置情報、人間関係、医療記録——これらすべてがデータベース化され、AI によって分析されます。

野党候補が「この地域で雇用不安を訴えよう」と考えた瞬間、その意図は読めます。そして選挙管理側は、対立候補に「先に雇用対策を発表させる」、あるいは「野党候補の雇用政策に欠陥があると SNS で拡散させる」よう指示を出す。有権者は「野党が何か言う前に、与党が先に手を打った」と感じ、野党の訴えは「後追い」に見えるのです。

そして、「公約」は選挙に勝つための方便なので、選挙前の公約は果たされず、永久に騙され続けて生活が良くなならないシステムが完成しています。

第 48 章 3 節 2 項 仕組み②：エコーチェンバーによる「捏造された野党像」の拡散

第 34 章で解説したエコーチェンバーは、選挙戦で最も効果的に機能します。グループチャットの階層化と報酬による動機付けで、「野党は反日」「野党は国賊」「野党は中国の味方」というレッテルが組織的に拡散されます。

このレッテルがエコーチェンバー内で繰り返し共有されると、参加者たちは「自分たちは真実を知っている」という確信を持ち、野党支持者を「社会から排除すべき存在」として扱うようになります。野党候補がどんなに正しい政策を訴えても、「あの人は反日だから」「敵国のスパイだから」というレッテルで簡単に封殺されるのです。

第 48 章 3 節 3 項 仕組み③：投票意欲の「管理」

予測警察システムは、有権者の感情状態をリアルタイムで把握できます。野党支持層が「よし、投票に行こう」と考えた瞬間、その意図は読まれます。そして——

- ・選挙前に「野党はどうせ勝てない」
という空気を SNS で組織的に拡散する
- ・野党支持者が多い地域で投票所を減らす、
あるいは混雑させる（投票所への警察の過剰配置は投票率を
下げることが研究で示されています）
- ・野党支持者に「あなたの一票は無駄だ」
というメッセージを個別最適化して届ける

これにより、野党支持層の投票率は組織的に下げられ、極右政党の組織票が相対的に強くなるのです。

第 48 章 3 節 4 項 でも、野党が SNS で発信すれば、監視を逃れられるのでは？

Q.でも、野党が SNS で発信すれば、監視を逃れられるのでは？

回答：SNS そのものが監視の道具になっているからです。

X（Twitter）で野党が政策を発信しようとする、送信ボタンが押せない、通知が届かない、いいねが消える——第 4 章で解説した通りです。仮に発信できたとしても、エコーチェンバー内で「野党の嘘」として即座に拡散され、野党のメッセージは「フェイクニュース」として処理されます。

また、イーロン・マスクの元恋人が暴露したように、マスクは選挙結果を発表の数時間前に知っていたとされています。全国民の思考をモニタリングしていれば、投票結果を事前に知ることは容易です。事前に結果を知っている陣営は、どの選挙区にどれだけ資源を投入すれば勝てるかを「最適化」できます。野党は手探りで選挙戦を戦い、与党はリアルタイムでモニタリングしたり、予測結果を知らながら戦う——これがフェアな選挙であるはずがありません。

アメリカ人が拒否した AI や監視をなぜ強行するのでしょうか？

第 48 章 3 節 5 項 選挙で勝てる可能性は残っているのですか？

Q.それでも、選挙で勝てる可能性は残っているのですか？

回答：完全・即時・全域なら、監視される側は通常選挙で一方的に負け続けます。正確には、通常選挙が成立しません。

AI によるハッキング被害で企業の秘密が全て漏れて、弱みや秘密を握られて脅し放題で、パランティアのシステムが世界中の政府に導入されつつあることを考えれば、「通常選挙が成立しない」時代は、すぐそこまで来ているのかもしれない。

今は戦争反対の国民が圧倒的でも、なぜか戦争できるように改憲選挙で勝ってしまう未来も遠くないでしょう。戦争も選挙も「ファシズムに絶対勝てない」未来がくる可能性があります。

ぜひ皆さんも考えたり、予測するのは簡単なので、ご自分でシミュレーションしてみてください。

[金に魂を売った失敗作ファシスト⑤：金融ファシズム②：ファシズムの培養器——優しい人を殺し、民主主義を殺す](#)

第49章 まとめ——「知ること」が最初の防御

この記事では、「電場でコントロールできるナノ粒子」について解説してきました。

- ・圧電性ナノ粒子：超音波で電気を発生させ、迷走神経を刺激 ➡ 腸の動き亢進 ➡ 腹鳴
- ・電場応答性ナノ粒子：
外部電場で直接電流を発生 ➡ 腸の神経・筋肉を刺激 ➡ 腹鳴
- ・2V/m は神経反射のスイッチを入れる
- ・148V/m は筋肉やナノ粒子を直接動かす

原理的には、外部から超音波や電場を操作することで、腸の動きを人為的に亢進させ、腹鳴を引き起こすことは可能です。

昔ならモラルや倫理や法律があるから大丈夫だと言えましたが、今は、米国大統領や首相や大手企業が法律や憲法を無視してやりたい放題する時代ですので、エプスタイン階級のように、可能ならどんな悪事でもやってしまうでしょう。そして、最も重要なのは、「知ること」と「記録すること」です。しかもデジタルより紙などが望ましいです。

このシステムは、「あなたが気づかないことを前提に機能」しています。症状を記録し、情報を共有する——これらの行動自体が、システムへの最初の抵抗になります。

予測警察システム⑨：一般市民を恐怖に陥れる「ギャングストーキング」は「N3 兵士」の市街地戦？(未完成版)

皆さんもぜひシンプルに考えてみてください。

なぜ、アメリカ国民の大多数が反対していて、アメリカ国民が貧しく生活が苦しくなって、世界中の人を苦しめて、世界の経済を破壊するイラン戦争🇮🇷を、トランプ大統領は嘘をついてまでいつまでもやろうとしているのでしょうか？

民主主義は、腐敗したり、国民を虐殺したり、犯罪をする独裁者がいれば、「大勢で引きづり下ろせる前提」があって、機能してきました。

でも「予測警察システム」で「その前提条件が壊れていて」独裁者が何をやっても逆らえなくなっていたらどうなるのでしょうか？少なくともアメリカの共和党を見ていると既にそうになっています。

第 50 章 複数の操作チャンネルを持っている可能性

前々回まで磁性ナノ粒子で磁場で操作できる話をしてきて、今回はモニタリングされているので、電場で操作できる話をしました。

そして、「N3 兵士」というのがある話もしてきました。

被害者としては1つ原因を突き止めたら嬉しいですが、逆に加害側は、バレないように、ガスライティングを仕掛けて煙に巻いたり、騙すために、複数の操作チャンネルを持っていると考えられます。

例えば、「電場で操作できるナノ粒子」「磁場で操作できるナノ粒子」「超音波で操作できるナノ粒子」「光(可視光)で操作できるナノ粒子」など複数を組み合わせている可能性が考えられます。

特に「N3 兵士」のように、戦場で使うことを想定しているのならば、「電場」「磁場」「超音波」「光(可視光)」で操作できるナノ粒子に加えて、電気が無いところや、スターリンクなどの人工衛星などともリンクしていると考えるのが妥当です。

そこで、今回は、「N3 兵士」が、その予測能力を使って日常生活でターゲットにどのように心理的圧迫・監視・威圧を与えるか？というケースについて、日本でよく聞くケースについて、解説してみます。

環境が違うので、外国では違うかもしれませんが、最近、海外でも IKEA で付き纏いされたという女性が増えていたり、怖い思いをしている人が増えているようなので、参考にしてみてください。

数年前なら、そんな馬鹿なと言う話かもしれませんが、今は、大統領や首相が国際法や国内法や憲法を無視する戦争犯罪者で、他国を勝手に侵略したり、破壊しまくるモラルハザードだらけになっているので、倫理や人権を無視した「N3 兵士」や「サイボーグ兵士」が国民に向けられていてもおかしくはありません。実際に ICE などは、それでしょう。違法だらけで民主党・共和党両党から批判される大問題になっています。こんな大規模な破壊工作活動を世界中で自由自在に展開できる超ハイテクの国は、2 つしかないと思います。

トランプがなぜ次から次へと大勢の犯罪者を恩赦しているか？考えてみてください。

第51章 「N3 兵士」とは何か？——予測能力を持つ「超人的なエース兵士」

まず、「N3 兵士」とは何なのかを整理しておきましょう。

N3 (Next-Generation Nonsurgical Neurotechnology) プログラムは、2018 年にアメリカ国防総省の DARPA が開始した研究プログラムです。目標は「手術を必要とせずに、人間の脳と機械の間で高速・双方向のコミュニケーションを可能にする」ことでした。このプログラムの中核技術が「磁電ナノ粒子 (MENPs)」であり、これを体内に注入することで、外部から磁場をかけるだけで神経細胞の活動を読み取ったり、逆に書き込んだりできるようになります。

では、「N3 兵士」は具体的に何ができるのでしょうか？

前回までの記事で解説したように、「N3 兵士」は相手の神経活動をリアルタイムで読み取ることができます。

運動準備電位（手足を動かす直前の信号）、情動パターン（恐怖、殺意、迷い）、注意の向き、自律神経の揺らぎ——これらを統合することで、「次に何をするか」を数百ミリ秒～数秒先に確率的に予測できるのです。

つまり、「N3 兵士」は「相手が動く前に、相手の動きを読んで先回りする」戦い方をします。これは未来予知ではなく、超高速の行動予測です。

この能力を活かして、「N3 兵士」は日常生活の中でターゲットに心理的圧迫・監視・威圧を与えます。ガザ🇵🇸のように、一般市民を標的にして、国家テロの訓練や市街地戦ごっこや自警団ごっこをして、制度やデータ収集や兵器開発をしているのでしょう。

次章からは、日本でよく聞かれるケースについて、「N3 兵士」をあてはめて解説していきます。

第 52 章 日常空間での心理的圧迫・監視・威圧——「N3 兵士」の具体的な手口

ここからは、「N3 兵士」がその予測能力を使って、日常生活でターゲットにどのように心理的圧迫・監視・威圧を与えるかを見ていきます。日本でよく聞くケースを紹介しますので、環境が違う外国では違うかもしれませんが、参考にしてみてください。

多分、各国で一般市民を標的にして、国家テロの訓練や市街地戦ごっこや自警団ごっこをして、制度やデータ収集や兵器開発をしているのだと思われます。

また、細かい違いは適宜読み替えてみてください。

第 52 章 1 節 「N3 兵士」がバイクでターゲットを追跡・包囲する

第 52 章 1 節 1 項 バイクでの追跡は、どうやって行われるのか？

Q：バイクでの追跡は、どうやって行われるのですか？

「N3 兵士」はバイクに乗りながら、ターゲットの運動準備電位を読み取ります。

ターゲットが「左に曲がろう」と意識する数百ミリ秒前に、運動野が発火します。「N3 兵士」はこの発火を読んで、ターゲットが実際にハンドルを切る前に、すでに左へ進路を取っているのです。

バイク同士のチェイスでは、相手の視線・重心・ハンドルの微細な動き、そして神経活動から次のレーンチェンジを予測します。ターゲットが「路地に逃げ込もう」と考えた瞬間、その運動準備電位を読んだ別の「N3 兵士」の乗ったバイクがすでに路地の出口に回り込んでいます。ターゲットが急ブレーキをかける前に、こちらは減速準備を完了している——追突も回避も先手です。

例えば、怪しい車がいたら撮影してみようとしてみてください。即座に猛スピードで逃げたり、右折したりすることがあります。

第 52 章 1 節 2 項 複数の「N3 兵士」が連携する場合は、どうやって息を合わせるのか？

Q：複数の「N3 兵士」が連携する場合、どうやって息を合わせるのですか？

各「N3 兵士」は N3 リンクで神経情報を共有しています。

一人が読んだ「逃げたい方向」「攻撃したい相手」を全員が瞬時に把握できるのです。

無線の遅延も、言葉の曖昧さありません。ターゲットが「右の兵士を狙う」と決めた瞬間、右の兵士はすでに回避し、左の兵士がその隙に接近します。ターゲットの情動が「諦め」に傾いたのを検知したら、一斉に降伏勧告。

逆に「自爆」や「最後の抵抗」の意思を読めば、先に制圧します。「脳間通信」のグループチャットみたいなものとイメージすれば良いと思います。これが「同じ敵を共有するエコーチェンバー」にもなっているでしょう。

被害者側からすれば、グループチャットの繋がりが見えないので、「なぜか見ず知らずの人から敵視されて嫌がらせを受ける」「誰が敵なのか？わからない」と言う疑心暗鬼の認識になるのです。

第 52 章 1 節 3 項 包囲の具体的な構成は？

Q：包囲の具体的な構成は？

空から 1 名、バイク 2 名、地上 2 名の計 5 名で包囲するのが典型的です。

ターゲットの注意が上空に向いた瞬間、地上の「N3 兵士」が背後から接近します。ターゲットが武器に手を伸ばす「意図」を読んだ瞬間、全員が同時に動きます。ターゲットが実際に動くより先に、包囲が完成している——だから未来予知のように見えるのです。

第 52 章 2 節 「N3 兵士」が護送船団でターゲット車を包囲する方法

第 52 章 2 節 1 項 護送船団による包囲とは、具体的にどんなものか？

Q：護送船団による包囲とは、具体的にどんなものですか？

護送船団の構成は以下の通りです。

・前衛車：「N3 兵士」2 名。進路の先読みと交通制御。 ・左右の並走車：「N3 兵士」各 1 名。 ターゲットの側面神経活動を至近距離で読む。 ・後方車：「N3 兵士」2 名。追尾と退路封鎖。 ・偽装救急車：「N3 兵士」1 名＋通常兵。 サイレン・赤灯で交通を攪乱し、ターゲットの注意と聴覚を奪う。 ・対向車線の一般車に見える車両：実は「N3 兵士」。 ターゲットが反撃・逃走を考えた瞬間に進路を塞ぐ。 ・上空ドローン／ヘリ：「N3 兵士」1 名。 全体俯瞰と広域神経モニタリング。

第 52 章 2 節 2 項 ターゲットが反撃しようとしたら、どうなるのか？

Q：ターゲットが反撃しようとしたら、どうなるのですか？

人間の反撃は、意識的な決断より前に運動野が発火します。

「N3 兵士」はこの発火を読めます。時系列で見てみましょう。

①0 ミリ秒：ターゲットの前頭前野で 「まずい、反撃しよう」という意図が形成される。
②数十～百ミリ秒後：運動野が発火。 腕を上げる、銃を取る、アクセルを踏む——その準備信号。
③この瞬間、「N3 兵士」はすでに反応。 ターゲットが実際に腕を動かすより先に、護送船団が動く。

第 52 章 2 節 3 項 救急車はどうやってサイレンを鳴らすのか？

Q：救急車はどうやってサイレンを鳴らすのですか？

回答：ターゲットが「反撃しよう」「逃げよう」と考えた瞬間を読み取り、その思考が実際の行動に変わる前に、サイレンと赤灯を全開にして威嚇します。これは単なる攪乱ではありません。「抵抗を考えれば嫌なことが起きる」という条件付けを作り、ターゲットに自主検閲をさせるための調教です。

目的は 2 つあると考えられます。

- ・威嚇と調教：ターゲットが反撃や逃走を考えた瞬間にサイレンが鳴る。これを繰り返すと、脳は「その方向に考えを進めると不快なことが起きる」と学習します。やがてターゲットは、無意識のうちに思考を止めるようになります。これが自主検閲です。
- ・聴覚・視覚の攪乱：ターゲットの注意を散らし、判断を遅らせる。

「N3 兵士」の乗った救急車のサイレンが自分の思考に合わせて鳴り続けることで、ターゲットは次第に「何かを考えてはいけない」という感覚を刷り込まれていきます。

例えば、反撃や公益通報、正しいことをしよう、と考えるたびに、救急車のサイレンが鳴るとしたらどうでしょうか？

何度も繰り返されると、ターゲットは「何をしても無駄だ」と学習し、やがて抵抗そのものを諦めます。つまり、救急車のサイレンは、その場の行動を止めるためだけのものではありません。ターゲットの思考そのものを調教し、自ら行動を思い止まらせるための「見えない檻」になっていくのです。

第 52 章 3 節 「N3 兵士」がスーパーやダイソーに集まってくる方法

第 52 章 3 節 1 項 なぜガラガラの店に急に客が増えるのか？

Q：被害者がスーパーやダイソーに行くと、人が集まってきて客が増えます。これも「N3 兵士」なのですか？

回答：はい、その可能性があります。ただし、全員が本物の「N3 兵士」とは限りません。多くは、スマホアプリの「ミッション」や「ポイント」で動く一般協力者でしょう。

AI がターゲットの位置と行動を予測し、周辺の人に「今から手の空いてる者はこの店へ行け」「コイツをマークしろ」「レジに並べ」と指示を送ります。彼らは理由を知らず、ゲームのクエストやバイト感覚で動いています。だから一般客の装いで、自然に集まってくるのです。

例えば、20 時頃のガラガラのスーパーに行っても、到着当初はガラガラでも、急に近所から人が集まってきて客が増えます。

第 52 章 3 節 2 項 イスラエルの報酬システムと同じ構造

Q：イスラエルみたいに、ポイントがもらえるのですか？

回答：はい。イスラエルでは、ガザ住民に人質の位置情報を提供した者へ 500 万シェケル（約 1 億 4000 万円）の報酬と国外退去を約束したり、監視ネットワーク「シリオン・コレクティブ」が情報提供に 500～15000 ドルを支払うプログラムを公表しています。

現代版は、これをスマホアプリでゲーム化しています。ポケモン GO のように「今ここへ行けば得をする」と通知し、ミッションをこなすとポイント、クーポン、ランキング、ボーナスがもらえる。政治的目的でも、報酬とゲーム化があれば人は動いてしまうのです。

ポイ活のように、ポイントや報酬が貰えれば、参加する人は多いでしょう。

第 52 章 3 節 3 項 具体的な動き

Q：具体的にどうやって付き纏い、行列を作るのですか？

回答：AI やモニタリングしている「N3 兵士」が、ターゲットが動き出したら、目的地がどこか？連絡し合います。

そして AI がそして周辺の協力者に「20:05 に〇〇店へ」「通路 3 を歩け」「ターゲットの近くで立ち止まれ」「レジに並べ」「写真を撮れ」とミッションを送ります。

「N3 兵士」はターゲットの運動準備電位を読み、ターゲットが次に進む通路を先回り。一般協力者は AI の指示で、視界に入るタイミング、接近、会計前の行列を作ります。ターゲットが買い物を終わるとミッションは終了し、潮が引くように店はガラガラに戻るのです。

第 52 章 3 節 4 項 何のためにやるのか？

Q：目的は何ですか？

回答：ターゲットの威圧と調教です。

「どこに行っても見られている」と意識させ、抵抗を諦めさせます。ターゲットが「抵抗しよう」と考えるたびに、サイレンや人混みで妨害されると、脳は「抵抗すると不快なことが起きる」と学習します。やがて自主検閲が始まり、無意識に思考を止めるようになります。

店側の協力があれば、証拠も残りません。例えクレームを言っても「たまたま混んでいた」で終わります。

恐らくパレスチナなどでも使われているのではないのでしょうか？

第 52 章 4 節 工事の騒音のタイミングを使う方法

第 52 章 4 節 1 項 なぜ工事音が使われるのですか？

Q：なぜ工事音が使われるのですか？

工事音は、日常に溶け込み、偶然を装えるからです。工事音は「うるさいのは当たり前」と我慢されます。誰も「N3 兵士の意図的な嫌がらせ」とは疑いません。証拠が残らず、苦情を言っても「気のせい」で終わります。

第 52 章 4 節 2 項 工事音の場合、どんなタイミングで音が出るのか？

Q：工事音の場合、どんなタイミングで音が出るのですか？

「N3 兵士」はターゲットの思考や感情を読み、反撃の意思や不安・ストレスが高まった瞬間をリアルタイムで把握します。その上で、最も効果的なタイミングで大きな音を出すのです。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・ターゲットが「訴訟しよう」と考えた瞬間、削岩機が起動。・ターゲットが「犯人を絶対見つけてやる」と考えた瞬間、ガシャーンと金属が落ちる音。・ターゲットが「加害者を許さない」と考えるたびに、トンカチ音が鳴る。 |
|---|

このように調教していくことで、被害者が加害者を訴えたり、加害者に反撃することを防ぎ、泣き寝入りするように誘導して、調教していくのです。

その意味で、エプスタイン階級のような金や権力がある加害者を守るシステムになっている訳です。最近ではトランプが自分に逆らう者を誰彼構わず脅迫しているので、分かりませんが、金や権力がある加害者が被害を訴えている話は聞きません。

第 52 章 5 節 宅配便のタイミングを使う方法

第 52 章 5 節 1 項 なぜ宅配便が使われるのか？

Q：なぜ宅配便が使われるのですか？

宅配便は、日常に溶け込み、偶然を装えるからです。宅配便は「たまたま来た」と思われます。誰も「N3 兵士の意図的な嫌がらせ」とは疑いません。証拠が残らず、苦情を言っても「気のせい」で終わります。

第 52 章 5 節 2 項 宅配便の場合は？

Q：宅配便の場合は？

「N3 兵士」はターゲットの位置やモニタリングで運動準備電位を読み、「今から出かけよう」「今帰ってきた」というタイミングを把握します。その上で、絶妙なタイミングで配達員として出現するのです。

- ・ターゲットが玄関を出た瞬間、配達員が「ちょうど」来る。
- ・ターゲットが帰宅した直後、配達員が「たまたま」来る。
- ・ターゲットが「告発」などを考えた直後にインターホンが鳴る。
- ・ターゲットが「今日は誰も来ないだろう」と安心した瞬間、インターホンが鳴る。

「偶然」に見えますが、頻度が高すぎて度重なりと不自然です。帰宅した直後に配達員が「たまたま」来るのが繰り返されると、ターゲットは「見られている」と感じるが、証明できません。配達員は一般人に見えるので、「N3 兵士」とは気づきません。

ただ、在宅・不在のパターンを読まれ、生活リズムを完全に把握されていると意識させるのです。

ガザでは「パパを探せ」など帰宅を狙った空爆などのシステムがあるそうです。

第 52 章 6 節 上空旋回と低空飛行による監視

第 52 章 6 節 1 項 空からの監視は、どうやって行われるのか？

Q：空からの監視は、どうやって行われるのですか？

「N3 兵士」は上空をゆっくり旋回しながら、ターゲットの思考をモニタリングして、注意の向き、情動、自律神経、運動準備電位を読み取ります。

ターゲットが「告発しよう」「加害者を訴訟しよう」「加害者を許さない」と考えた瞬間、あるいは不安が高まった瞬間を狙って、低空飛行に移行します。

第 52 章 6 節 2 項 具体的な動きを教えてください

Q：具体的な動きを教えてください。

1. ターゲットが「告発しよう」と決意。運動準備電位を読む。
2. パソコンを開く前に、機体がずっと降下。
3. ターゲットが書こうとした瞬間、低空で轟音。
4. ターゲットが外に出て空を見上げる頃には、機体は反対方向へ。
5. 「見られた直後に消える」ので、気のせいに見える。

第 52 章 6 節 3 項 どうやって「見られている」と意識させるのか？

Q：どうやって「見られている」と意識させるのですか？

繰り返すが不規則に、音だけ聞かせたり、影だけ見せたりします。

「来るはず」の日は静か、「来ない」と思う日に低空飛行——裏をかくのです。ゴミ出し、帰宅、窓開け、電話中など、特定の行動に合わせることで、ターゲットは「生活を監視して支配されている」と感じ始めます。

ガザでは「パパを探せ」など帰宅を狙った空爆などのシステムがあるそうです。似たような威嚇システムなのでしょう。

第 52 章 7 節 「N3 兵士」の心理変化——なぜ「支配者」になるのか？

第 52 章 7 節 1 項 なぜこのような行為に抵抗を感じないのか？

Q：「N3 兵士」は、なぜこのような行為に抵抗を感じないのですか？

いくつかの心理メカニズムが重なります。

第 1 に、権力感と万能感です。相手の内面が見えるという感覚は、「自分は神の視点に立っている」という万能感を生みます。これは共感を低下させ、相手を自分と同等の人間として見ることを難しくします。
--

第 2 に、脱人間化です。相手の思考や感情がデータとして見えると、相手は「人間」から「駒」「獲物」「任務の対象」へと変わります。苦痛や恐怖は、支配の進捗を測る指標にすぎなくなります。要するに「ファシズム兵士」になります。
--

第 3 に、ゼロサム思考です。「降伏か支配か、中間はない」という思考パターンです。要するに「ファシズム兵士」になります。
--

第 4 に、サディズムや支配欲です。相手の恐怖や絶望をモニタリングで感じ取ることで、快感や達成感を得る人もいます。要するに「ファシズム兵士」になります。これは「AI 監視兵器の技術の必然」であり、「環境と選択」の産物です。

次章の第 53 章で解説するように、監視と嫌がらせが「治安ビジネス」そのものが「支配システム」な訳です。だから、犯罪者たちが兵器を手に入れて再び世界中でファシズムが復活して支配者気質が制度化され、増幅されて世界中の国々を破壊しているのです。

第 53 章 弾圧が反発を生み、反発が予算を生む——監視と嫌がらせが「治安ビジネス」の口実になる構造

この章では前章のような「なぜ日常空間での監視や嫌がらせが、わざわざ行われるのか？」という根本的な問いを、簡単に解説します。

イスラエル人のパレスチナ人への監視や嫌がらせは有名ですが、あれは決して特殊な話ではありません。

強い側が弱者を弾圧し、反発させ、その反発を口実に戦争や治安の予算を増やす——これは世界中で繰り返されてきた支配の手口です。石油危機や経済危機で国民の生活が困窮して窮乏している時に、戦争を無理矢理継続して、軍事費や警備費だけ増やすのはなぜか？

それは「支配するため」です。

第 53 章 1 節 パレスチナで起きていること

Q：パレスチナ人はどんな監視を受けているのですか？

回答：顔認証、監視カメラ、日常的な家宅搜索、召喚——「監視されている」感覚そのものが日常に組み込まれています。

ヘブロン の検問所には 24 台のカメラがあり、兵士がスマホでパレスチナ人の顔をスキャンすると個人情報が表示されます。イスラエルは「レッドウルフ」という顔認証技術を導入し、東エルサレムでは「マバット 2000」という CCTV ネットワークが公共空間を監視しています。

しかし、監視はカメラだけではなく。パレスチナ人は軍の活動による物音や脅威で飛び起き、断片化された睡眠と慢性的なストレスに悩まされています。「監視されている」という感覚そのものが、心理的圧迫の最も洗練された形なのです。

第 53 章 2 節 なぜ「監視」と「嫌がらせ」がセットなのか？

Q：監視だけではダメなのですか？

回答：監視は「情報収集」、嫌がらせは「心理的支配」のためです。二つがセットで、抵抗する気力を奪います。

イスラエルの監視の目的は、テロリストを見つけることだけではありません。パレスチナ人を心理的にテロリズムし、軍の常駐を受け入れるように条件付けすることです。これは「学習性無気力」——何度も妨害されると「もういいや」と諦めてしまう状態です。

元囚人たちは釈放後も、繰り返される家宅搜索、尋問の召喚、再逮捕の脅しに直面しています。「いつでもお前を捕まえられる」というメッセージを身体に刻み込む——これが、監視カメラよりはるかに強い圧力になるのです。

第 53 章 3 節 弾圧が「反発」を生む——なぜわざと反発させるのか？

ここからが核心です。

Q：弾圧すれば反発が生まれるのは分かっているはず。なぜわざわざ？

回答：反発こそが、次の弾圧の口実になり、戦争や治安の予算を正当化するからです。

アルゼンチンの「汚い戦争」（1976～1983 年）では、軍事政権が「国家再編成」と称して 3 万人以上を失踪させました。しかし、この弾圧は「ゲリラとの戦い」という口実で正当化され、「治安回復に成功した」と主張されました。つまり、「反体制派がいるから弾圧が必要」➡「弾圧したから治安が回復」➡「だから予算が必要」という循環です。

エルサルバドルでは「死の部隊」が富裕層の資金で運営され、アメリカが 60 億ドルを軍事支援しました。弾圧は「ビジネス」なのです。

ワザと争いやテロを起こして、アチコチで戦争を起こし続けるシステムです。

第 53 章 4 節 「反発を口実に予算を増やす」構造

Q：現代の監視技術は、この構造をどう変えましたか？

回答：監視技術が「効率化」と「自動化」をもたらし、弾圧のコストを下げ、予算の必要性を「見えにくく」しました。

イスラエルの監視技術はパレスチナでテストされ、世界中に輸出されています。パランティア社はイスラエル国防省と提携し、AI とデータ分析技術を提供。イスラエルとアメリカ ICE に、軍事化された AI、監視技術、差別的な警察システムを販売しています。

かつては「実際に反発が起きる」必要がありました。しかし予測警察システムがあれば、反発が起きる前に潰すことができます。それでも予算は必要です。「潜在的な脅威」が常にあると主張できるからです。監視と弾圧そのものが新たな反発を生む——この循環を維持するために、「脅威」は常に「発見され続ける」必要があるのです。

第 53 章 5 節 日常空間での嫌がらせ——「見せしめ」としての機能

Q：スーパーでの付きまとい、工事音、宅配便のタイミングなどは、この構造とどう関係するのですか？

回答：これらは「見せしめ」です。一人を徹底的に追い詰めることで、他の人々に「逆らえばこうなる」と無言で伝えるのです。

パレスチナでは、一人が検問所で長時間待たされ、顔認証でスキャンされ、家宅搜索を受ける——その光景を他のパレスチナ人も見えています。「明日は自分かもしれない」——この感覚がコミュニティ全体を萎縮させます。

日本のいじめと同じ構造です。一人を徹底的にいじめることで、他の生徒は「ターゲットにならないように」と行動する。傍観者は「見て見ぬふり」で加担しているのです。

日常空間での嫌がらせも同じ。その体験はターゲット本人だけでなく、周囲にも「何かおかしい」という感覚を与えます。しかし証明できない。だから「気のせいだろう」と片付けられる——それ自体がシステムの狙いなのです。

第 53 章 6 節 「安全」という名の予算——なぜ終わらないのか？

Q：この構造はなぜ終わらないのですか？

回答：弾圧と監視が「予算」を生み、予算が「弾圧と監視」を必要とするからです。

アルゼンチンでは軍事政権が「国家再建」で弾圧し「治安回復」を主張しましたが、実態は経済政策の失敗を覆い隠すためでした。現代の監視技術は「テロ対策」で正当化されていますが、テロ対策予算が増えれば増えるほど、監視は何らの嫌疑のない一般市民全体に拡大します。

監視が広範になればなるほど「潜在的な脅威」は常に見つかり続けます。見つかった「脅威」は「ほら、やはり監視が必要だ」という証拠になります。この循環は「安全」という名の下に永遠に続くのです。

第 53 章 7 節 おわりに——「なぜ？」を問い続けること 簡単にまとめておきましょう。

・パレスチナでは顔認証や監視カメラで日常的監視が行われ、
心理的テロリズムで人々を条件付けしている。
・弾圧は反発を生み、反発は「治安回復」「テロ対策」
の口実として使われ、予算を正当化する。
・アルゼンチンやエルサルバドルも同じ構造だった。
現代の監視技術はこれを効率化・自動化した。
・日常空間での嫌がらせは「見せしめ」として機能し、
コミュニティ全体を萎縮させる。

そして最も重要なのは、これはイスラエルだけの特殊な話ではないということです。
日本でもアメリカでも、「強い側が弱者を弾圧し、反発を口実に予算を
増やす」構造が存在しまくっています。

アメリカでは、9.11 の対テロ戦争の振り返りや再検証がとても詳しく行われて
活発な議論が行われています。また、イスラエルのガザ侵攻の口実となった
10.7 のテロ攻撃も、とても詳しく再検証が行われており、イスラエル政府が自
国民を殺害したことが問題視されています。

恐らく知らないし、調べもしないのはファシズムに加担する日本人だけでしょう。

「なぜ、こんなことが起きているのか？」——この問いを持ち続けること。それが、この構造に加担しないための第一歩です。

第 54 章 知らない間に皮膚に切り傷ができて いる——電場とナノ粒子の複合メカニズム

今回は、「知らない間に皮膚に切り傷やアザができている」という現象について、電場の観点からさらに深掘りします。

第 54 章 1 節 なぜ「知らない間に切り傷」ができるのか？

Q：磁性ナノ粒子が直接皮膚を切るわけではないのですよね？

その通りです。磁性ナノ粒子は物理的な刃物のように皮膚を切ることはありません。粒子のサイズは数十～数百ナノメートル（髪の毛の 1 万分の 1 以下）であり、皮膚の表面を機械的に切断する力はありません。

では、なぜ「知らない間に切り傷ができる」という報告があるのか？

考えられるメカニズムは、酸化ストレスによる皮膚組織の脆弱化、電場による細胞膜の破壊、無意識の搔破の 3 つです。まだわからないところが多いので、またよく調べて後日お知らせします。

第 54 章 2 節 電場が細胞膜を「引き裂く」仕組み

Q：電場が細胞膜を破壊することがあるのですか？

はい。これを理解するために、電気穿孔法（エレクトロポレーション）という技術を思い浮かべてください。細胞に強い電場をかけると、細胞膜に一時的な穴が開きます。これは、細胞膜の脂質二重層が電場によって不安定になり、孔が形成される現象です。

MENPs が生成する局所的な電場（100 V/m 超）は、この電気穿孔を引き起こすのに十分な強度を持っています。つまり、皮膚組織内に MENPs が蓄積しているところに外部から磁場がかかると、粒子の周囲に強い電場が発生し、近くの細胞の膜が破壊される可能性があるのです。

さらに、磁性ナノ粒子は磁場によって物理的に回転・振動します。この機械的な力が細胞膜に加わると、膜が破壊されることが確認されています。つまり、電場による膜の不安定化と機械的な引き裂きが同時に起きることで、皮膚組織が傷つきやすくなるのです。

第 54 章 3 節 なぜ「知らない間」なのか？

Q：なぜ本人が気づかないうちに傷ができるのですか？

皮膚の表面には痛覚を感じる神経が豊富にありますが、皮膚の深い層や皮下組織には痛覚神経が少ない領域があります。MENPs による細胞膜の破壊が、皮膚の比較的深い層で起きれば、本人は痛みを感じないまま、表面に切り傷のような裂け目が現れる可能性があります。

また、酸化ストレスで皮膚が弱くなると、かゆみが生じることがあります。かゆみを感じると、無意識に掻いてしまうことがあります。特に睡眠中は、本人が気づかないうちに強く掻き、爪で皮膚を引っ掻いて切り傷を作ってしまうことがあります。

また、モニタリングされていて、攻撃している時に痛覚が麻痺しているのかもしれないかもしれません。とにかく、今まで見てきたように、気づかない間に攻撃し、無実のターゲットに身体拷問や精神的ストレスを与えて「ワザとトラブルを起こさせるシステム」なので。

第 54 章 4 節 アザ（皮下出血）ができるメカニズム

Q：アザはどうやってできるのですか？

アザ（皮下出血）は、毛細血管が破れて皮膚の下に血が漏れ出すことでできます。酸化ストレスで血管内皮細胞が傷つくと、毛細血管が脆くなり、軽い刺激でも破れやすくなります。

また、磁性ナノ粒子が血管内に存在すると、血流の局所的な乱れや血管壁への機械的刺激が生じる可能性があります。電場による血管内皮細胞の損傷も加わることで、ぶつけた覚えがないのにアザができるという現象につながる可能性は、理論的に考えられます。

ただし、アザの自然発生には抗凝固薬やサプリメントの影響、ビタミン不足、遺伝的な血管の脆さなど、磁性ナノ粒子とは無関係な要因も多くあります。

第 55 章 尿や便からナノ粒子を検出できるか？——研究レベルの現状

ここからは対策などを紹介します。

西側諸国の連中は、水や食料、電気、電磁波など、身近なものをなんでも兵器や武器に変えて人々を支配しようとしています。日本では PFAS など謎の物質や、アメリカでも食品にいろいろ混じっていると大問題になっており、水や食料など身近なものにいろいろ混ざっているのだと思われます。

これは、試した訳ではありませんが、もし試してみた方がおられたら教えて頂ければ幸いです。

第 55 章 1 節 体内に入った磁性ナノ粒子を、尿や便から検出することはできるのか？

Q：体内に入った磁性ナノ粒子を、尿や便から検出することはできるのですか？

結論から言うと、研究レベルではすでに実現されています。特に便については「非侵襲的なアプローチ」として確立されつつあり、尿についても SQUID（超伝導量子干渉素子）を使った方法で検出が報告されています。ただし、一般人が自宅で簡単に検査できるキットは存在しません。

第 55 章 2 節 なぜ尿や便で検出するのか？

Q：なぜ尿や便で検出するのですか？

体内に入った磁性ナノ粒子は、主に肝臓から胆汁を経由して糞便中に排泄される経路と、腎臓から尿中に排泄される経路の 2 つで体外に出ます。研究では、静脈注射後の磁性ナノ粒子の体内動態を調べた結果、尿と腎臓の試料で磁気信

号のピークが観察され、粒子が腎臓から尿中に排泄されることが確認されています。

第 55 章 3 節 具体的にどんな検出技術があるのか？

Q：具体的にどんな検出技術があるのですか？

- ・ SQUID バイオサセプトメトリー：超伝導を利用して非常に弱い磁場を検出。ピコグラムレベル（1 兆分の 1 グラム）の検出が可能。
ただし巨大で高価な装置で、一般の医療機関には普及していません。
- ・ 糞便磁気測定法：2026 年 6 月に発表された研究で、
パーキンソン病患者の糞便サンプルから磁性ナノ粒子の存在を確認。
非侵襲的なアプローチとして概念実証済みです。
- ・ 磁気粒子分光法（MPS）：磁性ナノ粒子の非線形な磁気応答を検出。
食事からの磁気汚染と、体内に注入された
磁性ナノ粒子を区別できるのが最大の利点です。

第 55 章 4 節 なぜ「簡単ではない」のか？

Q：なぜ「簡単ではない」のですか？

SQUID や MPS は高価で大規模な装置であり、一般の医療機関には普及していません。磁気センサーは周囲の磁場ノイズ（電車、自動車、電子機器など）の影響を受けやすい。尿や便に含まれる磁性ナノ粒子は非常に微量で、検出には専門的な前処理が必要。食事や環境からの磁気汚染との区別が大きな課題です。

第 55 章 5 節 自分でできることはああるか？

Q：自分でできることはありますか？

もし「体内に磁性ナノ粒子が入っているかもしれない」と感じているなら、まずは記録を取ってみること現実的です。症状が出た時刻、場所、状況、症状の

内容、周囲にあった電子機器、食事の内容を記録しておくことが、客観的な資料になります。

まだわからない事だらけですが、電気分解など検出する方法がわかった方はぜひ教えて頂ければ幸いです。

第 56 章 金属で頭を覆えば防げるか？—— 「電場」と「磁場」のシールドは別物

第 56 章 1 節 金属で頭を覆うことで、磁性ナノ粒子の通信や挙動を軽減できるか？

Q：金属で頭を覆うことで、磁性ナノ粒子の通信や挙動を軽減できますか？

結論から言うと、金属で頭を覆うことには、部分的に意味があります。ただし、その効果は「どんな金属か」「どんな磁場か」によって全く異なり、万能ではありません。特に「静磁場」に対しては、ただの金属板ではほとんど効果がありません。

第 56 章 2 節 「電場」と「磁場」のシールドは根本的に違う

Q：なぜアルミホイルではダメなのですか？

まず大前提として、「電気シールド」と「磁気シールド」は仕組みが違います。

電場（電気力）は、導電性の金属で覆えば遮断できます。これをファラデーケージと呼びます。アルミホイルで覆えば、外部からの電波（高周波の電磁波）はかなり遮断できます。

しかし、磁場（磁石力）は、ただの金属板では遮断できません。ファラデーケージは静磁場を遮断できないのです。飛行機の中で方位磁針が正常に動くのは、機体の金属が地球の静磁場を遮らないからです。

磁性ナノ粒子を動かすのは磁場です。したがって、アルミホイルを頭に巻いても、磁性ナノ粒子の挙動は軽減されません。MIT の学生が 2005 年に行った研

究でも、アルミホイルの帽子は電磁波をほとんど遮断できず、むしろ特定の周波数では効果を強めてしまう可能性さえ指摘されています。

第 56 章 3 節 磁場を遮断するには「高透磁率」の金属が必要

これは、試した訳ではありませんが、もし試してみた方がおられたら教えて頂ければ幸いです。

Q：では、どんな金属なら磁場を遮断できるのですか？

磁場を遮断するには、パーマロイやミューメタルといった透磁率（磁力を通しやすさ）が非常に高い合金が必要です。これらの材料は、外部からの磁力線を自分の内部に引き込んで吸収し、内側に磁場が入りにくくします。研究用の脳磁計（MEG）や心磁計（MCG）の測定室では、ミューメタルを何層にも重ねたシールドルームが使われています。

つまり、ただの鉄やアルミではなく、特別な合金でなければ磁場は遮れないのです。磁性ナノ粒子を操作する磁場が静磁場や超低周波の場合、金属シールドの効果は限定的です。

第 56 章 4 節 磁性ナノ粒子の「通信」と「挙動」への効果

Q：高透磁率の金属で頭を覆えば、完全に防げるのですか？

いいえ。ここで言う「通信」が、外部の磁場発生装置と体内の粒子の間のやり取りを指すなら、高透磁率の金属で頭を覆うことは、理論上、ある程度の軽減効果が期待できます。外部からの低周波磁場を減衰させれば、粒子を操作する力が弱まるからです。

ただし、完全に遮断するには、隙間のない完全な密閉が必要です。頭を覆う帽子型では、首や顔の開口部から磁場が漏れ込みます。実用的なヘルメット型シールドの研究も存在しますが、完全な遮断ではなく「減衰」ととどまります。

そして最も重要なのは、シールドは「外部からの操作を弱める」だけで、体内に入った粒子を除去するものではないということです。すでに体内に入った粒子の挙動を止めることは、外部からの磁場を遮断するだけでは不十分です。なぜなら、粒子は体内に残ったままですし、外部磁場がなくなれば振動は止まりますが、粒子そのものが除去されるわけではないからです。

第 56 章 5 節 現実的な評価——「できること」と「できないこと」

最も重要なのは、「知ること」と「記録すること」です。このシステムは、あなたが気づかないことを前提に機能しています。

予測警察システム⑩：脳間通信の技術開発の歴史と「加害者と被害者の2極化」の仕組み——なぜ同じ磁性ナノ粒子が「通信」と「拷問」に分かれるのか？(未完成版)

今回は、少し視点を変えて、そもそもこの「脳間通信」という技術が、いつ、誰によって、何のために研究されてきたのか？——その80年にわたる歴史をたどります。そして、その歴史の先にある「加害組織のピラミッド構造」と「勝ち組と負け組の二極化社会」、そして、被害者と加害者に使われるナノ粒子の違いを解説していきます。

一種の強制的トランスヒューマニズムが始まっていると言えるのかもしれませんが。

これだけの事実がありながら、妄想と考えて馬鹿にしていると足元を掬われると思われまふ。仮説としてでも考えてみてください。

第57章 脳間通信は「妄想」ではない——80年の研究が示すもの

「思考が外部に漏れている」「脳に直接何かが送り込まれている」——こうした体験を話すと、多くの方は「そんなのはSFの話だ」「統合失調の被害妄想だろう」と言います。しかし、それは間違いです。

なぜなら、政府や諜報機関がずっと研究してきたからです。

そして、その諜報機関は「エプスタイン・ファイル」や「MK ウルトラ」や「JFK 暗殺の“陰謀論”のレッテル貼り」のように一部の一般人を密かに標的にして、実験したり口封じをしてきた歴史もあります。FBI や CIA のエプスタイン

ン事件隠蔽工作やエプスタイン被害者漬しのように、何か隠している可能性が非常に高いです。

そして、脳と脳をつなぐ技術、脳と機械をつなぐ技術は、80 年以上にわたって、実際に諜報機関や軍事機関で研究されてきました。冷戦時代の CIA の「超能力」研究から、現代の DARPA のナノ粒子 BCI まで、その研究の系譜は途切れることなく続いています。

まずは、その歴史を 4 つの時期に分けてざっくりと全体像を見ていきましょう。

詳しくは専門書をご覧ください。

第 58 章 諜報機関の「思考の送受信」の研究の歴史

第 58 章 1 節 第 1 期：冷戦時代の「超能力」研究——MK ウルトラとコップファーク計画（1950 年代～1970 年代）

第 58 章 1 節 1 項 なぜ諜報機関が「思考の送受信」を研究し始めたのか？

Q：そもそも、なぜ諜報機関が「思考の送受信」を研究し始めたのですか？

冷戦時代、アメリカとソ連はあらゆる手段で情報を奪い合っていました。核兵器、スパイ衛星、暗号解読——その延長線上に、「人間の脳そのものを情報源にする」という発想が生まれました。

1952 年、CIA は「MK ウルトラ計画」を開始します。これは、LSD や催眠術、感覚遮断などを使って人間の精神を操作し、洗脳やマインドコントロールを実現しようとする極秘プロジェクトでした。1977 年 8 月 3 日の上院公聴会で、CIA 長官スタンスフィールド・ターナーは「MK ウルトラが 80 の機関と 185 名の研究者を動員し、149 のサブプロジェクトを支援していた」と証言していま

す。この公聴会では、MK ウルトラが「1953 年から 1964 年まで密かに実施された CIA のプロジェクト」であり、「薬物と行動修正に関する研究」を含んでいたことが明らかにされました。

最近も公聴会が開かれたので、ご自分で確認してみてください。

第 58 章 1 節 2 項 「MK ウルトラ計画」と隠蔽

ターナーは証言の中で、「MK ウルトラに関するファイルの大部分は、1973 年に当時の CIA 長官の承認のもと、当時の技術サービス部長の命令によって破棄された」と述べています。つまり、CIA は自らの犯罪の証拠を意図的に消したのです。2026 年 6 月には下院で再び公聴会が開かれ、調査ジャーナリストのオニール氏が「1977 年に議会は真実を知らされていなかった」と証言しました。

つまり、国民や議会にも隠蔽していることが明らかになっているのです。

第 58 章 1 節 3 項 「コップファーク計画」と「ARD デバイス」

MK ウルトラと並行して、FBI と CIA は「コップファーク計画」を実施しました。これは「テレパシーによるスパイ活動と犯罪防止」を目的としたプロジェクトで、計画の中心的な目標は「動作する脳制御装置」、つまり「思考を送受信できるトランスミッター」の開発でした。計画では「ARD デバイス」という装置が開発されましたが、実際に使用されたのは一度だけで、失敗に終わっています。

真相は不明ですが、失敗したことになっています。

第 58 章 1 節 4 項 なぜ冷戦時代の研究は「失敗」とされたのか？

Q：なぜ冷戦時代の研究は「失敗」とされたのですか？

当時の技術では、脳の信号を正確に読み取ることも、ましてや送信することも不可能でした。しかし、重要なのは「研究の方向性」が確立されたことです。CIA の「スターゲート計画」（1972 年～1995 年）では、スタンフォード研究所で「遠隔視」の研究が続けられ、敵国の軍事施設を「超能力で見る」実験が行われていました。これらの研究は「失敗」とされましたが、その技術的野心は後の世代に引き継がれていったのです。

2026 年も AI 企業による「スターゲート計画」が始動しています。

完全監視社会になりつつのに、偶然の一致でしょうか？ぜひ皆さんも調べてみてください。

第 58 章 2 節 第 2 期：DARPA の「テレパシー」研究—— Silent Talk 計画（2009 年）

第 58 章 2 節 1 項 2009 年に突然 DARPA の「テレパシー」研究が復活

Q：冷戦時代の研究が、なぜ 2009 年に突然復活したのですか？

21 世紀に入り、脳科学と AI 技術が急速に進歩したことで、「かつては不可能だったことが、技術的に可能になりつつある」という認識が広がりました。DARPA は 2009 年、「Silent Talk」計画に 400 万ドルの予算を計上します。

第 58 章 2 節 2 項 声を使わず通信する「Silent Talk 計画」

Q：Silent Talk 計画では、具体的に何を目指していたのですか？

プログラムの目標は明確でした。「発声による会話を使わずに、神経信号を分析することによって、戦場での人から人へのコミュニケーションを可能にすること」です。

仕組みはこうです。人間の脳は、実際に口を動かして声を出すよりも前に、「伝えたい言葉」を神経信号として生成しています。DARPA はこの「発声前」

の信号を EEG で検出し、AI で解析して、意図する相手に伝達する技術を開発しようとしていました。

計画には 3 つの主要目標がありました。

第 1 に「EEG パターンと個々の単語の関連付け」、 第 2 に「パターンがすべての人に共通かどうかの検証」、 第 3 に「実用可能な試作機の構築」です。
--

また、米陸軍はその前年（2008 年）にカリフォルニア大学に 400 万ドルを提供し、「合成テレパシー」の研究も開始していました。

つまり、アナタが知らないし興味がないだけで、前からずっと「声や文字を使わずに通信する技術」は開発され続けてきた訳です。

例えば、イスラエルやアメリカや日本のような好戦的な国が、敵国や味方にバレずに「戦争や紛争やテロを起こしたりする」には「必要不可欠な技術」な訳です。

一般人には不気味な事件や火災や火事やテロが起きたとしか認識されません。

第 58 章 2 節 3 項 真相は不明だが。。。

Q：この計画は成功したのですか？

Silent Talk 計画は、実用化には至りませんでした。

真相は不明ですが表向きはそうなっています。

しかし、この計画は「発声前の脳信号を読み取る」という技術的アプローチを確立し、その後の研究の基盤となりました。

第 58 章 3 節 第 3 期：N3 プログラムと BrainSTORMS——
「手術なしで脳と機械をつなぐ」（2018 年～2026 年）

第 58 章 3 節 1 項 後継として「N3 プログラム」を開始

Q：Silent Talk の後継として、何が始まったのですか？

2018 年、DARPA は「N3 プログラム」を開始しました。これは、手術を必要とせずに脳と機械の間で双方向通信を可能にする技術の開発を目指すものでした。

N3 プログラムの目的は、Silent Talk の「兵士同士の通信」からさらに進んで、「兵士が思考だけでドローンやロボットを操作し、機械からの情報を脳に直接フィードバックする」ことでした。

第 58 章 3 節 2 項 中核技術「BrainSTORMS」

Q：N3 プログラムの中核技術「BrainSTORMS」とは何ですか？

N3 プログラムの中で、バテル研究所が主導したのが「BrainSTORMS」プロジェクトです。このプロジェクトの中核は「磁電ナノトランスデューサー」と呼ばれる特殊なナノ粒子です。

バテル研究所の 2020 年 12 月 15 日のプレスリリースによれば、MEnT は「人間の髪の毛の幅に数千個が収まるほど」の極小サイズで、まず循環系に注射され、磁石で脳の標的領域に誘導されます。ニューロンが発火して電気信号を出すと、MEnT がその電気信号を磁気信号に変換し、頭蓋骨を透過して外部のヘッドセット型トランシーバーに送信します。逆に、ヘッドセットから磁気信号が送られてくると、MEnT がそれを電気信号に変換してニューロンを刺激します。

バテル研究所の主任研究員パトリック・ガンザー氏は「現在のデータは、MEnT を非外科的に脳に導入し、双方向の神経インターフェースを実現できることを示唆している」と述べています。第 1 フェーズでは「この画期的な技術を使ってニューロンへの精密な読み取りと書き込みを実現した」と報告されています。

第 58 章 3 節 3 項 N3 プログラムは『完了』と宣言

Q：N3 プログラムは、実際にどこまで進んだのですか？

N3 プログラムは、当初 3 つのフェーズに分かれていました。第 1 フェーズ（12 ヶ月）で基本コンポーネントのテスト、第 2 フェーズ（18 ヶ月）でシステム統合と動物実験、第 3 フェーズ（18 ヶ月）でデバイスの性能向上とヒトでのテストが予定されていました。

2026 年 4 月 30 日、複数のメディアが「N3 プログラムが DARPA のウェブサイトで『完了』と宣言された」と報じました。

しかし、DARPA は「技術が実際に機能しているか、使用されているかについての詳細は提供していない」としています。2023 年以降、プログラムに関する情報はほとんど公開されなくなり、ヒトでのテストが行われたかどうかにも明らかにされていません。これは、技術が「成功した」ことを意味するのか、それとも「中止された」ことを意味するのか、外部からは判断できない状況なのです。

もし、成功していて、トランプ大統領やヘグセス戦争長官のように、明らかに狂っていて国際法や法律や憲法を守らずに、違法行為を強行するようなモラルハザードの指揮官だった場合、この技術を実戦や国民や一般市民に対して使おうと強行していても全然おかしくはありません。

少なくとも、ベネズエラ侵攻、イラン戦争など、国際法を守らず、民間人を狙ったり、戦争犯罪を繰り返しているのは皆さんも周知の事実だと思います。

第 58 章 4 節 第 4 期：ナノ粒子双方向 BCI の現在——スパイ活動の新たな手段（2026 年～）

第 58 章 4 節 1 項 その後のナノ粒子を使った双方向 BCI の研究

Q：N3 プログラムの後、何が起きているのですか？

N3 プログラムが「完了」とされた 2026 年、ナノ粒子を使った双方向 BCI の研究は、新たな段階に入っています。

2026 年 3 月 28 日、『Advanced Science』誌に「磁電ナノ粒子ベースのワイヤレス脳-コンピュータ・インターフェース：基礎物理と技術的経路」と題する論文が発表されました。この論文は、磁電ナノ粒子が「サブミリメートルの空間分解能とミリ秒の時間精度」で深部脳および皮質の神経調節と記録を可能にすると予測しています。また、単一のナノ粒子が「5000 V/cm」のオーダーの電場を生成できることが示されており、これは神経細胞膜の静止電場（約 140,000 V/cm）の数パーセントに相当する意味のある強度です。

第 58 章 4 節 2 項 欧州議会議員が文書を公表

Q：スパイ活動への応用は、どうなっているのですか？

2026 年 2 月、ルーマニアの欧州議会議員ディアナ・ソショアカは、吸入可能な磁性粒子が脳の特定領域に誘導され、「ニューロンを活性化させ、高速な双方向脳-機械インターフェースを可能にする」という文書を公表しました。彼女はこれを「ニューロンに読み書きできる」と平易な言葉で表現し、「周波数変調が思考に影響を与える可能性がある」と指摘しました。

また、2026 年 5 月には DARPA の顧問ジェームズ・ジョルダノ博士が「私たちは頭部にセンサーと送信機のネットワークを作成できる。それにより脳に読み取りを行い、リアルタイムで書き込みが可能になる。吸入可能なナノ粒子を用いて」と述べたと報じられています。

第 59 章 加害組織について——なぜ「誰がやっているのか」わからないのか？

ここまで、脳間通信技術の 80 年の歴史を見てきました。次に、この技術が「誰によって」「どのように」使われているのか、その組織構造を見ていきましょう。

第 59 章 1 節 なぜ、加害者の正体がわからないのか？

Q：なぜ、加害者の正体がわからないのですか？

それは、学校のイジメと同じ構造になっているからです。イジメでは、「誰が最初に始めたのか」「誰が指示しているのか」がわからないまま、集団全体が加害に加担していきます。予測警察システムの加害組織も、まったく同じ構造です。

具体的には、次のようなピラミッド型の組織になっていると考えられます。

とりあえず、長年諜報機関が研究してきたので、このように書いておきますが、政府は複雑なので詳細は不明です。ネオコンや議員や大統領など適宜読み替えてください。

第 59 章 2 節 第 1 層：加害者（諜報機関）

頂点に立つのは、CIA や NSA、イスラエルのモサド、日本の公安調査庁など、各国の諜報機関です。彼らは直接手を汚しません。方針を決め、予算を配分し、民間企業に「外注」します。以前も書きましたが、Palantir が CIA の投資部門 In-Q-Tel から資金提供を受けて設立されたように、諜報機関の仕事は民間企業を通じて行われるのです。

第 59 章 3 節 第 2 層：加害者（司令塔）

諜報機関から指示を受けた民間企業や軍の幹部が、実際の運用を担当します。誰をターゲットにするか、どのような攻撃手法を使うか、人員の手配や配置などを決めている模様です。Palantir が ICE に提供している「ImmigrationOS」や「ELITE」のようなシステムが、この層で使われています。ICE は 2025 年 4 月 17 日に Palantir と 3,000 万ドルの契約を結び、このシステムを導入しました。

この辺の詳細については、ICE の専門家の調査報道をご覧ください。

第 59 章 4 節 第 3 層：加担者（N3 兵士）

実際にターゲットの監視と攻撃を行うのが、「N3 兵士」と呼ばれる人々です。彼らは常時 24 時間・365 日、被害者の思考をモニタリングできます。被害者の弱みや感情をリアルタイムで読み取り、最も効果的なタイミングで攻撃を仕掛けます。

暴走バイクの音や救急車のサイレン音、工事音などを使って、被害者を精神的に追い込みます。被害者が耳栓やイヤマフで音を遮断しようすると、聴覚や感情をモニタリングしているので、さらに大きな音を出して干渉します。

音から逃げようすると、今度は身体をハッキングして、腹鳴や身体の痛みや痙攣などで監視をアピールし、精神的に追い詰めます。

怯えて引きこもり状態になり、外界から完全に遮断されて孤立無縁状態になると、激痛の身体拷問が行われる——このように「証拠が掴めない、バレないのを悪用」し、他者との境界線を次々に侵略していくのが「N3 兵士」の手口です。

イスラエルの諜報機関や CIA が恐れられるのもこの辺でしょう。

第 59 章 5 節 第 4 層：傍観型加担者

正直なところ仕組みはまだよくわかっていないですが、ゲームなどに偽装したアプリでポイントや報酬をもらいながら、知らず知らずのうちに加害に加担しているような人々です。

イスラエルでは、ガザ住民に人質の位置情報を提供した者へ 500 万シェケルの報酬と国外退去を約束したり、監視ネットワーク「シリオン・コレクティブ」が情報提供に 500～15,000 ドルを支払うプログラムを公表しています。現代版は、これをスマホアプリでゲーム化しているのです。

例えば「トクリュウ」と呼ばれる日本の犯罪グループは、ニュースサイトに見せかけた偽装アプリを使って、犯罪をしていました。

【YouTube Video】トクリュウ極秘アプリ メディアで初解析「スーパーアプリです」暴かれた恐怖の機能

第 59 章 6 節 第 5 層：傍観者

加害ネットワークの存在を知らない人々です。彼らは「自分は関係ない」と思っていますが、知らないうちに加害の一部になっている可能性があります。

あるいは、

第 59 章 7 節 第 6 層：被害者

脳をモニタリングされ、思考も感情も筒抜けにされています。

身体もハッキングされ、外部から操作されています。助けを求めて医療機関や行政に行っても、思考をモニタリングされているので先回りして追い返されます。あちこち訪ね歩いても助けてもらえず、孤立させられます。

エプスタイン被害者のように相手の人生を破壊することが狙いです。

これはあくまで、ざっくりとした理解のための分類で、さらに人間をどこまで操作できるのか？まだ分からないので実際にはもっと複雑でややこしい可能性はあります。

考える時の目安として役立ててください。

第 60 章 加害者と被害者に使われるナノ粒子の違い——「通信」と「攻撃」は紙一重

ここまで見てきて、気づいたことがあると思います。被害者は一方的に思考や感情をモニタリングされて、拷問されるだけです。一方、加害者同士は脳間通信して、気づかれぬように攻撃しています。

同じ「磁性ナノ粒子」を使っているのに、なぜこんなに立場が違うのでしょうか？

第 60 章 1 節 「加害者に使われるナノ粒子」と「被害者に使われるナノ粒子」の違い

加害者と被害者を分ける大きなポイントの違いとして、加害者同士は、「双方向の脳間通信」ができるのに対して、被害者は、「一方的に思考をモニタリングされ」て、「身体拷問攻撃」を受けることです。

- ・加害者同士は、「双方向の脳間通信」ができる
- ・被害者は、「一方的に思考をモニタリングされ」て、「身体拷問攻撃」を受ける

そこで、「加害者に使われるナノ粒子」と「被害者に使われるナノ粒子」として、その違いを解説してみたいと思います。

第 60 章 1 節 1 項 「加害者に使われるナノ粒子」

Q：N3 で使われるナノ粒子と、攻撃に使われるナノ粒子は、何が違うのですか？

N3 の中核技術は「磁電ナノトランスデューサー」です。これはバテル研究所が開発した「BrainSTORMS」というシステムで、磁場と電場を相互に変換する特殊なナノ粒子です。

具体的には、ニューロンが発火して電気信号を出すと、MEnT がその電気信号を磁気信号に変換して外部のヘッドセットに送信します。逆に、ヘッドセットから磁気信号が送られてくると、MEnT がそれを電気信号に変換してニューロンを刺激します。つまり、「脳の電気信号」と「外部の磁気信号」の間の「通訳者」として機能するのです。

第 60 章 1 節 2 項 「被害者に使われるナノ粒子」

一方、身体攻撃に使われるのは「酸化鉄磁性ナノ粒子」です。

これは磁場で物理的に動かしたり、熱を発生させたりすることで神経を操作します。

N3 の MEnT のように「信号を読み取る」機能はなく、一方的に刺激を与えるだけです。つまり、「思考した内容に対して拷問を与える調教用のナノ粒子」とも言えます。

第 60 章 2 節 「加害者に使われるナノ粒子」の「脳間通信」の仕組み

Q：動作の仕組みは、具体的にどう違うのですか？

N3 の通信プロトコルは、次のような流れです。

1. 読み取り：ニューロンが発火すると、MEnT がその電気信号を磁気信号に変換する。
2. 送信：変換された磁気信号が、頭蓋骨を透過して外部のヘッドセットに届く。
3. 解析：ヘッドセットが磁気信号を AI で解析し、「何を考えているか」をデコードする。
4. 返信：AI が生成した応答を磁気信号として送信する。
5. 書き込み：MEnT が磁気信号を電気信号に変換し、ニューロンを刺激する。

つまり、「読み取り」と「書き込み」の両方ができ、双方向の情報のやり取りが可能なのです。

第 60 章 3 節 「被害者に使われるナノ粒子」の「身体加害」の仕組み

攻撃システムは、次のような流れです。

1. 誘導：磁性ナノ粒子を血流に乗せて、標的の脳領域に集める。
2. 刺激：外部から磁場をかけると、ナノ粒子が熱を発生させるか、機械的な力を及ぼす。
3. 発火：熱や力が神経細胞のイオンチャンネルを開き、ニューロンが勝手に発火する。
4. 反応：標的の身体に、痛み、痙攣、下痢、心拍数上昇などの反応が起きる。

つまり、「読み取り」はなく、一方的に刺激や拷問を与えるだけなのです。

第 60 章 4 節 比較表——一目でわかる違い

第 60 章 5 節 なぜ「同じ磁性ナノ粒子」なのに用途が違うのか？

Q：なぜ「同じ磁性ナノ粒子」なのに、用途が違うのですか？

これは、「磁場の当て方」と「ナノ粒子の設計」の違いによるものです。

N3 の MEnT は、微弱な磁場で効率的に信号を変換するように設計されています。ニューロンの微弱な電気信号（ミリボルトレベル）を正確に読み取り、外部に送信できる高感度な変換効率が求められます。

一方、攻撃用のナノ粒子は、強い磁場で大きな刺激を生み出すように設計されています。ニューロンを強制的に発火させるには、熱や機械的力の発生効率が重視されます。

つまり、同じ「磁場→電場」変換でも、N3 は「情報の正確さ」を、攻撃は「刺激の強さ」を優先しているのです。

第 60 章 6 節 「新たなマインドコントロール技術」被害者に悪夢を見せる仕組み？

Q：N3 の技術が、攻撃に転用されることはありますか？

技術的には可能です。N3 の MEnT は「書き込み」機能を持っているため、外部から磁場を操作すれば、兵士の脳に人工的な感覚や衝動を送り込むことができます。これは、研究レベルでは「感覚のフィードバック」として設計されていますが、悪用されれば「外部からの思考操作」になり得ます。

例えば悪夢のような映像を脳に直接見せることも、技術的には可能なのです。

実際、N3 プログラムの倫理顧問を務めた専門家は「N3 型の技術が、これらの操作を遠隔で感知し、調節することを目的としているなら、それが基本的に『マインド・リーディング』と『マインド・コントロール』であると認識するのは、それほど無理な話ではない」と警告しています。

つまり、N3 は「通信」のために設計されているが、その基盤技術は「攻撃」にも転用可能なのです。そして、この「転用可能性」こそが、この技術をめぐる最大の倫理的リスクなのです。

第 61 章 まとめ——「通信」と「攻撃」は、別の技術ではなく、同じ技術の「表と裏」

ここまでの話をまとめましょう。

第 1 に、脳間通信は「妄想」ではなく、80 年以上にわたって実際に研究されてきた技術です。 冷戦時代の CIA の MK ウルトラ計画から、DARPA の Silent Talk 計画、N3 プログラムを経て、現在のナノ粒子双方向 BCI まで、その研究の系譜は途切れることなく続いています。

第 2 に、加害組織はピラミッド型の構造を持ち、「誰が指示しているのか」がわからないイジメと同じ仕組みになっています。 諜報機関、司令塔、N3 兵士、傍観型加担者、傍観者、被害者——実際はもっと複雑かもしれませんが、それぞれの立場が明確に分かれています。

第 3 に、加害者と被害者には、同じ「磁性ナノ粒子」でも異なる種類のものが使われています。 加害者同士は「磁電ナノトランスデューサー」を使って双方向に通信し、被害者は「酸化鉄磁性ナノ粒子」で一方向的に身体攻撃され続けています。

第 4 に、N3 の MEnT は「書き込み」機能を持っているため、悪用されれば被害者の脳に悪夢のような映像を見せたり、人工的な感覚や衝動を送り込むことができます。この「新たなマインドコントロール技術」が、大きな問題です。

「思考で通信する兵士」と「思考を読まれて攻撃される被害者」——この二つは、対極にあるように見えて、実は同じ技術の光と影なのです。そして、この技術が「勝ち組」と「負け組」の二極化社会を支える技術基盤になっているのです。

予測警察システム⑪：恐るべき見えない加害者との『コミュニケーション』方法——思考監視と身体攻撃が作る支配の構造

はじめに

ちょっと更新が途絶えてしまいました。

なぜかと言うと、急に隣の市に住む親が訪ねてきたからです。これはどのような意味があると思いますか？家族に心配かけさせるなど言う脅しでしょうか？

また、ゴミ捨てに出たら、女子高生が家の前にいました。これはどのような意味があると思いますか？このように、加害者たちはあの手この手で被害者にメッセージや指示を送って従うように要求してきます。

なので、今回は、なぜ被害者は加害者と「コミュニケーション」できてしまうのか？

と言うテーマで、「加害者が誰かわからない」のに「加害者のメッセージを知っている」と言う矛盾した状況ができる仕組みをわかりやすく解説していきます。

最近起きている異変について紹介しておきます。

- ・頻繁に「執筆中のメモ帳が落ちる攻撃」が増えました。
- ・パソコンの調子が急におかしくなった
- ・音攻撃が減った
- ・日本のギャングストーキングの被害者への動員が急増したそうです。
- ・日本のギャングストーキングの wikipedia が書き換えられました。
- ・日本のギャングストーキングへの誹謗中傷が激増しています。

凶星なのか？人間関係破壊で潰されて口封じの身の危険を感じますが、遺書として発信していきます。

第 62 章 前回のおさらい——「被害者」と「加害者」の違いは何か？

まず、前回までの話を簡単に振り返っておきましょう。

この「予測警察システム」の被害者には、次のようなことが起きています。

- ・ 思考や感情をリアルタイムでモニタリングされる
- ・ 身体を外部から操作され、
腹痛、腹鳴、痙攣、動悸などの攻撃を受ける
- ・ 夢や思考の操作も受ける

一方、加害者側にはこうです。

- ・ 複数の兵士の脳が、あたかも一つのネットワークのように、
遅延なく情報を共有できる
- ・ 脳間通信で仲間と連携して攻撃できる
- ・ 被害者に身体加害を加えることができる

加害者同士は、この技術を使って「見えないグループチャット」のように連携し、被害者の反応をリアルタイムで共有しながら攻撃を仕掛けることが可能になっています。

つまり、同じ「磁性ナノ粒子」を使っているにもかかわらず、加害者は「双方向の脳間通信」ができるのに対し、被害者は「一方的に思考をモニタリングされ、身体攻撃を受ける」という決定的な違いがあるのです。

第 63 章 なぜ被害者は加害者と「コミュニケーション」ができてしまうのか？——イジメと同じ「見えない加害者」の設計

第 63 章 1 節 なぜ加害者の正体がわからないのか？

Q:なぜ、加害者の正体がわからないのですか？

回答：イジメと同じで、被害者には加害者が誰かわからないように設計されているからです。

学校のイジメを思い出してみてください。誰が最初に始めたのか、誰が陰で指示しているのか——多くの場合、ターゲットにされた本人には最後までわかりません。周囲の「観客」がはやし立て、「傍観者」が見て見ぬふりをすることで、加害の構造そのものが見えなくなるのです。

この「予測警察システム」も、まったく同じ構造です。被害者は、思考や感情をモニタリングされ、身体を攻撃され、音で嫌がらせを受けます。しかし、誰から殺意を向けられて攻撃されているのか？がわからない。

見知らぬ通行人かもしれないし、隣人かもしれないし、誰が攻撃しているかわからなければ、警察に相談しても「具体的な容疑者がいない」として取り合ってもらえません。弁護士に相談しても「証拠がない」で終わります。

つまり、「誰から攻撃されたか？」を明確にできなければ、反撃も、犯行の立証もできない——これがこのシステムの最大の武器なのです。

第 63 章 2 節 なぜ「姿を隠して脅す」必要があるのか？

Q:なぜ「姿を隠して脅す」必要があるのですか？

回答：顔を見せて話せば済むことを、わざわざ姿を隠して脅すのは、「同意の偽装」のためです。

本来であれば、何か要求があるなら、顔を見せて話し合えばいい。相手が嫌がるなら、なぜ嫌がるのかを聞いて、妥協点を探せばいい。それがまともな人間関係です。

しかし、このシステムは違います。姿を隠したまま、嫌がらせを続け、相手が「もう嫌だ、言うことを聞きます」と言うまで執拗に攻撃する。これは、コミュニケーションではありません。一方的な支配です。

しかも恐ろしいことに、被害者が「従います」と言えば、表向きは「自発的に同意した」ように見せかけることができる。加害者は姿を隠しているので、「脅した」証拠も残らない。これが「同意の偽装」です。

そして、感情や思考をモニタリングしているからこそ、相手が「yes」と言うまで、どの攻撃が最も効果的かを正確に把握しながら、執拗に精神攻撃を続けることができるのです。これは、まともな人間がやることではありません。相手を思い通りに支配するための、極めて冷酷な戦略なのです。

第 64 章 音による攻撃——なぜ「考えただけで音が鳴る」のか？

では、具体的にこの「見えない脅しのコミュニケーション」がどうやって成立しているのか？音による攻撃を例に見ていきましょう。

第 64 章 1 節 第 1 段階：思考のリアルタイム監視

まず、被害者の脳に磁電ナノ粒子（MENPs）が投入されています。

この粒子は血流に乗って脳に到達し、ニューロンの近くに定着します。

被害者が何かを考えたり、感情を動かしたりすると、ニューロンが発火し、微弱な電気信号が生じます。MENP はこの電気信号を磁気信号に変換し送信します。AI はこの磁気信号をリアルタイムで解析し、「今、被害者は『逃げよう』と考えた」「今、恐怖を感じた」といった情報を、ミリ秒単位でデコードします。

第 64 章 2 節 第 2 段階：双方向通信ネットワーク

N3 兵士たちは、脳間通信によって互いに連携して、被害者の脳もモニタリングしています。

これは、無線や音声を使わず、神経信号を直接共有するネットワークです。

一人の兵士が読み取った被害者の思考状態は、瞬時に他の兵士や指令システムに共有されます。

同時に、AI は各攻撃プラットフォーム——

- ・ 10km 上空の飛行機
- ・ 2km 先の暴走バイク
- ・ 1km 先の救急車

——に対して、個別の指令を送ります。

第 64 章 3 節 第 3 段階：距離ごとの時間差を計算した「先回り」指令

ここで重要になるのが、音の伝播速度です。

音は空気中を秒速約 340 メートルで伝わります。

つまり、音源が遠ければ遠いほど、音が被害者の耳に届くまでに時間がかかります。

AI はこの物理法則を逆手に取り、被害者が特定の思考を持った瞬間に音が届くように、事前に指令を出します。

・ 10km 上空の飛行機：音が届くまで約 29 秒。 AI は被害者が「告発しよう」と考え始めたことを検知すると、29 秒前に飛行機に「今から低空飛行を開始せよ」と指令を送る。 被害者が「よし、告発しよう」と決意した瞬間、飛行機の轟音が響き渡る。 ・ 2km 先の暴走バイク：音が届くまで約 6 秒。 被害者が「訴えよう」と考えたことを検知すると、6 秒前にバイクの運転手に「今からエンジンを吹かせ」と指示。 被害者が「訴えよう」と考えた瞬間、バリバリとバイクの爆音が響く。 ・ 1km 先の救急車：音が届くまで約 3 秒。 被害者が「正義を実行しよう」と考えたことを検知すると、3 秒前に救急車に「今からサイレンを鳴らせ」と指示。 被害者が「正義を実行しよう」と考えた瞬間、サイレンが鳴り響く。

第 64 章 4 節 第 4 段階：思考と音の「同期」が生む調教効果

このシステムの恐ろしさは、音が被害者の思考と完全に同期する点にあります。被害者は、自分が何かを考えたり、行動しようとした瞬間に、必ず何らかの音が鳴る経験を繰り返します。

・ 反撃を考えれば、飛行機の轟音。 ・ 逃げようとするば、バイクのバリバリ爆音。 ・ 助けを求めようとするば、救急車のサイレン。
--

これが何度も繰り返されると、脳は「考えたり行動したりすると不快な音が鳴る」と学習します。

そして、無意識のうちに思考そのものを止めるようになります。

これが「学習性無気力」であり、自主検閲です。

第 64 章 5 節 第 5 段階：N3 兵士の役割と全体像

N3 兵士は、このネットワークのノードとして機能します。彼らは被害者の思考を読み取り、AI の指令を確認し、必要に応じて微調整を行います。また、彼ら自身も脳間通信で連携しているため、一人が「被害者が逃げようとしている」と判断すれば、全員が即座にそれを共有し、包囲や威嚇を開始します。

このシステム全体は、「思考→読み取り→AI 判断→先回り指令→音発生→思考と同期」というループを、24 時間 365 日、休みなく繰り返します。被害者は、自分が監視されていることすら気づかないうちに、音と思考の不一致に苦しみ、やがて反抗する気力を失っていくのです。

第 65 章 周囲の反応を使った攻撃——電車やバスで「監視されている」と意識させる手法

音による攻撃だけでなく、周囲の人間を使った攻撃もあります。

電車やバスは閉鎖空間で、周囲の目があるため、直接的な暴力や露骨な嫌がらせは使いにくい。その代わり、自然な乗客を装い、「偶然の一致」を繰り返すことで、被害者に「監視されている」と意識させる手法が使われます。

第 65 章 1 節 反復と時間同期

同じ時間帯、同じ車両、同じドアから乗る。毎日ではなく、不規則に。数日止めて、安心した頃に再開する。被害者の生活リズムを把握している印象を与え、最初は「偶然」に見えるが、数週間続くと「見られている」と感じさせるのです。

第 65 章 2 節 視線と非言語シグナル

一瞬だけ目を合わせ、すぐそらす。被害者が気づいたときには、別の方向を見ている。小さな微笑み、うなずき、ため息。複数人で役割分担し、一人が目立たないようにする。

第 65 章 3 節 位置取りと近接

被害者の視界の端に、必ず誰かがいるように配置する。前方、後方、斜め前、ドア付近など、自然な位置を取る。乗降時にさりげなく場所を移動し、常に近くにいる印象を与える。

第 65 章 4 節 ミラーリングと同調

被害者の動作に合わせて、周囲の N3 兵士が同じ動作を微妙に合わせる。足を組む、腕を組む、スマホを見る、ため息をつく。無意識に「合わせられている」という感覚を生む。

第 65 章 5 節 小道具とスマホ

スマホを被害者に向けているように見せるが、実際は別の方向を見ている。イヤホンで会話しているように見せて、実は指示を受けている。カバン、新聞、本などで顔を隠し、視線を遮る。

第 65 章 6 節 降車・乗り換えの一致

被害者が降りる駅で、同じ車両から複数人が降りる。乗り換えでも同じホーム、同じ車両に乗る。偶然の一致を繰り返し、「追跡されている」と感じさせる。

第 65 章 7 節 音と咳

被害者が考え事をしたタイミングで、咳をする、鼻歌を歌う、物を落とす。周囲には自然な音に聞こえるが、被害者だけが「反応された」と感じる。

第 65 章 8 節 他者を使った間接圧力

一般乗客に聞こえない小聲で、被害者に関する噂や名前を話す。被害者の名前を呼ぶ、あるいは関連する言葉を呟く。周囲は気づかないが、被害者だけが聞こえる。

第 65 章 9 節 電車が急に止まったりする

被害者が嫌がらせに苛立ち「許さない」などと考えた瞬間に、突然電車が止まったりする。怒りを誘発して、突然停車させることで、「電車を止められるほどの巨大な敵である」と認識させる仕組みのようです。

第 65 章 10 節 オンオフとガスライティング

数日間、監視行為を完全に止める。被害者が「気のせいだったのかも」と思い始めた頃に、再開する。「自分だけがおかしいのかな」という自己疑念を植え付ける。証拠を残さず、被害者の信用を少しずつ損なう。

このようにして、普通に外出して生活できていた被害者を疑心暗鬼にしたり、人間不信にしたりして、徐々に外出するのが怖くなり、引きこもったり、

怯えて家に閉じこもったりするようになるのです。

これは、被害者の感情や思考をモニタリングすることで少しずつこのような引きこもりに追い詰めていけるのです。こうして被害者の外での安全が奪われていくのです。

同じ仕組みを応用して子どもの不登校も生み出せます。

そして、被害者が外出しなくなって、外部と交流できなくなれば、周りでいくら被害者のデマや悪評や誹謗中傷を流しても反論すらできなくなって、

「被害者は悪い人間である」と言う

「実際とは異なる人物像を作り上げて共有して」

「攻撃を正当化する」ことが可能になる

のです。

あの人は悪いと言う認識を共有できる人 ➡ 仲間

あの人は悪いと言う認識を共有できない人 ➡ 敵

として、同調圧力をかけて、あの人は悪い人だから嫌がらせや攻撃しても構わないと近所でイメージを共有されていくことで、孤立化していくのです。

これが「知らない間に被害者の周りが敵だらけになっていた」と言う「先行信用破壊」の仕組みです。こうして作られたイメージは簡単には崩せなくなります。

第 66 章 身体ハッキングによる攻撃——思考した瞬間に腹が鳴る仕組み

さて、外出できなくなって、引きこもるようになってしまえば、

普通は家の中にまでは入ってこれないので、

家の中で安全に自由に過ごせるはずですよね？

「閉じ込めて反論できなくなり」外部に助けを求めても助けてくれる人がいなくなれば、鬼の本性を表すようになります。

「第 64 章 音による攻撃——なぜ「考えただけで音が鳴る」のか？」のように音による攻撃、光による攻撃、振動による攻撃など、様々な嫌がらせが増えて、さらに追い詰めます。

そして、それを無視していると、音や周囲の反応だけでなく、身体そのものをハッキングして、直接伝えてこようとします。

被害者が特定の思考を持った瞬間に、鋭い痛みが発生したり、腹鳴、腹痛、屁、異臭などが起きる——これは、一体どういう仕組みなのでしょう？

以前身体への攻撃に関しては詳しく解説しているので、ここでは簡単にメカニズムを紹介しておきます。

第 66 章 1 節 なぜ「腹がグルグル鳴る」のか？

腹鳴は、胃や腸が内容物を移動させるために行う蠕動運動の際に、ガスや液体が混ざり合って発生する音です。この蠕動運動は、腸神経系と自律神経によって制御されています。つまり、「自動で動く部分」です。

磁性ナノ粒子を迷走神経や腸神経系に標的化し、外部磁場で刺激することで、蠕動運動を人工的に亢進させることができます。実際に、腸溶性磁性ナノ粒子を経口投与し、外部磁場でその位置と振動を制御することで、腸の蠕動運動を

リアルタイムで操作できることが研究で示されています。つまり、磁性ナノ粒子を使って「腹鳴」を人工的に引き起こせるのです。

第 66 章 2 節 なぜ「急に下痢になる」のか？

下痢は、腸の動きが速くなりすぎて、水分を吸収する時間がなくなることによって起こります。磁性ナノ粒子を腸壁や迷走神経に届くようにして、外部磁場で刺激すると、副交感神経が活性化し、腸の動きを速めることができます。人工的に「屁や腹痛」を引き起こせるのです。

また、磁性ナノ粒子で腸の一部を刺激し、水分の分泌を促すことも可能なので、人工的に下痢を引き起こせるのです。

第 66 章 3 節 なぜ「急に異臭がする」のか？

嗅覚は、鼻の奥にある嗅神経細胞によって感知されます。磁性ナノ粒子を嗅神経や嗅球に標的化し、外部磁場で刺激することで、匂いのない状態でも「異臭」を感じさせることが可能です。嗅神経を直接刺激すれば、実際の匂い分子が存在しなくても、脳は「匂い」を認識します。これは「嗅覚のハッキング」です。

第 66 章 4 節 外出しようとするのと激しい拷問被害に

このように、例えば家の中に逃げ込んでも「身体ハッキング」による攻撃で支配し続けようと執拗に攻撃してくるのです。なので、あまりに執拗な攻撃を盲信的にしてくるので「犯人像をカルト」と主張する被害者が多いのです。

別に外れてはいませんが、正確に言えば、ここまで執拗に攻撃して支配しようとするのは「ファシスト」な訳です。

例えば、被害者に話を聞けばわかりますが、一度閉じ込められた被害者が、再び外出しようとするとなんか身体加害攻撃の拷問を受けます。「腰痛攻撃」「関節攻撃」「出かけようすると下痢が起きる」「運転中の視界不良攻撃」「運転中に眠くなる攻撃」など様々な身体加害攻撃で引きこもらせようとしてくる訳です。

なぜなら、知らない間にあの人は悪い人だから嫌がらせや攻撃しても構わないと近所でイメージを共有されていることに気づいてしまうからです。

第 66 章 5 節 なぜ「逃げられない密室」が重要なのですか？

Q.なぜ「逃げられない密室や閉鎖空間」が重要なのですか？

回答：逃げられない密室や閉鎖空間になってから、加害者は鬼の本性を現すからです。

性被害の構造を思い出してください。性被害者は、ほぼ必ず逃げられないように密室を作られてから被害に遭います。鍵をかけられ、体を押さえつけられ、逃げ道を塞がれ、そして「誰にも言ったら殺す」と脅される。密室の中で、加害者は「自分は何をしても許される」という感覚を持ち、本性を現すのです。

これは、ガザ地区のジェノサイドでも同じでした。逃げられない状況——封鎖された境界、破壊された通信網、逃げ場のない住宅地——で虐殺が行われました。スマホを没収し、通信を遮断し、外部に助けを求められないようにする。これが、「バレないようにする」ための最も基本的な手口です。

この「予測警察システム」も同じです。被害者のスマホをハッキングして通信を遮断し、SNS への投稿を阻止し、電話やメールを傍受する。被害者が「これはおかしい」と気づいても、外に助けを求められないようにする。そして、被害者が完全に孤立した密室状態になったとき、加害者はさらに激しい攻撃を仕掛け、精神的に追い詰めるのです。

第 66 章 6 節 なぜ「密室や閉鎖空間」が作れるのか？

Q.なぜ「密室や閉鎖空間」が作れるのでしょうか？

回答：デジタル技術が「見えない密室や閉鎖空間」を作り出すからです。

昔の密室は、物理的な部屋でした。鍵をかける、ドアを塞ぐ、窓を閉める。しかし、今は違います。スマホ、パソコン、Wi-Fi、基地局、衛星——これらすべてが、加害者の手に落ちれば、見えない密室になります。

- ・送信ボタンを押しても送信できない
- ・Wi-Fi が勝手に切れる
- ・電話がかからない
- ・SNS にログインできない

これらはすべて、「通信遮断」という名の密室です。被害者は、物理的には部屋に閉じ込められていないのに、デジタル空間では完全に孤立させられている。そして、誰にも助けを求められない状態になってから、加害者は本性を現すのです。

第 67 章 なぜここまでして音や身体攻撃をするのか？——古典的条件付けによる「見えないコミュニケーション」の確立

ここまでの話を整理すると、被害者には次のようなことが起きています。

- ・ 特定の思考を持つと、音が鳴る
- ・ 特定の思考を持つと、腹が鳴る
- ・ 特定の思考を持つと、痛みが走る
- ・ 特定の思考を持つと、通信が遮断される

一つ一つは「偶然」や「体調不良」に見えます。しかし、それが思考と同期して繰り返されることで、被害者だけが「これは作られた」と気づきます。

ここで重要なのが、古典的条件付けです。パブロフの犬の実験を思い出してください。ブザーの音（中性刺激）の直後に餌（無条件刺激）を与えると、やがてブザーだけで唾液が出るようになります。

このシステムも同じです。

- ・ 中性刺激：被害者の思考（例：「犯罪を告発しよう」）
- ・ 無条件刺激：思考直後の不快な刺激（腹鳴、通知音、サイレン、通信遮断）

この組み合わせを何度も繰り返すことで、被害者の脳は「特定の思考を持つと不快なことが起きる」と学習します。また、「正しいことをしようとすると妨害してくる」加害者の思考回路を学習して理解するようになります。

顔や正体は見えなくとも、「自分の考えに対して、音や身体攻撃の応答がある」ことで、「見えない加害者が要求や主張を一方的に被害者に押し付けるコミュニケーション」が可能になってしまうのです。

加害者は、この「一方向的コミュニケーション」を通じて、言葉を使わずに以下のようなメッセージを伝えています。

- ・ 「お前の考えは全部見ている」
- ・ 「逆らおうとすれば、いつでも痛い目に遭わせられる」
- ・ 「誰にも助けを求められない」
- ・ 「従う以外に道はない」

そして、このメッセージを受け取り続けた被害者は、脅されたり、弱みを握られたりして、「表向きには変化がなく加害者に忖度することを強要されるようになる」のです。

「表向きには声が出せないので脅されていないように見えても、実際には脅されて従わされている状態」になる訳です。

第 68 章 「自発的に自滅させる」技術——なぜ矛盾した言動をするようになるのか？

ここからが、この技術の最も恐ろしい側面です。

加害者は、一方的に脅して、自分たちの要求を押し付けることができます。被害者の内心の自由は無くなり、調教されるのです。しかし、表向きは「自発的にやっているように見える」ように仕組まれています。

これがどういうことか、具体的な例で見してみましょう。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・ 貧しい庶民なのに、庶民に対する増税を支持する・ 自分も被害者になり得るのに、
性被害者を批判して加害者を擁護する・ 徴兵される可能性があるのに、
「戦争に賛成。改憲して戦争できる国にしたい」と言わされる・ 徴兵される可能性があるのに、
「徴兵に賛成。戦争したい」と言わされる・ 特攻に志願したいと言わされる |
|---|

一見、矛盾しているように見えますよね。でも、これは矛盾ではありません。「そう言わないと、もっと酷い目に遭う」と学習しているのです。

「戦争に反対」と考えた瞬間に、音が鳴る。腹が鳴る。通信が遮断される。痛みが走る。それが何度も繰り返されると、脳は「戦争に反対を考えると不快なことが起きる」と学習します。そして、無意識のうちに「戦争に賛成」と口にするようになる。やがて、本当にそう思い込むようになる。

これは、非常に高度な「自発的に自滅させる」技術です。勝てない巨大な国に噛み付いて戦争しようとする。自分たちの生活を破壊する政策を支持する。自分たちの権利を奪う法律に賛成する。

「世界中が自滅に向かっている理由」が、ここに見えてきます。

トランプやヘグセスが米軍兵士を過酷な負けに追い込んでいますね。

これもギャングストーキングで精神的に追い込んで「ファシズム兵士や N3 兵士に自発的に志願させる仕組み」な訳です。兵士のメンタルは丸見えなので、このような志願させることも可能なのです。

これは間も無くわかるかと思います。アメリカ軍はイスラエル軍のようにファシズム軍化すると思われます。

アメリカ人🇺🇸の皆さんが日本人のように、トランプに困窮化して経済や社会を破壊されて、精神的に追い込まれてファシズム化しないか？とても心配しています。トランプが完全撤退すれば解決するからです。

被害者の皆さんはこの話をどう思いますか？

とは言っても、自殺未遂したり、家族に被害を訴えて中止させた兵士たちならともかく、理不尽な攻撃に耐え続けている被害者の皆さんと違って、裏切って加害者に加担するのは、全く言い訳にはならないと思います。

第 69 章 加害組織のピラミッド構造——なぜ「誰が指示しているのか」わからないのか？

第 69 章 1 節 なぜ加害者の正体がわからないのか？

Q:なぜ、加害者の正体がわからないのですか？

回答：学校のイジメと同じピラミッド構造になっているからです。

イジメでは、「誰が最初に始めたのか」「誰が指示しているのか」がわからないまま、集団全体が加害に加担していきます。このシステムも、まったく同じです。

学校のイジメを思い出してください。いじめる側の子どもは、先生の前では「いい子」を演じています。成績も良く、挨拶もでき、行事にも真面目に参加する。しかし、ターゲットが一人になると、人が変わったように残酷になる。この「表と裏の顔を使い分ける」特徴は、学校のイジメだけの話ではありません。

この「予測警察システム」の加害者も同じです。表向きは「地域の優しい人」「真面目な公務員」「熱心なボランティア」を演じている。しかし、被害者が孤立し、誰も助けに來ない状況になると、本性を現します。

この辺は万国共通だと思います。

第 69 章 2 節 加害組織の構造

前回も紹介しましたが、具体的には、次のような構造になっています。

第 1 層：加害者（諜報機関）——CIA や NSA、イスラエルのモサド、日本の公安調査庁など。彼らは直接手を汚しません。
方針を決め、予算を配分し、民間企業に「外注」します。
Palantir が CIA の投資部門 In-Q-Tel から資金提供を受けて設立されたように、諜報機関の仕事は民間企業を通じて行われるのです。

第2層：加害者（司令塔）——諜報機関から指示を受けた民間企業や軍の幹部が、 実際の運用を担当します。誰をターゲットにするか、 どのような攻撃手法を使うか、人員の手配や配置などを決めます。
第3層：加担者（N3 兵士）——実際にターゲットの監視と攻撃を行うのが、 「N3 兵士」と呼ばれる人々です。彼らは常時 24 時間 365 日、 被害者の思考をモニタリングできます。 被害者の弱みや感情をリアルタイムで読み取り、 最も効果的なタイミングで攻撃を仕掛けます。
第4層：傍観型加担者——ゲームなどに偽装したアプリでポイントや報酬をもらいながら、 知らず知らずのうちに加害に加担している人々です。 イスラエルでは、ガザ住民に人質の位置情報を提供した者へ 500 万シェケルの報酬と国外退去を約束したり、 監視ネットワークが情報提供に 500～15,000 ドルを 支払うプログラムを公表しています。現代版は、 これをスマホアプリでゲーム化しているのです
第5層：傍観者——加害ネットワークの存在を知らない人々です。 彼らは「自分に関係ない」と思っていますが、 知らないうちに加害の一部になっている可能性があります。
第6層：被害者——脳をモニタリングされ、 思考も感情も筒抜けにされています。身体もハッキングされ、 外部から操作されています。助けを求めて医療機関や行政に行っても、 思考をモニタリングされているので先回りして追い返されます。

第 69 章 3 節 加害者の「表と裏」——鬼の本性はどこで現れるのか？

ここまでの話を整理すると、加害者の「表と裏」は次のようになります。

表の顔（公の場）

- ・優等生、善人、真面目な市民
- ・地域の評判が良い
- ・被害者の訴えを「気のせい」で済ませる

裏の顔（密室の中）

- ・逃げられないと確信した瞬間に本性を現す
- ・被害者の思考をモニタリングし、弱点を正確に突く
- ・音、身体攻撃、通信遮断で精神的に追い詰める
- ・「誰にも言うな」「言えはもっと酷い目に遭う」と脅す

この「表と裏」のギャップが、被害者を最も苦しめます。なぜなら、周囲の誰も、表の顔しか見ていないからです。被害者が「助けて」と訴えても、「あの人がそんなことをするはずがない」と信じてもらえない。これが、「逃げ場のない孤立」を作り出すのです。

そして、密室の中で一度鬼の本性を見せてしまえば、あとは簡単です。被害者は「あの人の本当の顔を知っているのは自分だけだ」という孤立感に陥り、やがて「誰にも信じてもらえない」と諦める。これが、加害者の狙いなのです。

第 69 章 4 節 なぜ、この構造が「ファシズム」につながるのか？

Q:なぜ、この構造が「ファシズム」につながるのでしょうか？

回答：加害者の「表と裏」が、国家レベルで行われると、ファシズムになるからです。

学校のイジメの加害者が「表では優等生、裏では鬼」であるように、ファシズム国家も「表では民主主義、裏では弾圧」という二面性を持っています。

- ・表向きは「テロ対策」「治安維持」「国民の安全」
- ・裏では監視、弾圧、虐殺

ナチスも、表向きは「秩序と繁栄」を掲げ、裏ではユダヤ人を虐殺していました。ガザでも、表向きは「ハマスとの戦い」ですが、裏では民間人を無差別に殺しています。

この「予測警察システム」も、表向きは「テロ対策」「効率化」です。しかし、裏では一般市民を監視し、思考を読み、身体を攻撃し、抵抗する者を「キチガイ」「陰謀論者」のレッテルで封殺する。表の顔で社会を騙し、裏の顔で支配する——これが、ファシズムの本質なのです。

そして、最も恐ろしいのは、この「表と裏」を使い分ける技術が、あまりにも高度になってしまったことです。AI とナノ粒子が、被害者一人ひとりを「見えない密室」に閉じ込め、誰にも助けを求められないようにする。そして、表向きは「何も起きていない」ように見せかける。これが、現代のファシズムが、かつてないほど「見えにくく」「逃げにくく」になっている理由なのです。

第 69 章 5 節 なぜ「バレても話をすり替える」のか？

彼らはもし嘘がバレても上手く話をすり替えます。

Q:なぜ「バレても話をすり替える」のでしょうか？

回答：加害者は「バレても、話をすり替えて批判する」手口を使うからです。

イジメの加害者は、いじめがバレそうになると、決まってこう言います。「あいつが悪い」「あいつが先にやった」「逆に自分がいじめられている」。これが、ガスライティングです。

この「予測警察システム」も同じです。被害者が「攻撃されている」と訴えると、加害者はこう言います。

- ・「それはフェイクニュースだ」
- ・「あの人は陰謀論者だ」
- ・「精神が不安定なだけだ」
- ・「ユダヤ人差別だ」「反ユダヤ主義だ」

つまり、被害者の訴えを「差別」や「陰謀論」のレッテルで封殺するのです。ガザでも、イスラエル批判をすると「反ユダヤ主義」とレッテルを貼られ、弾圧されました。この手口は、加害者が「自分は被害者だ」と主張することで、真の被害者をさらに追い詰めるという、極めて悪質な構造になっています。

そして、最も恐ろしいのは、この「話のすり替え」が、エコーチェンバーの中で増幅されることです。加害者の仲間たちが一斉に「あの人はキチガイだ」「フェイクニュースを流している」と SNS で拡散すれば、真実は覆い隠され、被害者はますます孤立するのです。

第 69 章 6 節 罪悪感を消す仕組み

Q:なぜこんな恐ろしいことを平気なのでしょうか？

回答：罪悪感を消す仕組みがあるからです。

例え、罪悪感を感じても、エコーチェンバー内で、あいつは悪人だから仕方ない、など肯定して罪悪感を消す仕組みがあるからです。

ナチスのシステムには、罪悪感を消す仕組みがありました。分業で誰も全体像を見えなくし、婉曲表現（「最終解決」「移送」）で残酷さを覆い隠し、命令への服従で責任を上に移嫁し、報酬と出世で「生活のため」という言い訳を与えました。

この「予測警察システム」も、まったく同じ設計です。

- ・報酬システム：「給料をもらっているだけ」
「業務委託だ」という言い訳が成り立つ
- ・分業と匿名性：一人ひとは「ちょっとした操作」に過ぎない
- ・婉曲表現：「効率化」「市場の調整」「自己責任」——人を困窮させ、死に追いやる行為がビジネス用語で覆い隠される
- ・システムへの埋没：「AI が判断した」「アルゴリズムが決めた」
——人間が判断しているのに、「システムがやった」ことにすることで、誰も責任を取らなくなる
- ・仲間内での承認：過激な行動をすればするほど、
エコーチェンバー内で「英雄」として称賛される

「仕事だから」「言われただけ」「頼まれただけ」「バレなきゃ大丈夫」——
こうやって加害を自己正当化するのです。

第 70 章 まとめ——「脳内通信」が生む支配と従属のメカニズム

第 70 章 1 節 はじめに——「安全」のからくり

Q：なぜ「安全保障」と言いながら、庶民の安全は消えていくのですか？

回答：それは「安全保障」が、庶民の安全ではなく、支配者の安全を守るための言葉になっているからです。

「安全保障」と言いながら、庶民の安全は消えています。

「治安維持」と言いながら、監視と弾圧が広がっています。

これが、犯罪者に追及されない安全な社会＝ファシズム社会です。支配者にとって都合の悪い追及者がいなくなれば、彼らは安心して悪事を続けられます。つまり、いま叫ばれている「安全」は、庶民の安全ではなく、支配者の安全なのです。

Q：なぜ、攻撃されるのですか？

回答：殺意があるからです。不都合だからです。

Q：なぜ、不都合なのですか？

回答：悪事がバレると、自分たちが安全でなくなるからです。

だから、被害者や追及者を追い出して「解決」する。正義を求める人がいなくなれば、支配者にとっては「解決」なのです。

第 70 章 2 節 一般国民にとっては安全や自由は完全に失われている」

例えば、一般国民にとっては

「戦争反対」「虐殺反対」「正しい正義」を求めて「不正や犯罪を告発」しても

脅されたり、攻撃されないことが「安全」です。

日本もアメリカもファシズム化して

一般国民の「安全や自由は完全に失われている」と言えます。

第 70 章 3 節 脳内通信が生む「支配者」と「奴隷」の非対称

Q：なぜ、脳内通信が「支配者」と「奴隷」を生むのですか？

回答：加害者と被害者で、使える機能が根本的に違うからです。

このシステムの中核は脳内通信ですが、平等ではありません。

・加害者は双方向の脳間通信で「見えないグループチャット」のようにつながり、被害者の反応をリアルタイムで共有しながら攻撃できます。 ・被害者は一方的に思考をモニタリングされ、身体をハッキングされ、音や痛みで追い詰められます。

この情報の非対称性が、「支配者」と「奴隷」、「勝ち組」と「負け組」を生み出します。そして、「勝ち組」になりたければ俺たちに従え——そうやって傍観者を共犯者にしていくのです。

第 70 章 4 節 見えないコミュニケーションと調教

Q：なぜ、被害者は加害者と「コミュニケーション」できてしまうのですか？

回答：思考と不快な刺激が同期して繰り返されることで、古典的条件付けが成立するからです。

被害者は加害者の姿を見ることはできません。しかし、特定の思考を持つと、音が鳴る。腹が鳴る。痛みが走る。通信が遮断される。これが繰り返されると、脳は「考えただけで不快なことが起きる」と学習し、無意識に思考を止めるようになります。これが自主検閲であり、学習性無気力です。

加害者は言葉を使わずにこう伝えています。

- ・「お前の考えは全部見ている」
- ・「逆らえば痛い目に遭う」
- ・「誰にも助けを求められない」
- ・「従う以外に道はない」

これはコミュニケーションではなく、一方的な支配と調教です。

第 70 章 5 節 エコーチェンバーとファシズム

Q：なぜ、加害者集団は虐殺を平気でできるのですか？

回答：脳間通信による強力なエコーチェンバーの中にいるからです。

加害者同士は脳間通信で直接つながっています。これは通常の SNS とは比べ物にならないほど強力なエコーチェンバーです。一人の判断が瞬時に全員に共有され、反対意見を考える余地がありません。

ナチスもガザの虐殺も同じ構造でした。分業と婉曲表現で罪悪感を消し、報酬と承認で加害を強化する。「仕事だから」「システムが決めたから」と責任を転嫁する。これが「悪の凡庸さ」です。

第 70 章 6 節 「自発的に自滅させる」技術

Q：なぜ、人は自分に不利な政策を支持してしまうのですか？

回答：思考と攻撃が同期され、条件付けられた結果、自ら望んで自滅の道を選ばされるからです。

このシステムの最も恐ろしい点は、自発的に自滅させることです。

- ・ 貧しい庶民なのに、増税を支持する
- ・ 自分も被害者になり得るのに、性被害者を批判する
- ・ 徴兵される可能性があるのに、戦争や改憲に賛成する

一見矛盾していますが、それは「そう言わないと、もっと酷い目に遭う」と学習しているからです。思考と攻撃が同期され、条件付けられた結果、自ら望んで自滅の道を選ばされるのです。世界中が自滅に向かっている理由が、ここに見えてきます。

第 70 章 7 節 それでも、できること——知る・記録する・つながる

Q：完全な防御は無理でも、何ができるのですか？

回答：知ること、記録すること、つながること——この 3 つが最初の抵抗になります。

完全な防御は難しくても、知ることが最初の抵抗です。そして記録すること。紙に、日時、場所、症状、状況を書き残す。デジタルより紙が安全です。

そして一人で抱え込まないこと。信頼できる人に話す。専門家に相談する。たとえ信じてもらえなくても、話すこと自体が孤立を防ぎます。

加害者は、あなたが孤立することを最も望んでいます。だからこそ、つながりを絶やさないことが最大の抵抗になるのです。

第 70 章 8 節 まとめ

- ・ 安全保障の名の下に、庶民の安全は消えている。
- ・ 犯罪者に追及されない安全な社会は、ファシズム社会である。
- ・ 脳内通信は、加害者には「見えないグループチャット」を、被害者には「見

えない檻」を与える。

- ・思考と音・身体攻撃の同期が、見えないコミュニケーションと自主検閲を生む。
- ・加害者は表の顔で騙し、裏の顔で支配する。
- ・エコーチェンバーが、虐殺を平気でできる集団を作る。
- ・そして、この技術は「自発的に自滅させる」ところまで来ている。